

第31号

2009 Vol.3

平成20年度平和大学講座

特集Ⅰ 平和のために提言する世界宗教者会議

Ⅱ G8北海道・洞爺湖サミットに向けてⅢ

平和の ための 宗教

対話と協力



Religions for Peace

財団法人 世界宗教者平和会議日本委員会

平和のための宗教

対話と協力

目次

特集Ⅰ

平成20年度平和大学講座

平和のために提言する世界宗教者会議

～ G8北海道・洞爺湖サミットに向けて～

開会挨拶

安田暎胤

WCRP日本委員会常務理事（薬師寺管主）……………4

挨拶

宮本けいし

WCRP日本委員会事務総長……………6

基調講演「地球環境問題と宗教（者）の役割」

住 明正

東京大学教授・サステイナビリティ学連携研究機構……………11

パネルディスカッション……………30

「コーディネーター」

眞田芳憲 中央大学名誉教授

「パネリスト」

佐藤純一 国際メタテクニカテクノロジー研究所所長

藺田 稔 京都大学名誉教授

奈良康明 駒澤大学名誉教授

山田経三 上智大学名誉教授

閉会挨拶

西田多戈止

WCRP日本委員会常務理事（一燈園当番）……………46

特集Ⅱ

WCRP、レリジョンズ・フォー・ピースについて

—— 私たちの辿る道に想いを寄せて ——

ウィリアム・ベンドレイ WCRP国際事務総長……………50

「共有される安全保障」(Shared Security)
の観念について

眞田芳憲……………86

人類共通の倫理に対する宗教者の貢献

ホアン・マシア……………104

利他性が欠如した時代の危機

山崎龍明……………122

—— 仏教と経済をめぐって

「共にすべてのいのちを守る」ための5原則

山田經三……………144

共有される安全

Shared Securityの含意と新たな神仏複合
(宗教的多元論)の論理

蘭田 稔……………156

執筆者紹介……………184

WCRP日本委員会平和研究所規約……………188

編集後記……………190

平成20年度平和大学講座

平和のために提言する世界宗教者会議 ～G8北海道・洞爺湖サミットに向けて～

◆開会挨拶

安田暎胤

WCRP日本委員会常務理事（薬師寺管主）

洞爺湖での宗教者による発言は大変、意義があると思っております。世界の国々でいろいろな問題が起きておりますけれども、特に平和の問題について私たちは強い関心を持っております。しかし、現実の政治との関係が大変難しいと思います。

私たち宗教者がこの問題に取り組むには、心の復興から始めなければならぬと思います。心の浄化、心の復興からのスタートになると思いますが、今日は諸先生方の基調講演、パネルディスカッションでのご提言を承りまして、日本から世界の国々に対して、よりいっそう平和のメッセージが発信できるよう、共に勉強させてい

ただきたいと思います。

今日は多数のご臨席を賜りまして、ありがとうございます。

◆挨拶

宮本けいし WCRP日本委員会事務総長

本日は、平和大学講座に大勢ご参加いただきまして、誠にありがとうございます。WCRP日本委員会の事務総長として篤く御礼を申し上げます。

今も安田先生のご挨拶にございましたけれども、このあと基調講演とパネルディスカッションがございます。その前に、私から今回の会議につきまして簡単に説明をさせていただきたいと存じます。

すでに皆さまもご存知のとおり、このたびの「平和のために提言する世界宗教者会議」では、G8北海道・洞爺湖サミットにおいて議論されます気候変動の問題、国連ミレニアム開発目標、核不拡散などの地球規模の緊急課題に対して、宗教者の視座による平和構築のあり方について議論を行いたいと思っております。

平成18年にロシア正教会が中心となつて、こうした宗教者による会議が始まり、プーチン首相（当時大統領）が開会式に出席されて、G8の議長として宗教者による提言書を報告されました。また、昨年、ドイツ・ケルンでも、メルケル首相が直接、宗教者に対してG

8の結果を報告してくださいました。このように3年前から、G8サミットで議論される主な課題に対して宗教者の声を反映させていただく取り組みが展開されております。

このたびもG8の開催に向けて、地球規模の課題に対する政府首脳との意見交換を重ねてまいりました。本年1月にはWCRP国際委員会と日本委員会の実行委員が首相官邸を訪れ、町村官房長官と会談を行ったほか、自民党、民主党の執行部との対話を行ってまいりました。さらに高村外務大臣や鴨下環境大臣との学習会の機会をいただき、G8で日本政府が目指している成果について学習し、私たちも宗教者としての意見をお伝えさせていただきました。

このように政界やNGOなど各界との対話を行うことは、平成18年8月、京都で開催された第8回WCRP世界大会で採択された京都宣言に謳われた内容への取り組みになります。この京都宣言では、地球温暖化や地域紛争などの地球規模の課題に対して宗教者として世界の平和構築に対する責務を積極的に果たすべきとの考えから、政界や経済界、NGOなどと連携、協力して真に平和な世界を構築することが謳われました。

したがって、このたびのG8北海道・洞爺湖サミットに対し私どもWCRPが世界の宗教指導者の声を反映するための取り組み

を行うことは、京都宣言の具体的な実行であり、まさに第8回WCRP世界会議に参加した世界の宗教指導者の強い願いであると言えます。

私たちはこのたびのG8に向けての会議を開催するにあたり、現実的な課題解決に対して、政治家としてではなく、あくまで宗教者としてのアプローチを試みることになります。現実的な政策の良し悪しの議論は政治の世界においては当然必要なことと存じます。しかし、私たちの会議ではWCRP日本委員会の今年度の事業方針にもありますように、宗教者として現実の問題や課題を克服するために、まず宗教の根底にある共通する普遍の真理を見いだし、共有するという取り組みに力を注ぐこと。そして、相対的かつ対立的な国際政治の課題に対しても、長期的な視点から、多角的、全面的に、また根本的に見るということをしなれないと思っております。

したがって、今回は宗教者としての視座をもとにした議論を行いたいと存じます。そして、第8回WCRP世界会議で提唱された宗教者の新しい考え方、つまり共有される安全保障の概念を、このたびのG8サミットに参加する各国首脳に提言させていただこうと思います。

この共有される安全保障とは、自己は他者とつながっているとい

う相互依存関係をもとに、自己への脅威が他者への脅威につながり、また他者の安全は自己の安全に連動するという安全保障のあり方があります。そしてまた、この共有される安全保障は、国家や政府の努力のみならず、市民社会、宗教共同体、各セクターなど、多様な社会における行動主体の協力と連帯によるアプローチによって実現されるものと考えられます。

札幌での私たちの会議は、この宗教者独自の、共有される安全保障の考えに基づいて開催されるのであります。2日間と短い期間ではありますが、世界各地から来られる宗教指導者と共に環境問題や紛争問題、核不拡散などの地球的規模の諸問題に対して取り組むべき宗教者の行動のあり方について議論をさせていただき、平和構築に対して有意義な会議にさせていただくと強く願っております。

私どもWCRP日本委員会は、先ほど申し上げましたように、世界会議以降の具体的な活動の一環として今回の会議をもっているわけであります。日本委員会が主催するというところに大きな意義があります。日本委員会が主催してWCRPの国際委員会に声をかけ、共にやりましょうということになったわけでありまして、このこともぜひ本日お越しの皆さんにご理解をいただきたいと強く願っております。

私も事務総長と致しまして今回の会議に対して全身全霊をかけて取り組んでおります。深いご理解と力強いご協力をお願い致しまして、私の挨拶を終わりたいと思います。ご静聴、ありがとうございます。

■基調講演

「地球環境問題と宗教(者)の役割」



住 明正

東京大学教授・サステイナビリティ学連携研究機構 (RCSS)

ただいまご紹介いただきました東京大学の住でございます。私は理学部で物理学をやっておりますが、現在はIPCC（気候変動に関する政府間パネル）のワーキングで、気候モデル、まあ天気予報もやっていたんですが、基本的には科学の原理原則をもって自然現象の秘密を知りたい、ということを中心に行ってきました。

もちろん、そうしたことは人間のため、社会のためでもありますので、現在では同僚と一緒に、サステイナビリティが非常に大事だと思いますので、サステイナビリティ学というものをいかにつ

くっていくかということを目指して活動しているわけです。私自身は宗教とは縁がないのですが、今日は非常に有名な先生方がいらっしゃいますので、我々が何を考えているかということをしつて説明できればと思っております。

まず、地球温暖化問題とはどういうことかということを少し説明したいと思います。これは単に地球の気候が変わる、暑くなってくるということだけではなくて、21世紀の社会のあり方を考えるいい契機になった問題だと考えています。地球温暖化といいますと、単にエネルギーを使い過ぎて

いる、エネルギーを守らなければだめだというように考えがちですが、それだけではなく、この地球上で人類というものがどういうあり方をしたらいいのかを考えなければならぬということを提示した問題だと考えます。

我々が温暖化の問題を言うと、すぐに温暖化というのは非常に先の問題ではないか、目の前にもっと大きな問題があるではないか、それを放っておいて100年先のことをやるんですか、というような言葉が必ず飛んできます。目の前の問題は当然、大切だと思いますが、目の前の問題に対応するときにもいろいろなやり方があります。つまり、目の前の問題に対応するときには、先の問題にもつながるような対応をしたらどうですか、というのが我々の主張です。

ですから、目の前の問題を解決するためには問題を先送りするという対応もあるんですね。ツケは全部先で払ってもらえばいい。しかし、それは一時しのぎということになりますから、やっぱり

だめだろうと思います。だから、目の前の問題を解決し、かつ長期の問題にもつながるように向き合うべきではないかと思っております。

私は易姓革命ということが好きで、中国の歴史書を読みますと易姓革命と書いてあります。昔の中国は気候変動の影響をよく受けます。干ばつだとか飢饉だとか、すごい災害が起きます。そうすると食べていきませんから農民の反乱が起きます。それで政権が交代するんですが、そういう自然災害等が起きてても、もし政治、行政、社会がちゃんとしていれば、食糧を回したりすることはできるはずなんです。ですから、そういうことをちゃんとしてくれる政府であればいい。そういうない政府であれば代わってください、というのが易姓革命ということですよ。

逆に言うと、21世紀の気候変動の問題というのは、実は我々の社会システムの問題なんです。今の政治、経済、社会のいろいろなシステムは、自然からくる問題提起に対して十分対応できるだ

ろうか。できなければ、できるように考えていく。そういう問題だろうと思っております。

もう一つ、最近、私はこう考えるようになっていくんですが、基本的に人間とは何かという問題です。一つの側面として人間は生物である。生物学的に定義される「生物性」というものを持ってあります。例えば、生老病死と言われるようなものは、明らかに人間が生物であることに關する束縛、ある種の縛りだと思えます。そういう生物学的な制限から何とかして逃れたい。逃れると言うべきか、乗り越えると言うべきか、そういうことを考え出してきたのが近代精神ではなかったかという感じがします。

例えば、病気があれば、どうして病気が発生するのかを考える。細菌であれば、ある種の薬物で対処し、病気を乗り越える。栄養が足らなければ栄養をとる。農耕でも肥料をつくるなど、自然がかけてくる困難さに対して、一つひとつ対処してきて、我々が自然なる生物であるという属性によ

って縛られていることに対して、一步一步やろうというのが近代精神であったと思いますし、おそらく現在の科学、工学、エネルギー学と言われるようなものはそれを目指してきました。

ところが身体性の脱却をしますと、どのつまり極限は、おそらく不老不死だと思います。そうすると、現在、ES細胞、再生細胞等の問題を含めて、クローンもそうですが、倫理という問題が出てくるわけですね。身体性の極限である人間の体が無限につくり変えられたら大問題だと思う。そういう状況にきている。そこで、それはすべきではないとか、いろいろな議論が出てきます。

ただ、そういうドライビングフォースをやめたときに、どこにイノベーションがあるんだというのが多分、大きな問題のような気がします。だから一方では、目の前にある身体性みたいなものを乗り越えていくことによって、結果的に科学技術は発展してきたような気がします。それをなしにして本当にちゃんとやっていけるかどうかという

のが、多分、今我々が抱え込んでいる大きな問題ではないかと思えます。

それで、そのときに考えることは主体と客体、やはり関係性だと思うんですね。物理学では、力のはたらくという場合は必ず何かが交換しているから力のはたらくんだと考えます。だから二人の人間が存在しても、間にまったく相互作用がなければ、それは真空と同じ、何もないのと同じです。ですから、物が存在するということは当然、何らかの相互作用があつて初めて物は存在するという考えです。ですから、その主体と客体の関係、その相互作用が非常に大事ではないかと思えます。

そのときに、ある種の問題が生じるということ、は、主体と客体の関係性の中で何らかの問題が起きるということです。そのときに、相手側を変えてしまえば問題が解決すると思えるのは多分エンジニアリング的な考え方だと思いますが、おそらくこういう関係性が大事だろうと私は思います。

それで、我々はだいたい三つの軸というか、三

つの社会というか、そういう要素で関係を判断すべきではないかと考えております。

一つは、もちろん気候だとか生態系だとか、いわゆるナチュララなシステムですね。ただ注意してもらいたいのは、我々は自然の中に住んでいると言いますけれども、かといって、まったく裸の自然の中に住んでいるわけではありません。いわゆる政治経済社会システムというのがありまして、我々はその中に住んでいます。ですから、我々は自然の中に住んではいるんだけれども、決して本当の自然の中には住んでいないんだと。むしろ、現実に我々が好んでいる自然というのは、管理された、ある意味では人工的に手を加えられた自然で、例えば一人でジャングルなんかに住んでいたら怖くて大変です。ですから、自然が心地よくなるのは社会システムという外側の殻があるからで、それが非常に大事だと思っております。

ところが、環境問題を考えるときは「自然と社会」というふうに置くのが普通なんですが、我々

は必ずしもそうではない。それで、資料の右側に「人間」と書いたシステムが置いてあります。それは個人の心の中の問題で、そういう問題はやはり非常に大事です。それは個々の人間の幸せみたいなものを抜きにしては、どんなに富があっても必ずしも人の幸せを意味するものではないと思います。

ですから、社会と自然との間が調和されたサステイナブルな社会では、その関係がうまくバランスをしています。そうすると、そこに地球温暖化の問題と書いてありますのは、基本的に社会と自然の間で回っているエネルギーですから、本質はエネルギー問題であって、国が過剰にエネルギーを使ったり、輪っかをかけたりしている。そういうところから、地球温暖化問題が発生しているし、それに対応するオプションとしては脱炭素社会がある。

そのほかに、現代社会と人間の間には、大量生産、大量消費、大量廃棄という問題があります。

早晚、日本もゴミに埋もれて、ゴミが処理できなくなる。そういう観点から、ここに着目した循環型社会ということは非常に大事ですし、自然と人間の関係としては、特に昨今地震が多くて、いつたん天変地異があれば、あつという間です。それぐらい自然の力は大きいわけですから、そういう安全の問題。それから、昨今、いろんな事件や犯罪がありますが、心の問題というのも大きかろうと思います。そういう点を考えるべきだろうと思います。

それで、こういう三つの側面に配慮しながら、そのバランスをもって考えていくことが大事だろうと考えています。ですから、現在、洞爺湖をめぐって90年比6%減と言っていますが、それぐらいは実は簡単に実現できるんです。弱いところにしわ寄せが行くことを認めれば、現在の温暖化対策はやろうと思えば簡単にできるんですよ。

ですから、大事なことは弱いところを犠牲にして生き延びようというさもしい考えを持たないで、

みんなが幸せになれるように、ということを考え、
た上で問題を解こうとすると、これは非常に大変
なんです。ともすれば我々は苦勞になると、もう
いいや、弱いところに押し付けてしまおうという
ふうになりがちなんです。弱いところにしわ寄せ
すれば何とかなるというのは避けなければなら
ない。そういう信念を持って、この三つの方針を
バランスよくやると謳っているわけです。

我々は大学で学問をやっていますが、現在の学
問分野というのは基本的には19世紀型の社会の現
実が出ています。昔は割と世の中がシンプルでし
たので、デイシプリンが確立していました。そこ
ろが、今お話ししましたように、現在はそれぞれの
デイシプリンがいろいろと重なっています。自
然科学も、技術も、農学も、経済学も、法律も、
それから倫理学とか宗教とか、そういう問題がみ
んな重なっている。ですから、新しい学問をつく
るべき時代がきているのではないか。それが我々
の言っているサステイナビリティ・サイエンスと

いう、新しい学問ではないかと考えております。
よく地球環境問題で地球は危ないと言いますが、
これは嘘なんです。地球は何ら危なくなくて、
別にどうということはないんです。現在、我々
には二つの大きな道があると考えています。一つは
資料に書いてありますように、overshoot
& collapseというコンセプトなん
ですが、これはどうということかと、要する
に人間というのはどうこう考えても行き着くところ
まで行くんだということです。どうしようもな
くなってバトルが始まるか、とにかくガアツと
やって現実に合うように調整をするんだという意
見、考え方です。

もう少し端的に言いますと、地球の歴史は、古
生物学を見ますと、ほとんど絶滅の歴史です。み
んなバタバタと絶滅しています。で、結局、
環境の変化についていけなかったものが絶滅する
と次に新しいのが出てくる。そうやって調節が行
われるからいいんだ、というようなことがある。

これは仕方がないんだ、というのが一つの考え方です。

だから、人間が一生懸命頑張ってエネルギーの節約とか言ったって無理だというのが一つの道なんです。ただ人間とはそんなものだと思ってしまうとあまりにも切ないから、そこに知性と理性と書きましたけれども、そういう結果があることは過去の経験からわかっているわけですから、それを避けられるような道筋があるんだろうと。それがどんな道筋かというのが、現在みんなが考えているところだろうと思います。

それで私どもが特に主張しているのは、人間の歴史というものをよく考えたほうがいいということです。20世紀は爆発の時代と書いてありますが、特に20世紀後半、戦争が終わったものすごい勢いでエネルギーが増えましたし、物も知識の量もすさまじい勢いで増えております。ですから、20世紀はそういう意味での、すべてのものが爆発している時代だと言えます。

ところが、明日が今日よりも豊かになる、どんな右肩上がりでよくなっていくんだというのは、1950年以降の50年で描いたあだ花的な勢いだとは私は思っています。多くの歴史を見ればわかりますが、過去が一番いい、昔はいい時代だった、そういうトーンでだいたい宗教は書いていると私は理解していますが、それは原則的に先に行くほど悪くなってくる。そういう点では、常に右肩上がりでどんどん行けるなんていうのは、ある意味では非常に限られた産物だと思います。

そう考えますと、21世紀というのはそういう意味で、いわゆるサステイナブルな持続的な成長の時代と言えますが、ここが大事なところであります、成長というのは動きですから、物をたくさん手にすることも成長の一つではありますが、唯一ではありません。サステイナブルと言うと、まったく変化のない、昨日も今日も明日も同じような一種の単調な社会を思い浮かべますが、必ずしもそうは言っていないんですね。

要するに、変化はあってもいいし、いろいろ時間的なものがあるでもいい。例えば、人間は成長していきます。もちろん、成長すると、例えばまったく同じことをずっとやっても、多分、考え方や心は変わる。要するに、いろんなものが成長していきますよね。だから、持続的成長というコンセプトでは、単に物が増える、エネルギーが増えるという意味での成長という定義を必ずしもする必要はない。何らかのものが時間とともに大きくなっていくんだと考えておけばいい、ということをおきたいと思います。

それから洞爺湖サミットがありますので、国際交渉の話を少ししておきます。いわゆる地球温暖化という問題を取り上げて議論しているんですが、当然その裏側には21世紀の世界をめぐる覇権という問題が動いています。昔は単純な世界でしたから、武力の強い者が勝つ。そういう形で覇権問題を解消したんですが、今や、さすがにそれは下品だということ、そこまではしない。ちよつと前

までは、お金を持っている者が勝ちだという覇権問題だったんですが、それもグローバルゼーションの中ではそうはいかない。しかし、何らかの形でやはり21世紀の世界、社会をどういうふうにしたらいいかということをめぐって、それぞれの国がそれなりの覇権争いをしているのが実情であろうと思います。

その具体的な結果として、今、どういうふうに言われているかというと、世界に通じるコンセプトとルールを出したほうが勝ちだという覇権闘争になっていると、だいたい理解されています。それは、どんなことでもいいんですけれど、こういうルールで行こうよ、と提案することが大事です。例えば、太陽電池社会がいいねという具合です。太陽電池のコストが下がってよくなるかもしれませんから、可能性があるような気になります。そういう形で、何らかの新しい次の方向に関するルールづくりと将来性を競っている時代になっているのだらうと思います。

そう考えますと、日本も何とかしなくてはいいけない。そのときに、例えばエネルギーを削減して何とかしようという部分的なことだけですと、国民全体にいろんな意見がありますので、何とかまとまりにくい。特に現代社会は、それぞれ利害が違っておりしますので、みんな自分のところがどれだけ儲かるかを考えたりします。そういう観点で、右肩上がりのときは、ブツブツ文句を言いながらも、みんなにお金が回ってきた。ところが、今はちよつとしたことでもいろいろめめます。なかなか相手を信用できないということになりますので、日本全体がどういうふうに21世紀を進んでいくのかということを考えていくビジョンが必要なのではないかと思えます。

例えば、国立環境研究所が、2050年までに、どうエネルギーを削減したらいいかということ进行研究した例があります。そのときに二つの代表的な世の中を提示しました。ビジョンA「ドラえもん型社会」、ビジョンB「さつきとメイの家型社

会」です。ビジョンAというのは、活力ある社会。ある種の都市型で現代科学技術に依拠したような社会です。「ドラえもん型社会」と書きましたが、「何でもポケット」があつて、何かトラブルがあると、そのポケットから出したものが解決してくれる。ですから、困難はいろいろあるだろうけれども、科学技術に依拠し、科学技術を発達させることによって困難を乗り越え、ある社会を実現しようというビジョンですね。そういう国を考えましょうというのを、国立環境研究所が出しました。

これは、こういうアイデアに基づいて、どういうふうに国土を考え、どういうエネルギー技術を使つて、どうすれば2030年にエネルギーが何割減りますというものです。しかも、そのポイントとは、何一つ我慢をしなくてもいいということです。ともすればエネルギー削減というと、食べたい物も食えず、戦争中の「欲しがりません、勝つまでは」というイメージが高齢の方はすぐ浮かぶと思いますね。だから、日本での省エネのイメ

ージというのは、だいたい戦争中のイメージでして、「欲しがりません、勝つまでは」ということです。そうではないんだというのが、このモデルです。

しかも、ここで述べられているのは、エネルギー削減といつても、とてつもない新しい技術を開発しなくてはならないということではなくて、ほとんど現在でも個別の技術要素は80パーセントはあると書いてあります。だから、個々の省エネ技術というものは、ほとんど現在あるんですね。

で、その普及を一番妨げているものは何かというと、一つは慣性ですよね。面倒くさいから今のままでもいいじゃないかということと、もう一つは社会の仕組みが変わってしまうということです。

例えば非常に端的な例をお話ししますと、もし電気自動車に非常に高能力のバッテリーができて、それが家庭で充電できるという社会になったとします。そうなったら、全国津々浦々にあるガソリンスタンドは全部廃業ですね。ほとんどガソリン

は必要がなくなります。それから、電気自動車が普及するということは内燃機関であるエンジンがまったく不要になるということです。機械工具と呼ばれるものが全部なくなつて、その代わりモーター産業が出てきます。

そういう具合に、大きなパラダイムシフトをしますと、既存のものをガラガララツとぶち壊して、新しいものが出てくる。当然、そこにはいわゆる勝ち組、負け組が出るという、大きな社会の変化が伴う。そういうブルドーザー的なことをやるのか、それともチマチマとやるのか、その辺は現実の問題としては非常に大きな問題がありまして、なかなか大変です。

だから、個々の技術というのは日進月歩で進んでいますから、エンジンなどは、例えば効率を上げましようと言えば、ガンガン頑張つてやっていくはずですよ。そういう個々のエレメントの技術は結構ありますので、問題はそれをどう社会的に実現するかということだと思います。

よく我々が将来のことを考えるとき陥りやすい欠点として、ともすれば今の状況が続くと思いがちです。何ら根拠はないんですけど、とりあえず今のままずっといくんじやないかと思いがちです。大きな変化が起きるとは想像しがたいんですね。しかし、それは間違っていて、我々は大きな歴史的な認識を持つべきなのではないか。また、国際政治的にどういう枠組みで変わるか、といったことは心の片隅に常に持つておく必要があるかと思えます。

そういう観点で、昨今いろんなことが言われておりますが、現在の状況は第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の、いわゆる戦間期に非常に似通っていると言われております。

アル・ゴアの『不都合な真実』という本の中に頻繁に出てくる、1935年のミュンヘン協定。ミュンヘン協定というのは、要するにヒトラーがオーストリアを併合したときに、イギリスの首相が、戦争を起こさないためにはこのくらいはい

いじやないかと言って融和策をとったから第二次世界大戦が始まったという。だから、問題が起きたときには毅然と対応したほうがいいという例で使っているんですが、CO₂がどんどん増えて温暖化に向かっている。まあいいじやないかという形で現状維持をしようとして、その先に非常に困難な問題が起きるので、やはり今の時点で敢然と温暖化対策に取り組むべきだとゴアは言っているんですが、ともあれ、そういう意味で先のことを考えながら進んでいく必要があるかと思えます。

さらに最近、突如として食糧危機の問題が出てきました。例えば食糧の問題でも、39パーセントの自給率などというのは20年ぐらい前から言われているわけですね。日本の農業をつぶすなど、いろんなことをやってきているわけですが、前からわかっているのにやらないというのが日本の特徴です。ですから、相当ロングタームのスパンを見越した視点が必要なのではないかと思えます。

そう考えますと、やはり将来的に石油は高くな

るし、輸送費もかさむだろうというのが普通に考えられることです。そうすると、日本の食べ物を買ってアフリカくんたりから持ってくるなんてことは相当割高になるだろうということは容易に想像できます。その観点から考えると、いつまでも今のままで、お金さえ出せば食糧や資源が買えると思うのはちよつとまずいのではないかと思いますし、その観点から地産地消と言われるようなものをもっていくべきだと思います。もちろん、お金を出して物が買えるときは買えばいいわけです。しかし、買えなくなつたときでもやっていけるような準備はしておく必要がありますし、その観点から考えれば、地産地消を大事にする必要があると思います。

最後に、コミュニティづくりと書きました。

これはよく省エネ、省資源と言いますと、何かものすごく悲惨な生活がやってくるんじゃないかと思う人が多いんですが、それはまったく間違っていることをここで力説したいと思ったからです。

冒頭にお話ししましたように、今の日本人が生物として生きていくのに必要なカロリー数は、例えば、だいたい10000カロリーから15000、16000カロリーです。それで、現在の家庭のエネルギー係数なんて昔と比べるとものすごく低いです、日本の場合は。では何が大きいかというと教育費ですよね。それからぜいたく費、まあ飲み代とか。要するに、はつきり言うところ、見栄や贅沢、子供に関する出費が多いんですね。

そう考えますと、今の日本の社会で使われているエネルギーとか資源の膨大な部分は、実は人の欲望だとかストレスだとか、要するに腹が減つたとか、ひもじいとかいうレベルのことではなくて、もっとソーシヤルな、自分の位置づけだとか、愛する人がいないとか、まあそういう問題。それは、どんなにエネルギーをつぎ込んだからといって解消するわけではない。逆に言えば、そこにもものすごく大きな、多分、解決法の道筋があつて、その一つがコミュニティづくりだということです。

それはどういうことかと言いますと、これからの時代はエネルギーを使わない社会にしなければならぬ。それから、次から次へと新しく物を買って使い捨てるという、そんな時代でなくなります。そういう社会で楽しく過ごすにはどうすればいいか。そこで思ったのは、こう言うのと叱られるかもしれません、関西のおばちゃんたちのおしやべり。基本的に、しゃべっているのが一番、省エネ、省資源の楽しみ方なんです。これは本当にそうなんです。

現在の日本が抱えている問題というのは、物とかエネルギーとかに依らずに楽しく過ごせる場がないことです。日本ほど社交の少ないところはないですよ。ほとんど会社の組織とかをとおして社交をしています。ダンスが好きなのは、踊る所がないので、どこかのホテルでやっているダンスパーティーに行くという人もいます。要するにみんな、いろんな形でコミュニティとつながることを求めているので、そういうものを提供するこ

とは必ずしも大きなエネルギーや物が要るわけではない。ウォームハートと言われるような人間関係の問題があるかと思えますので、そういうことを考えていけば十分新しい社会に対応できる道があるのではないかと考えております。

2050年の世界を国際的な観点から考えますと、いわゆるアメリカと中国が両方にあります。これはおそらく2050年になってもへこたれることはないと思いますので、当然ある。その間に日本がある、という状況になっています。そのとき、依然として人口が減っていく中で日本は過去のGDP第2位というのを望むんでしょうか。そこはよく考えたほうがいいのではないかと。それから、1ドル100円という為替レートはいつまでも続かないと考えたほうがいいかもしれない。そういうことをよくよく考えていかなければならないと思います。

それから、先ほどの話に戻りますが、日本とはいったいどういう国なのかということを決めたほ

うがいいと私は思っています。だいたいモデルが二つありまして、大国モデルと小国モデル。大国モデルというのは、言うまでもなくアメリカや中国といった態度の大きい国ですが。それに対して小国モデルというのは、スカンジナビアだとかアイルランドみたいな国です。小国モデルの特徴は、軍事などお金がかかって大変なことは大国に任せておいて、自分たちは情報産業だとか、重厚長大に対して軽薄短小型の産業でお金を稼ぐというモデルです。どっちでやるかというのは、ある程度意識して決めたほうがいいと思います。

それから、大陸国家モデルと海洋国家モデル。当然、日本は海洋国家で行かざるを得ません。かつて大陸国家を目指して中国に出て行って失敗したわけですから、決して大陸国家にはならない。大陸国家モデルというのは、陸地や領土があると、資源、例えば現在はやりの炭素の処理だとか、いろんなプロセスが結構できるんですけど、日本は土地が狭くて、いろんなオプシヨンがしにくい。

そういうハンディがあるということは非常に大事です。

最後に、東洋のスイスと書いたのは、古い人はご存知かもしれませんが、日本は戦争に負けたあと、どういうスローガンを掲げたかといいますと、あのときに確か「東洋のスイス」という言葉が使われたんです、昭和22〜23年ごろです。満州、朝鮮を放棄して、1億2000万人が狭い日本でやっていかなければならなくなった。しかし、資源はない。さあ、どうするか。そこで日本の将来を考えたときに、やはり、これからの日本は、かつての軍事力で覇を競うような国ではなくて、小資源の中で知的産業とか観光でやっていこうということが言われたわけです。

ここ50年、いろいろやってきた結果としても、やはり日本の人口は今のままでいけば、21世紀末には、おそらく7000万人台になると思います。7000万でええやないか、22世紀には4000万でええやないかと決めたら、多分、そこで掲げ

るスローガンというのは、美しい自然を持った島国で、単に貧しい暮らしをしろうというんじゃない、これだけ物とお金があふれているわけですから、過去の遺産を使うという物の使い方が非常に大事だろうと思います。

ただ、これから非常に難しいのは、この合意形成なんですね。今言ったような話も、お前らは若いときに好き勝手してきたくせにと若い人から言われかねません。どういう形で、みんなが納得して合意を図るかというのは実は大問題です。そのときに、私は思うんですが、今の日本の社会は非常にみんな苛立っている感じがします。だから、もつと寛容の精神が大事だと思います。

確か正月にTBSテレビでローマ人の番組をやりましたけれども、ローマ社会がなぜあれだけもったかという、それは寛容の精神があったからだそうです。だから私は、違いを認める寛容の精神と、みんなが共有できるような価値観や精神をそのままやっていくことが必要だと思います。そ

のためには、客観的に判断する指針が必要です。いくら寛容になろうと思っても、誰かが勝手に決めたのでは納得がいけないということになりますので、そうならないような枠組みづくりが必要なのではないかと思っています。

それで温暖化の問題に戻りますと、実は、すべての温暖化の論拠と根拠が気候モデルの予測能力に基づいています。だから、温暖化に反対する人は、気候モデルなんて信用できないではないかと言います。明日の天気予報も当たらないような100パーセントではないものを信用していいのか。これは我々の開発している気候モデルでは100パーセントではないんですが、そう悪くはないという一例です。左側にあるのは年の平均気温です。90年での線が3本あります。一番上の青いのと下の黄色いのが、第一次報告書と第二次報告書で、地球が90年からどれだけ温度が上昇するかということを示した結果です。90年から2006年まで書いてあります。真ん中の黒いのが、実際

に観測された気温です。

15年たってみて、もちろん完全には合っていないんですが、だいたいエラー幅は0・1度ぐらいで、今の気候モデルは昔よりもうちよつとよくなっておりますので、2000年から2025年まではまだわかりませんが、いろんな複数のモデルの結果も非常に似通っておりますし、将来どうなるかというのを考えてもそんなに変わりません。そういう観点から考えますと、今の気候がどう変わるか、どんな影響が出るかということに関して、少なくとも30年ぐらい先に関して言えば、かなりわかりやすい具体的なものを出せるのではないかと思います。

そういう意味で、具体的にどういうリアクションをとればいいのかということは、かなりわかりやすくなるのではないかと思います。例えば北海道が温暖化していけば食糧基地になることが考えられる。2050年、人口が減っていくとする。そういう中で、何をどうセレクトすればいいかとい

うことは結構考えられる時代になっているのではないかと思います。ですから、そういう30年ぐらい先を見ながら、5年ぐらいごとにそれを見直して、どういうふうに対策なり社会資本をつくっていくべきかということを考えるような時代に来ているのではないかと考えます。

今はもう議論の時代は終わったと言っていると思います。これからは行動の時代だと。そうすると高齢化社会だとか格差社会だとか、いろんなコンポーネントに対して、いろいろなことが行われなければいけない。将来の気候の変化をそれなりに想定しながら、個々の問題に対して具体的な処方箋を考えていく時代だろうと思います。

これを我々は三社会統合モデルと呼んでいるのですが、温暖化への対応としては、いわゆるデルナント社会をつくるべきだし、大量生産、大量消費、大量廃棄ということに関しては循環社会をつくる必要があると同時に、人間の問題に対応して自然共生社会というのを提唱しています。要する

に、生きとし生けるものにやさしいということが、自分にもやさしいし、人にもやさしい。そういう社会が実は一番、自分にとっても人にとってもいい社会だということ、そういう意味で自然共生社会ということは非常に大事だろうと思います。その三つを総合的に考えながら、施策を打っていく必要があるだろうと思います。

最後になりますが、今お話ししましたように地球温暖化に関する知見は深まっていると思います。寒くなると言っている人もいますけれど、やはり温かい気候になるだろうと思っております。それで、そういう気候を想定して、具体的な適応策を考える時代がきていると思います。それに関しては時間指定がありまして、これは字面の都合で300年と書いてありますが、まあ100年です。必要するに100年ぐらい先。だいたい歴史を見るとわかりますが、1900年に今のことがわかったかという疑問です。やはり100年先というのは今の我々の浅はかな知恵でわかるタイムスパン

ではない。

しかし、30年先ならだいたい見える。そういう観点で、二つの時間指定で分けて、モデルに合理的な判断を加えながら適応策を考えていく時代です。適応策というのは、具体的な施策ということ。要するに、今、日本でも年間80兆円ぐらいのお金はあるわけですから、それをどう使うかという問題だと思います。それには、ある意味では、モデル等、いろんな客観的な道具がたくさん出てきましたので、それをどう、よりよく使って合理的な判断をするかだと思います。

それから、寛容の社会。違いを許す社会が非常に大事で、違いを許す中で合意を図る知恵が非常に大事です。多分、このあたりが宗教の役割だと思います。ここに「者」が入るのは、宗教の本があったってわからないからです。それはやはり、宗教「者」という人がしゃべらないと、いくら本に書いてあるから読めと言われても、ちょっと待てよ、ということになりますよね。やはり、そこ

は人間が肉声で話すことによって多くのことがわかるんだと私は思います。

あとは、歴史は非常に大事でありまして、努めて我々の過去をよく調べることによって自分がわかりますし、世界の活路を大事に考えたほうがいいと思います。

最後は、誰かにすぎるのではなくて、やはり自分の実存をかけるというか、自主的に判断していくことが大事だろうと思います。そのためには現在という状況を理解することが、まず一番のストーリーテイングポイントかなと考えている次第です。

拙いお話でしたが、ご静聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

コーディネーター 眞田芳憲

WCRP日本委員会平和研究所所長・中央大学名誉教授

パネリスト 佐藤純一

国際メタテクニカテクノロジー研究所所長

蘭田 稔

京都大学名誉教授

奈良康明

駒澤大学名誉教授

山田經三

上智大学名誉教授



眞田 先ほどは住先生から「地球環境問題と宗教（者）の役割」というお話を頂戴しました。この標題の括弧の中

とにしようということでした。

よく私たちは宗教戦争などと言って、あたかも宗教が戦争の元凶のような印象を与えています。戦争を起こすのは人間であって、宗教に責任を押し付けるといふことは、「宗教」に申し訳ないことと思っております。

の「者」は何ですか、と控え室で伺いましたが、先ほどのお話の中で、その説明をお聞きしました。結局、宗教といっても「宗教」というものの姿や形は見えない。見えるために「宗教者」というこ

住先生は環境問題に関して、宗教者はどういう責任を持った考え方をして国民を指導していくのか、そういったことをお話されたかったのかな



と思いました。これは宗教の問題ではない、我々宗教者自身の問題として環境問題を考える。そして21世紀に、どういう社会モデルを考えるのか、そのためにはどういう人間関係を構築していかなければならぬのか、こういったことが問われているのかなとお聞きしておりました。

今日は研究所の所員の先生方にパネリストをお願いしてございます。時間が非常に限られておりますので、第一ラウンドは6分でお話ししていただきまして、足りないところは第二ラウンドの4分で答えていただくよう、お願いしてあります。それでは、さっそくお願いします。

佐藤 さっきの住先生のお話が科学だとすると、私のほうは技術です。今、ここの部屋を見回すと、「自然」と言



えるのは我々の体だけで、あとは全部、人工物で作られております。私はもちろん技術や科学を解説することは到底できませんが、若干はお役に立てるかもしれません。

住先生のお話の中で、いい言葉だなと思ったのは、宗教者といわれて「者」をつけたことです。つまり私たちにとって、現実に生きている世の中で、「いかにするか」ということに関わる現実面と宗教の接点の位置で何をするかということですね。それをひっくり返しますと、先生ご自身も科学者として自分はこう考えるというご発言によって実行の義務感が生じます。これは技術も同じで、技術者としてという「者」を意識することが大事だなということが、私の心に残りました。

それから、私が今日紹介したい言葉があります。シューマッハーの『スモール イズ ビューティフル』という有名な本に引用されているのですが、「近代経済学の元祖」のケインズは、将来悪いということとはわかっていても百年間はこれで経済を

発達させよう、そのあとちゃんと戻そうということとを随筆で書いています。

その訳文をそのまま申し上げておきますと、「だが、ご用心あれ。まだその時が到来していない。あと少なくとも100年間は、良いことは悪いこと、悪いことは良いことだと、自分にも人にも言い聞かせなければならぬ。悪いことこそ役に立つからだ。これは貪欲と功利と警戒心とを、まだしばらくの間、我々の神としなくてはならない。これによって初めて、経済的窮乏というトンネルから抜け出て、日の目を見ることができるのだから」と。ケインズ卿は百年と言っているんですね。貪欲と功利と警戒心で、とりあえず物を豊かにしよう。これは百年間だと。

で、もう百年ほど経ちましたから見直しが必要で、さつき住先生もおっしゃったように、寛容が大切な時代が来ているということを、お聞きしながら感じた次第です。

藺田 住先生のお話を伺いまして、私自身は平和

研究所のメンバーでもありますけれども、WCRP日本委員会の開発・環境委員会のメンバーでもございまして、その委員の先生方と一緒に何回か、



今日、住先生がお話しされたような地球温暖化の具体的な事実やデータを勉強させていただいたことがあります。

で、いちいち感服した次第でございます。

最後のほうで先生は、地球温暖化は今の知見が深まった段階では紛うことのない事実であって否定できない、という認識のもとに対策なり提言なりをされたというふうにお聞きしました。

先生は、20世紀は爆発の時代、そして21世紀は持続的成長の時代とおっしゃられました。持続的つまりサステイナビリティですけれども、思い起こしますのは、1992年のリオの国連環境会議で非政府機関の会合に出席した記憶がありまして、

その中に一つのキーワードとしてサステイナブル・ディベロップメントという言葉がありました。持続的開発と表現されまして、それが我々が属しておりますWCRP日本委員会の開発・環境委員会という名称にもなっているかと思っています。

先生のお話の中に、データに基づいたモデルなイメージを持つべきだというお話がありました。その中で、ビジョンを持つ場合に二つの対照的な社会の方向を表現されたのが、一つはビジョンAで「ドラえもん型」の社会という。それからビジョンBは「さつきとメイの家」のイメージだという言い方をされましたね。

先生のお話を聞いてみると、どちらかというところ、さつきとメイのほうを推奨されているのではないかと思いますけれども、ただやはり、どちらか一方という二者択一よりも、現実にはやはり両方を踏まえて中間型というか、そういう努力がこれから求められるのではないかと私は感じました。

しかしながら、まずここでお話ししたいのは、

やはり我々宗教者に呼びかけ、託されたところがある。それは何かというと、先生は自然と社会と人間というふうな三つの要素でそれぞれが関わり合うという言い方をされましたけれども、我々自身の責任の領域というのは、言ってみれば文化の領域だろうと思うんですね。その文化として、国民ないし世界の人々が共有するモデルに基づいたモチベーションをいかに人々に与えられるかという、人々の実感に訴える役割がもしあるとすれば、これは我々宗教者共通の役割であり、その内容が問題だということだろうと思うんです。

私は最近、何度も繰り返し申し上げているんですけれども、やはり今日のお話のバックにあった持続的成長という時代をいかに実感のレベルで我々現代人が受け取るかという場合に、やはりこれはいのちの問題ではなからうかと感じた次第です。今問われているのは確かに不安や孤独、情の欠如というような指摘がありましたけれども、そういうものを宗教の立場から人々の実感に訴えると

すれば、やはりいかにいのちを大事にすることを人々に訴えることができるか。それはある意味では世界共通のことではないかと思うんですね。

しかし、その場合のいのちというのを、ただ人間さまだけのいのちというふうにとらえるべきかどうか。一つは、人間としてのいのちは、やはりつながりの中でとらえなければならぬ。今は、いのちは個々の、物としてのいのちでしか、そのリアリティーを訴えようとしませんけれども、現実はつながりのあるいのち、親から子、子から孫というふうな、つながったいのちであるということと、それからもう一つは、日本ならではのいはアジアならではの発想である、仏教的に言えば山川草木国土までのいのちの広がりとか、つながりとか、それを人々に語りかけることができるということ、それが環境の問題なり、あるいは暴力の否定であり、平和追求の根本的な実感を伴う訴え方になるのではないかと。それを、いつもながらではございますが、今日のお話を伺

いながら強く実感した次第でございます。

ですから、ここで私どもがやっていることは、来る洞爺湖サミットと世界宗教者会議に向けての勉強会であるとするれば、やはりこれは先ほど事務総長がおっしゃったように、やはりWCRP日本委員会が主催するというこの意味をもう少し強く我々は自覚すべきではないかと思えます。その中で、いのちの問題を強く打ち出すということも必要ではなからうかと思えます。



奈良 住先生の宗教と

宗教者という問題を伺っております、このWCRPが一番最初に生まれたときの有名な言葉、悪いのは宗教ではなくて宗教者のほうなんだ、という言葉思い出しておりました。

住先生の大変説得力のあるご意見を実践に移していくときの中心は人間の関係、利他の関係とい

うことであらうかと思えます。共有される安全保障ということがテーマになっておりますが、京都会議におきましては、それは五つの概念から成り立っているということで、そのうちの一つに全地球の一体性という、グローバル・ワンネスが謳われております。人類は一つの世界に生きているという、人類生存の普遍的かつ根本的な現実を直視するものということがあります、これが環境問題であれ、核兵器の問題であれ、人間関係にウエイトを置いた重要な解決のための前提となるだろうと思えます。

そういうわけで、一つのシステムという考え方として、共創ということを申し上げたいと思えます。共に創る、と書きますが、体を例に言うとかかりやすいと思えます。人間の体は無数の細胞からできています。無数の細胞が単に集まっているのではなく、個々の細胞はそれぞれはたらしをもっているんですが、それぞれが複雑な関わりの中ではたらいっているわけで、その関わりの中にそ

れぞれの個性が生きているということでございましょう。細胞の関わりの結果、体としてのいのちが成立し、構成され、維持されているわけで、細胞は関わりつつ、体を維持するために、言わば力を合わせているわけで、言い換えれば、すべての細胞は共に力を合わせていのちをつくりあげている。そのプロセスがいのちなんだ、体なんだと言ってもいいと思います。

逆に言えば、体というのは、すべての個別の細胞を個々別々のまま、それぞれの特色を生かしつつ、いのち、肉体を維持するという共通の目的に向かって関わり合っている場である、というふうに言ってもよろしいかと思います。

実を言いますと、この共創という概念は、仏教の縁起の概念に触発されて言われてきた言葉であります。ときには、このあり方を壊す細胞も出てきます。ガン細胞がこれで、そういう全体を壊すようなガン細胞には、それなりに対応していかざるを得ない、こういうことになってこようかと思

います。

ただ、このいのちの問題は、私どもの肉体は黙っていても一つのいのちを保存していくというのはたらしをしていますし、すべての細胞が生命を維持するという共通の目的におのずと向かっているんですが、この共創という概念は、家庭、職場、国家、世界、そうしたすべてのシステムを、あるべき形を理想型として出しているものだろうと思います。

そうしますと、現代の私たちにとりまして、グローバル・ワンネスというものを考えるとき、宗教的な言葉を使うならば、お互いに関心を持ち合い、心を交し合う関係というものを、こうした共創という概念の中に盛り込んでいくためには、どうしてもそういうシステムをつくり上げていかなければいけない。そこに、平和を希求する私どもの具体的な運動の方向が示されているのではないかと考えます。

蘭田先生は、いのちはつながりだとおっしゃい

ました。私も賛成なんです、つながりは他者とのつながり、他者との関わりがあって成り立ちます。人間は無限の過去を背負っています。また、横の関係から言っても、世界のすべての人との関わり、縁というものがございます。個々の存在は、どれも、誰でも、大きな自然、世界をその内に秘めているものと言ってもいいと思います。

個は個でありながら、相互に関わり合い、つながり合い、仏教の言葉を使えば縁起しております。一人の中に一切の人が力を及ぼし、具現されていると見ていいと思います。すべての人間という言い方があるんですが、すべての人間というのは少し抽象的すぎる表現ではないかと私は思います。むしろ私も一人ひとりの個々の人間の中に、すべての人が具現されているんだという形で考えたほうがよろしいのではないかと思います。

これがグローバル・ワンネスを支える理念と言ってもいいと思うんですが、しかし、これはあくまでも理念ですね。住先生のお話に、身体性を失

った現代ということがございましたけれども、これが具体的にどう実践されていくかという問題を話さなければいけないんですけれども、時間が過ぎてしまいましたので、あとで話させていただきますと思います。



山田 住先生のお話で

非常に印象に残った言葉がありました。現代の病は不安、孤独、情の欠如だと。そして、

寛容な社会、違いを許す社会での合意形成が必要だと。ここに宗教者の役割があるとおっしゃいました。そして、これと関連づけまして、共同体づくり、コミュニティづくりということもおっしゃいました。私はこの結論のところを大切にしたいと思います。

私たちそれぞれの宗教団体には、それぞれの施設がございます。イスラームのモスク、仏教では

お寺、神道では神社、キリスト教では教会、それぞれの施設をコミュニティの場として具体的にその地域によってお互いがお互いを、心がつながり、しゃべり合う、そういう場として提供していくというのが一つの提案だと思います。

今一つ私が提案したいのは、特に私にお役があったのは、いわゆる国連のミレニアム開発目標ということから話を、ということだったんです。八つの非常に大事な目標があるわけです。

まず、極度の貧困、飢餓の根絶、全世界での初等教育の実施、いわゆる女性差別、社会的ジェンダーの解消と女性の権利向上、幼児死亡者を減らすこと、母親の健康推進、エイズ、マラリア、その他の病気の根絶、環境保全、開発のための国際的協力の推進、この八つなんです、いずれも重要なんですね。

そして私は具体的な提案として、世界宗教者平和会議には青年の方々がたくさんおられます。その方々に海外にどんどんいらして、それぞれの持

っておられる、例えば農業、漁業、あるいは医療などの知識、技術、能力を発揮して、地元に役立つようにしていく。これはW C R Pとして一つの大切な目標として実践していきたいと思っています。

その根拠として、私はいろいろな国々に行っておりまして、東ティモールに限らず、いろんな海外で見た青年海外協力隊の方々の本当に素晴らしい献身、そしてまた宗教やN G Oの若者たちの頑張り、ここに私は各発展途上国に対する日本の貢献の具体的な場があると思います。

今申し上げた二つの提案というのは、民際的な協力の大切さ、インターピープルですね、民際的協力。これを宗教者として青年をどんどん派遣していく。ここに大きな役割があるように思います。

眞田 実は、今日ご参加の先生方はパンフレットをお持ちでいらっしゃいますね。今回の平和大学講座の開催趣旨が裏面に書いてありますが、一番

最後のところに第八回京都大会の宣言を載せておきました。ここでの「共有される安全保障」という言葉ですが、このわかりにくい言葉をどのように理解するかということで、日本委員会で私も参加し、関係の先生方と検討を重ねて、だいたい次の六点にまとめることができました。

第一点は、世界は一つである。地球共同体、人類家族という普遍的な意識を共有して地球的な視野で見なければならぬということ。第二点は、お互いに相互関係の中で、相互依存の中で生きている。したがって、他者に対する脅威は自分に対する脅威であって、他者の安全は自分の安全であるという考え方。第三点は、いのちの尊厳。人間のいのちだけではない。動植物・土地等、一切衆生のいのちの尊厳をいかに尊ぶか。第四点は、弱者への配慮。第五点は、先ほどのサステイナビリティの問題ですが、将来生まれてくる子供たち、子孫、将来世代に対する責任の問題をどう考えるか。最後の六点目は、さて我々は実際に行動主体

として何をするのか。個人として、組織として何をするのか。その行動主体と責任性。

「いついつた」が、「共有される安全保障」(shared security)の内容であると理解しております。そのような視点から、日本委員会としては今度の洞爺湖サミットでの提言には、その考えを基本的に盛り込みたいという意向を持っていたわけであります。先ほどの住先生のお話にも、そのいくつかが出てまいりました。それから、今のパネリストの先生からもすでに出されました。

では、次の問題は、こういった大きな課題を背負っている中で、具体的に何をするのか、行動主体として、実践として何ができるのかといった問題にしばらくながら、お話をしていただければありがたいと思います。

佐藤 今回、住先生が100年先のことなんか分かるわけではないのだから、30年先のことと300年先のことをそれぞれやりながらつながるように

すればいいと言われたのは、言い得て妙な言葉だなと思いました。

それで、WCRPとして宗教者サミットで言えるのは、30年先、弱者に対してはこういうふうにするということと同時に、ぜひ宗教者の集まりとして300年先のことはこうやる、例えば軍備を全廃して核を全廃するとか、資源、資本を環境のために用いるということは誰も異存のつけようがないはずです。このような長期的なことを人々の旗印として掲げられる唯一の集まりがWCRPではないかと感じた次第です。

それからもう一つ思うことは、今の食糧危機、飢餓の問題への取り組みです。それには、ぜひ初等教育の段階から、自ら耕し、植えて、食を得るという、生き方の基本を身につけるようにしなければいけない。援助にしても、ただ物を贈与するということでは持続しないし、300年先につながらないのではないかと思います。それには先ほど眞田先生や山田先生がおっしゃったように教育

です。別に専門的な大学教育ではなくて、生きることに関わる技術や知恵、知識、それにもっと大切なのは「生きる」ために自ら努力し、他にも貢献するという心の教育と一体になって伝えていかなければならないのではないのでしょうか。

それからもう一つは、人類は一つ、世界は一つ、というとき、一の中に無限にバリエーションがあると考えないといけないと思います。そうではなくて、「こういう思想だからこうやれ」と言ったら、かつてのファシズムにつながってしまいます。さっきの共創という話にも出てきましたように、個人の中に共創のもとがあるということを忘れると、かつてのファシズムにつながる。我々技術者も、ひとつ間違っていると、こういう技術がいいんだから、それが分らないのは間違っていると排除したり、抑えつけてしまう。そういうことではないかと思えます。ですから、やはり寛容の精神、違いを認める寛やかな心が大切だと思います。

藺田 冒頭で住先生がおっしゃった、我々は将来のビジョンを持たなければならぬだろうということで、2050年の低炭素社会のイメージを二つに分けられていますね。一つが「ドラえもん型」の社会。一方、対照的なのが、「さつきとメイの家」という、これは「となりのトトロ」だと思わんですが、この二つで提示をされました。先ほど申しましたように、これは二者択一というものではないのではないかと思います。

と申しますのは、ビジョンAで、ドラえもんの社会というふうにはめられたその解説の中では、内容は都市型であって、個人が大事にされる社会だという話がありました。これは文明の問題ですね。要するに、近代で言えば、科学技術文明というのはいくら抑えても抑えきれない一つの流れです。しかし、果たして人間はこれだけでいいのだろうかかと当然思います。つまり、都市型、個人中心の社会というものの行き着く先の一つは、現代のさまざまな心の病でもある。

その意味では、もう一つの、となりのトトロの社会というんでしょうか、そういう社会は分散型で、コミュニティの中で生まれるものであり、地産地消であり、必要な分だけ生産、消費をすることで、もったいないという精神を実現する社会で、最終的には文化社会的価値を尊ぶというような解説をしていただきました。

私はこれは文明ではなくて文化の世界ととらえさせていただきたいと思うんですね。つまり、一方では文明というグローバルな、一つの大きな流れの中でとらえる。しかし、人間として人間らしく生きるためには、やはりみんなコミュニティを持たなくてはならない。今、人と人のつながりがなくような社会の中で、さまざまな病弊が起きているとすれば、やはり人間が人間らしく生きるためには、やはり人々の共同体がぜひとも必要であると思います。

かつてはそれぞれの地域のコミュニティ、例えば、村や町、あるいは家や家族という単位があ

って、おのずから、となりのトトロのように自然と共生しながら、あるいは共創しながら生きてきました。それはもうすでに許されなくなっております。しかし、あらためて新たなコミュニティをつくるという中で、宗教の役割は極めて大きいだろうと思います。

従来の共同体のあり方を維持するか、あるいはまったく新しい共同体を考えるか。最近はどう家族の共同体も相当流動的になって、別に親子、夫婦でなくても家族や共同体をつくるというようなことも出てきておりますけれども、いずれにしても、人と人との強いつながりを持って、お互いに助け合い、いのちを育て、いのちを後代につなげていくという意味での、人間らしい、霊的ないのちの交換といえますか、あるいは共有といえますか、それを人々の中に植えていくためには、やはり宗教の力は極めて大きいし、また我々宗教者の力はすごく大きいのではないかという感じがします。

奈良 ワンネスという言葉が言われておりました。地球は一つ、人間はみな平等ということですが、平等だということは個の個性がつぶされることではまったくなく、個がそれぞれの特色を生かしながら全体の調和がとれていくことだと思います。そういう利と他の関係を考え、違いを大事にする人間関係と言うとき、その人間関係を結ぶものは宗教的に言えば愛だと思います。仏教で言えば慈悲だと思います。

ただ、地球は一つであるとか、すべてが平等であるとか、それを口で言っているだけでは理論で終わってしまいます。実践するにはどうしたらいいのかということですが、これは理論を理論として受け止め、議論し合っても、先に進まないだろうと思います。それでは何らかの形で慈悲心、愛というものを涵養して、それからそういう運動をやるのかと言っても、これもいつになったら始まるかわからないと思います。

私は、最初から完全な慈悲なんてものはないと

思います。慈悲というのは、具体的な実践を通じて次第に育っていくものだと私は考えております。ですから、私どもはそれぞれの身の回りの状況に応じて、みんなが、人類は一つ、地球は一体というテーマを日常生活の中で実践し、その実践のプロセスの中で自他平等、あるいは共に生きるということを内面化していく。そうした姿勢が必要だろうと思います。ビジョンはビジョンとしておきながら、具体的な実践の指針として、とにかく体を動かしてやっていくより仕方がないんじゃないかと考えます。

山田 先ほど紹介した八つのミレニアム開発目標ですが、一言で言いますと、社会的に弱い立場に置かれている方々に決してしわ寄せがいかないような形で開発が大事だということです。皆さんのお手元にある趣旨のとおり、私たちはこれを持って、北海道のサミットを目指して主張していくわけですが、今申し上げた点は、議長国である日

本こそ、これを決して忘れず、大切にして、実現していくようにということを宗教者として主張してまいりたいと思います。

眞田 環境問題が議論されるようになったのはいつ頃からでしょうか。50年代、60年代はバラ色の未来が予測されていました。いわゆる未来論者の時代ですね。彼らは原子力時代、オートメーション時代、宇宙時代、ライフサイエンス時代、こういう時代が来ると言っておりました。豊かな都市がつくられ、脳の労働に代わってコンピュータ、筋力の労働に代わってロボット、あり余る時間とレジャーの使い方といった事柄が論じられ、科学技術万能のユートピア論が展開されていたのが50年代、60年代でございます。

その60年代の後半から環境問題はじめ、貧困、疾病、食料、紛争等さまざまな問題の危険性が叫ばれてまいりました。72年のローマクラブで、人類の危機、成長の限界ということが叫ばれたのが

大きなきっかけになっているはずです。それから、すでに30年が経ちました。94年に、イタリアのリバ・デ・ガルダでWCRP大会が開かれました。この大会の議論は何であつたのか。それを思い出していただきたいと思うんです。「地球は傷ついている」というのがテーマでした。

その1年前に開かれた93年のシカゴでの万国宗教会議では、「世界は苦悶している」というのがテーマでした。それ以来、国連でも、さまざまな世界会議や国際会議等々でも、環境問題はじめ、我々が今抱え込んでいる問題が国際的にも国内的にも、社会各層、さまざま角度から論議されてまわりました。

先ほど多くの方々から問題の提起がなされました。「もう会議はいいんだ」「実行だよ」と。「どう実践するかだ」と。こういう意見はもつともだろうと思います。今、私たちが問われていることは、どう実践するか。私たち宗教者個人として、宗教団体として、どう取り組んでいくのか。こう

いったことがとうに問われているにもかかわらず、我々の現実はいかであるのか。こんなことを強く反省させられた今日でございました。

また、今日の議論を基にして、WCRP日本委員会の先生方も洞爺湖サミットに向かってご尽力くださると思っております。どうぞ、今日ご参会の皆様、WCRP日本委員会に今まで以上のお力を、あるいはご助言、ご叱声をいただきたい。こう願ひまして、私たちの今日のシンポジウムを閉会させていただきたいと思ひます。ありがとうございました。



西田多戈止

WCRP日本委員会常務理事（一燈園当番）

今度の洞爺湖首脳会議の主なテーマに環境問題が入ったと言われております。そして、私たちの勉強会では常にテーマの初めに、平和のため、と入れます。私はこの平和のための、という言葉を読みますとき、人類社会の平和のためなのか、地球社会の平和のためなのか、ということをよく考えるべきだと思います。

そして、二つの言葉は同じようでありますけれども、往々にして対立する関係にあるんじゃないかと考えるわけです。人々が平和を求めるその根底に欲望といったものがあるとすれば、地球と対立関係になるのではないかと感じています。

只今、住先生のお話を聞かせていただきまして、社会を多面的に捉える柔軟な思考の必要性を感じました。奈良先生が、人の体の中には無数の細胞があつて、それぞれが個性的な特色を生かした生き方をしつつ、それらが集まって一つのいのちをつくっているんだと、こういうふうにおっしゃいました。

そうすると、地球のいのちというのはどういふものかと考えます

と、人類も一つの細胞でありますし、1200万種あるという無数の生物もやはりそれぞれが細胞であって、それらが個性を生かしながら大きな地球のいのちをつくり出しているんだと。そんなことを考えさせていただいて、大変勉強になったわけであります。

私は13年前に地球感謝の鐘というのを宗教協力で作らせていただきました。これは庭野先生にも、宮本先生にも、他のWCRPの諸先生方にもご協力をいただいたんですけれども、その場所は宗教の好きな方も来られますが、宗教なんか嫌いという人も来られるところに建てております。そして、まず地球に感謝してください、そして地球の平和を祈ってくださいと訴えさせてもらっております。

昨年の9月27日ですが、ダライ・ラマ法王に会いに行きまして、地球へのメッセージをくださいとお願いしました。それが9月28日で、確か10月5日にメッセージを送ってきてくださったんです。それを読ませていただいて、閉会のご挨拶に代えたいと思います。

「私たちの環境を保護することは、単なる倫理的問題ではなく、私たちの生物の生存そのものに関わる緊急の問題です。地球上の生物にこれほど大きな損壊を及ぼす環境破壊は、生物と自然のデリケートな依存関係に関する無知が原因で引き起こされます。今日私たちは、私たちが受け継いだ遺産、私たちの責任、次なる世代に何を手

渡すべきかについて倫理的な見直しを始めています。私たちにはそれをする能力と責任があります。手遅れになる前に、行動しなくてはなりません。　　ダライ・ラマ　2007年10月5日」

　　こういうメッセージを頂戴致しました。それをご披露させていただいて、閉会のご挨拶とさせていただきます。皆さま、本日はありがとうございました。



WCRP、レリジョンズ・フォー・ピースについて ——私たちの辿る道に想いを寄せて——

ウィリアム・ベンドレイ WCRP 国際事務総長

一、はじめに

尊敬するWCRP日本委員会の先生の皆さま、
この勉強会にお招きいただきましたことを心から
篤く御礼申し上げます。

今日のお話は三つの流れがございます。まずそ
の第一は、WCRP（注＝ベンドレイ事務総長は
WCRPの英語略称、Religions for Peace [レリ

ジョンズ・フォー・ピース）を用いているので、
以下、すべてこれに従う。）の成長の過程、特に、
ワールド・カウンシル（世界諸宗教指導者評議会）、
これはそれぞれの国内委員会、あるいは地域の組
織と協力しながら私たちの使命を達成していこう
とする上部組織ですが、このワールド・カウンシ
ルについてです。二番目には、私たちすべてにと
って、未来に対してどんな課題があるのか。三番
目は、この機会に私たち全員で考えていきたいこ

と、すなわちそれぞれの宗教伝統が持つ宗教の心がレリジョンズ・フォー・ピースの「こころ」としての精神性と融合していくにはどうしたらいいのかということです。

まず、この三番目のテーマから始めさせていただきます。

二、レリジョンズ・フォー・ピースの

「こころ」としての精神性

まず最初にお願ひしたいことは、皆さんは、それぞれ独自の宗教的伝統と宗教的霊性・精神性を持っておられるわけですが、今後とも、これまでに以上にそうした宗教の心を持って、レリジョンズ・フォー・ピースの活動を一緒にしていっていただきたいということです。

しばしば私たちが耳にするのは、「日本人の心」ということです。集合体、集団としての日本人の心が形成されるのは、多様性に溢れた宗教的な霊

性から流れ出てくる深い泉に基づいているのであり、そこから日本の独自の文化が生み出され、文化的な成長が育まれてきたのであります。レリジョンズ・フォー・ピースは、そうした日本人の心を必要としています。日本の精神性・霊性を必要としています。

一つ例を申し上げたいと思います。中国人の小説家である楊逸（ヤン・イー）さんは、二〇〇八年の七月、第一三九回芥川賞を受賞されました。二一年前に来日された楊逸さんは、最初はまったく日本語が分からなかった。それが二一年後に芥川賞を受賞されるまでになった。これは素晴らしいことであつて、まさに驚くべきことであろうと思います。

さらにこれと同様に素晴らしいことは、日本国民が、楊逸さんを、いわば、外国人でありながら、インサイダーとして、本当に日本人として受け入れたということです。これは、日本人の深い霊性を表しているものではないかと思ひます。

この楊逸さんについて、もう一つ、非常に大事なエピソードを、私は知りました。これは、ご存知の四川大地震です。二〇〇八年の五月一二日、北京オリンピックのわずか数カ月前に起きたこの大地震で、七万人の人たちが亡くなりました。その災害に対して、日本は直ちに救援隊を組織して派遣しました。これは、楊逸さんにとって非常に掛け替えのない経験になりました。

ここに、人民日報が撮った写真があります。これは、日本の救助隊員が二列に真っ直ぐに並んで、亡くなったたった一人の無名の中国人に黙祷を捧げているところです。日本を本当に知っている人ならば、これは救助隊員の心から自然に出たものだということ、ほとんど直感的に分かると言えます。本当にこれは、深い霊性の泉とも言えます。本当にこれは、深い霊性の泉とも言えます。どうか、日本の文化の中から湧き上がってくるものです。この救助隊員は、自分の行為にそんな深い意味があるということすら認識していなかったと思います。しかし、それは自分の持っている

霊性、宗教的精神性の表現そのものであったのです。

そういった意味で、この一枚の写真が楊逸さんに、いわば精神的な地崩れを起こさせたのです。そして、日本の文化というレンズを通して、もう一度中国の文化を眺め直そうという機会になったのです。楊逸さんは、この事件を通じて、もう一つの違った角度から、なぜ日本人が謙虚で、誠実で、他者を尊敬し、困った人を助ける、無私の奉仕をするか、そうした行為の日本の文化的・精神的な基盤について考える機会を与えられたのです。楊逸さんにとっては、このような救助隊員の行為がまさに日本の美徳、健全さ、精神的な基盤を表現したものに他ならなかったわけです。日本の霊性の表現というものは、まさにこれこそが躍動する心として、レリジョンズ・フォー・ピースの心として、日本の皆さんから流れ続けていっていただきたいと願うのです。

三、世界のレリジョンズ・フォー・ピースの 成長と形成

ここにありますが、京都の第八回大会の写真です。この大会は、偉大な先人たち、そしてこのレリジョンズ・フォー・ピースの活動に参加された大勢の方たちの賜物でもあります。レリジョンズ・フォー・ピースは、世界の宗教コミュニティが共通の行動のために協働していく、平和のための活動であります。

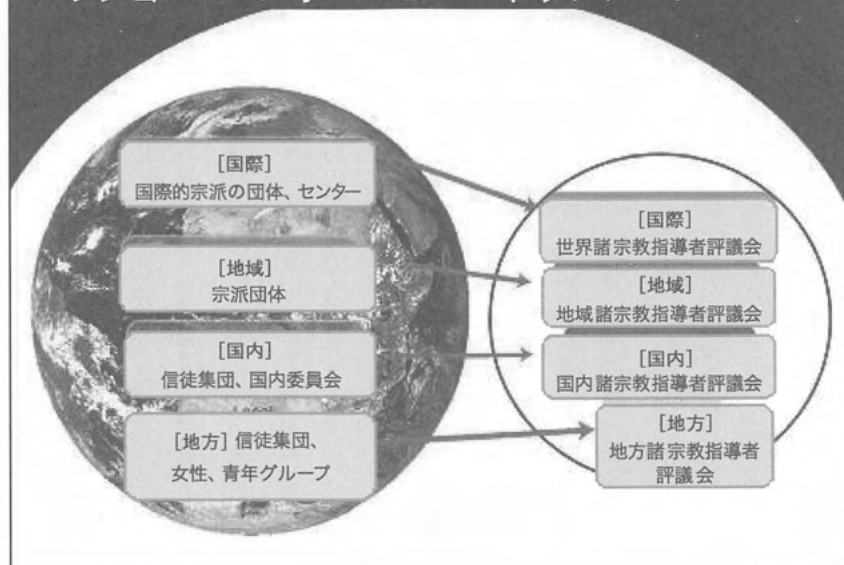
世界の宗教コミュニティ自体が、互いにパートナーとして認め合い、平和を構築していく。もちろん、客観的な平和が実際にすぐに実現するかどうか分からない。そういった状況の中で、平和の瞬間が果たして私たちを包んでいるのか、それとも、混乱の中にあるのか、どちらの状況においても、私たちはパートナーを必要としているのです。

私たちはネットワークを持っています。ここで、私たちが共通の認識としていることは、レリジョンズ・フォー・ピースをどのようにして構築していくべきかということです。その場合、まず自問自答しなければならないことは、一体どこに宗教コミュニティが存在しているのか、どこに信仰心を持った人間が存在しているのかということなのです。それぞれの地域に、アフリカに、アジアに、ラテンアメリカ諸国に教会があり、寺院があり、モスクが存在しています。ですから、宗教コミュニティは、それぞれの地域にあるのです。

多くの宗教コミュニティは、さらに、連合体をつくり、地域の組織をつくり、そしてしばしば、何らかの国際センターもつくっていきます。あるいは、場所をつくったり、あるいはグローバルサイトをつくったりして、活動し、存在を示しています。

従って、宗教コミュニティは四つのレベルで存在していると言っているでしょう。レリジョン

レリジョンズ・フォー・ピースネットワーク

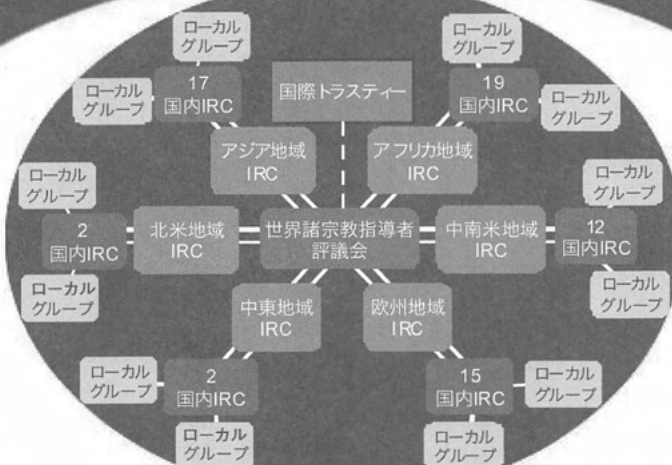


ズ・フォー・ピースの組織は、こういったネットワーク化を通じて行われます。地方のレベル、国内レベル、地域レベル、そして国際的あるいはグローバルのレベルで、それぞれがお互いに存在している現実の組織と対応しているわけです。

レリジョンズ・フォー・ピースにおいては、どのレベルにおいても、例えば国内委員会であれ、その他のどのレベルであれ、そこにはそれぞれ指導者があり、それぞれのレベルにおいてレリジョンズ・フォー・ピースの組織化を行っていく責任を負っております。国のレベルの指導者は、地方のレベルを組織化する責任があり、義務があります。そして、「地域」も「国際」も、それぞれ次のレベルに同じような責任と義務を負っているのです。

上に評議会がありますが、国内委員会から地域委員会をつくっていかうとします。ですから、一方通行ではない。上から下、下から上という関係が存在しているわけです。そして、私たちが全体として、レリジョンズ・フォー・ピースの家族と

レリジョンズ・フォー・ピースネットワーク RELIGIONS for PEACE



して仕事をしていく。ですから、国内委員会、地域委員会が、世界諸宗教指導者評議会（ワールド・カウンシル）や各種国際委員会をつくっているということになります。

一体、では、現在、どれだけの数の集まりがあるかということを見てみましょう。この一番上に位置するのが世界諸宗教指導者評議会（注Ⅱ以下、「ワールド・カウンシル」の英語名称を使う）、これが一つ。それから五つの地域諸宗教指導者評議会があり、ヨーロッパ、アフリカ、ラテンアメリカ、中東、北アフリカの組織ができています。さらに、国内レベルでは、国内諸宗教指導者評議会（IRC）が七十一でできています。そして、それぞれが、さまざまな発展段階にあります。さらに、国際女性部会が一つ、地域女性部会が四つ、そして二〇の国内女性部会があります。青年部会も、国際青年部会が一つ、地域青年部会が五つ、国内が一〇あります。そして、それぞれが成長を続けている状況です。

それぞれのレリジョンズ・フォー・ピースの地方のユニットが、国内レベルとつながり、国内諸宗教委員会（IRＣ）と結びついています。こうしたローカル・グループが、一二あります。そして、中心部分をなしている組織がワールド・カウンシルです。

で、このネットワークの図の点線の部分、この点線の先に国際トラステイがあります。単にトラステイと言う場合もありますが、これは特別な意味を持っております。いわばパトロンのですね。これは支援者であります。これについては、あとで触れさせていただきますと思います。

ですから、レリジョンズ・フォー・ピースを図式化すると、今ご覧になったような形になります。ワールド・カウンシルは五九人の上級指導者の集まりになっています。このワールド・カウンシルの事務局は、国連から一〇〇メートルしか離れていません。そして、私たちの国際事務局は国連の真向かいにありますね。これは意図的に選んだ場

所です。それは、レリジョンズ・フォー・ピース、宗教コミュニケーションが国家組織と国連と協力関係を保っていかねばならないということの意志表示です。

この両方の事務局は、ニューヨークにあり、五人の人がフルタイムで働いています。ワールド・カウンシルの方ですね。そして、五人のフルタイムのスタッフがいて、それから大勢のボランティアも仕事をしています。

それから、地域委員会では、例えばアメリカでは一二人のフルタイムのスタッフがおり、アジア、これはアジア宗教者平和会議（ACRP）の話ですが二人のフルタイム、それからヨーロッパでは三人、フルタイム、専従者ですね。そしてアフリカが三人ということで、合計しますと三五人のスタッフがフルタイムで、専従者として国際的な地域のオフィスで働いております。

さらに、それに加えて七一のIRＣがあります。それぞれの一つひとつが素晴らしいスタッフを持

っており、その中には、専従者とボランティア、パートタイムがいるわけです。これが、私たちのスタッフの家族をつくっているわけです。

そして、非常に多様な宗教と文化の背景を持ち、宗教コミュニティに深いコミットメントを持った人たちが、全世界でこのようにスタッフとして活動しています。特に、日本委員会のスタッフがレリジョンズ・フォー・ピースの国際部門に対しても、いかに大きな貢献をしてくださっているか、これを特に申し上げたいと思います。二人のスタッフの方がニューヨークにおられ、妙智會教団の方もおられ、また立正佼成会の杉野さんもいらっしやるわけです。

次に、このワールド・カウンシルについて少し触れさせていただきます。ご存知の通り、ワールド・カウンシルの役員は選挙によって選ばれ、世界大会で大きな責務を持っています。ワールド・カウンシルは、三つの戦略を持っています。まず第一に、自らの能力・機能の強化、これはグロー

バルな平和のための仲介者としての役割です。二番目に、ワールド・カウンシルは、地域と国内のレリジョンズ・フォー・ピースの組織が、私たちの使命を果たしていく機関として強化されるように支援していくことです。第三番目に、このワールド・カウンシルは、グローバルなネットワークキング、全体の拡大、強化に努め、世界にあるさまざまなグループが互いに意思疎通をし合っていくことに支援するということです。そして、事務局を通じて、こういったネットワークの維持と強化に努力しています。

その意味で、このワールド・カウンシルは、平和のためのエージェントであるということになります。

まず、その例を一つ申し上げたいと思います。それは、国連との協調作業です。今日、国内法によって保護されていない、法律の保護の外側にある数多くの貧しい人たちがいます。法律によって貧困層の権利を守る、貧困層に対する法的強化が

必要とされています。ですから、「法の支配」というとき、貧困者の場合には、土地も持てない、ビジネスを行うこともできない、出生証明ももらえないといった差別となつて現れてきます。そのために、レリジョンズ・フォー・ピースは今年の二月、貧困と闘いながら、非常に高いレベルの、「法律によつて貧困層の権利を守る委員会会議」をつくりました。この会議では国際的に有名なオルブライト女史がコーチャーになつておりますが、ここでもレリジョンズ・フォー・ピースは国連の諮問機関として一緒になつて仕事をしております。

また、もう一つの例を申し上げます。二〇〇八年の一二月にオスロで署名されたクラスター爆弾の禁止条約です。この武器は、何千という小さな爆弾をまったく無差別に撒き散らします。現実、今、ベトナム戦争で使われ、何百、何千という小さなクラスター爆弾の不発弾が残つており、子供たちがそれを拾つて、足を吹き飛ばされるとかいうことが起きているわけです。さらに、地雷とか

非常に残酷な武器もあります。レリジョンズ・フォー・ピースは先頭に立つて、宗教者たちが政治指導者たちと協働して、こういったものを禁止していこう、また解除していこうとしています。

国連は、まことに嬉しいことに、最近、核兵器に対する新しい宣言を、四〇年のレリジョンズ・フォー・ピースの核兵器に対する反対運動についての記録文書を出してくださいました。つまり、こういった武器、核兵器を持つ国、特にアメリカに対して、核兵器の武装解除とその能力の弱体化を求める宣言です。そういった意味で、ワールド・カウンシルは、国内委員会と合わせて作業しているのです。

また、二〇〇八年、札幌で、これは非常にユニークな、素晴らしい協力関係が、レリジョンズ・フォー・ピースの間で、つまりWCRP日本委員会と「国際」の間に持たれました。G8の直前に開催された「平和のために提言する世界宗教者会議」がそれです。宗教者会議の宣言が、日本国首

相に伝えられました。さらにそれが、日本の首相を介してG8北海道洞爺湖サミットに出席していた他の国家の元首たちに対しても伝えられました。例えば、英国政府は私たちの宣言文に賛意を評し、宣言の深い意味が他の国に対しても伝えられていったわけです。そういった意味で、これは非常にすぐれた日本の宗教指導者家族による大きな貢献があった一つの例であります。

つい先月、レリジョンズ・フォー・ピースの韓国の兄弟姉妹が「国際」に対して代表団を送り、国連で大きなシンポジウムを開催致しました。そのシンポジウムで、各国政府、国連機関の代表者たちを招き、共に、宗教コミュニティと国連との間にいかににより良い協働関係を構築していくかについて語り合いました。

それから、各国レベルでの一つの例として「イスラエル・パレスチナの信仰を持つ青年による緊急会議」があります。ガザでのショックな爆弾攻撃を契機として、イスラエルとパレスチナの信仰

心を持つ青年が会議を緊急に開こうと立ち上がりました。二つの国が、あるいは二つの政治集団が紛争状態に追い込まれたときに一番大事なことは、まさにそういったときこそ、上級の指導者が関わることが重要である、さもないと、それぞれの当事国の国民によって正しく理解が生まれない場合があるからです。

従って、こうした場合には、私たちはさらにエネルギーを結集して、青年たちを支援していかねばなりません。そこで杉野さんは緊急会議を主催され、イスラエルとパレスチナの青年たちのこの緊急会議の場において、信仰を持った人たちが、このガザの厳しい状態、残酷な状態をいかに乗り越えていくかについて胸襟を開いて率直に語り合ったのです。

次に、ワールド・カウンシルがどのようにして仲介的な役割を果たしているか、つまり、地域のレベルの新しいIRCをいかにつくっていくか、ということです。ここでは、過去二年間にわたっ

て行われた活動ですが、中東と北アフリカの地域における宗教指導者がレリジョンズ・フォー・ピースの地域組織をつくっていきこうという活動です。私たちは、この地域がレリジョンズ・フォー・ピースの家族の中で極めて重要な、決定的な意味を持つものになっていくものと考えています。

さらに、これに関して、ウガンダについて大変うれしいご報告を申し上げたいと思います。他の人たちとの協力、パートナーシップのあり方という点からは、ステップ一ということになりますが、小さなグループがウガンダを訪問しました。ワイルド・カウンシルの議長が手紙を書いて、その手紙を持参し、本当に小さなお金、いわゆるシードマネーの種まきをしたわけです。ウガンダのIRCには上級の指導者が参加しておられます。

ステップ二としては、ビル・ゲイツ財団の資金援助があります。HIV／エイズで苦しむ子供たちに対して何ができるのか。地域の教会、神社、モスク、そういったレベルで何ができるのか。ど

ういったサービス、奉仕活動ができるのかということの研究するための資金の援助をしてもらっているわけです。これによって、アフリカ諸国の中で最大のインフラができたわけで、もしその問いかけに対する答えが出てくるなら、これは大変大きな影響を与えることになります。

ですから、ウガンダの兄弟姉妹たちは非常に大きな成功を収めています。UNDPから一五〇〇万ドルの援助を受け、HIV／エイズに苦しむ子供たちを助けるための最前線に立って、仕事をしています。ユニセフのディレクターが、ウガンダ大統領の前で、大勢の人たちに対してこう言いました。「私たちは、宗教コミュニティの助けを借りなければ、この国の子供たちに手を差し伸べることができません」と言いました。レリジョンズ・フォー・ピースはこのウガンダの素晴らしい人たちと協調、協力、協働して、何千人もの子供たちに、迅速に支援の手を差し伸べているのです。もう一つはスリランカの例です。スリランカに

については、日本自体が政府の平和構築の過程としての環境づくりに優れた関係を持っています。ここで私たちが非常に大きな誇りを持っていますことは、すべての宗教コミュニティがスリランカ全土のレリジョンズ・フォー・ピースの組織をつくらうとしていることです。これには、ワールド・カウンシルのメンバーが、例えばスリランカと同じ宗教伝統を持つ三人のカンボジアからの代表者、ワールド・カウンシルのメンバーでヒンズーのコミュニティの代表のエラ・ガンジーさん、ワールド・カウンシルのメンバーで、ノーベル平和賞委員会の副委員長だった方で、キリスト教の代表のスタルセットさん。それからムスリムの代表も参加しています。こうした紛争継続地での和解の過程で宗教指導者の力が益々重要になりつつあり、私たちはこうした支援をしてきているわけです。

また、私たちの平和構築への主要な戦略には次の三つがあります。すなわち、その第一がこのワールド・カウンシルの機能との関連におけるグロ

ーバルな平和のための仲介、第二に現存のIRCの組織強化、第三にレリジョンズ・フォー・ピースのネットワークを通じて、私たちが一つの家族としてコミュニケーションの円滑化、こういった三つの主要な戦略によって活動しているわけです。ラテンアメリカやラテンアフリカ、あるいは中東などに行ったとき、私はいつも京都での第八回世界大会の写真を見せるんですね。ほとんど全世界のレリジョンズ・フォー・ピースのオフィスにこの写真があります。私たちはこれまで幾度も数多くの会議を繰り返してきましたが、この第八回の京都大会ほど優れた大会はなかったと、私はいつも言っております。

私たちは、会合を持つとき、私たち一人ひとりが、私たちの持っている自身の宗教的アイデンティティ、宗教の着物を脱ぎ去ることはありません。私たちは、それぞれの宗教伝統を持ち続けて、実際に多くの活動を協働し続けていくことができるのです。世界大会があり、その世界大会にコミッ

レリジョンズ・フォー・ピース国際および
地域事務局の2008年度歳入



合計 = \$6,280,894
約6億2810万円 (1ドル=100 円)

レリジョンズ・フォー・ピース国際	\$4,889,660 約4億9千万円
アフリカ	\$571,441 約5700万円
アジア	\$100,000 約1000万円
ヨーロッパ	\$706,793 約7100万円
中南米およびカリブ海	\$13,000 約130万円

トすることを通して、平和のための仲介、紛争和解の支援を行っているのです。

私たちにはたくさんパートナーがあります。ここにはいくつかの例を示しております。有名な財団では、例えばフォード財団のようなもの、それからUNDP、ユニセフ、その他いくつかの国連機関などが資金援助、場合によっては実際の活動計画に直接参加し、支援してくれています。あまりよく知られていないのは、フィンランドの教会からの援助、さらにノルウェーの外務省の関連機関、それからアメリカ政府、その他いくつかの政府からの支援もあります。

二〇〇八年に、レリジョンズ・フォー・ピースは、三四のパートナーによって支えられました。その中には、七つの宗教ベースの機関、それから三つの財団、それから一九の国際機関、NGOも含めてですね、そして五つの政府から支援をいただいております。ですから、私たち自身の宗教コミュニティ以外からも、非常に広汎な支援、パ

ートナーのサポートがあります。

「レリジョンズ・フォー・ピース国際および地域事務局の二〇〇八年度歳入」の表をご覧ください。私たちの歳入が、いかに私たちレリジョンズ・フォー・ピースの中核的な役割を果たしているかがお分かりになるでしょう。まず、「国際」というのはこのワールド・カウンシルの分野ですが、これは二〇〇八年度の歳入状況を示しています。さらに、「地域」の組織の歳入も考えなければいけません。これを見ると、実際の歳入の現実がよく分かっていると思います。例えば、アフリカ地域では、かなり大きな予算を持っていることがお分かりになるでしょう。

資金援助源になりますが、大きなもの、小さなものさまざまで、その数も多い。特に、ワールド・イスラミック・オブ・ソサエティの会長のドクター・シャリーフはこの地域の優れた二〇〇人のアフリカの宗教指導者をまとめておられます。それからアジアではACRPですね。ACRPからの

歳入としては、おそらく、小さな数値になっています。しかし、もちろん、この中に大会費用を含めれば、もつと大きな金額になっていくはずですよ。ヨーロッパでは、かなり大きな、ほぼ七〇〇万になる歳入を持っております。中南米は小さいですね。まだスタートしたばかりです。これには、「国際」から補助金が回されています。

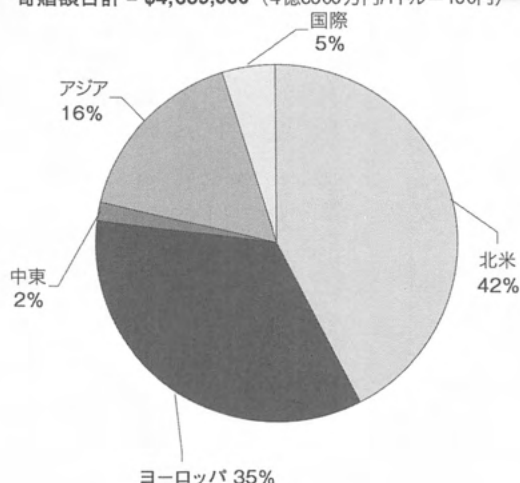
来年は、国別の歳入、国別の予算についての報告が出されると思います。すると、おそらく一千万ドル近くの予算規模になっているのではないかと思います。つまり、そういった国のレベルを含めていくと、外部に対して通常行っている報告より実際はもつと大きいと思います。もちろん、これは全体の一部です。私たちの行う貢献は、お金だけではなくて、素晴らしい奉仕活動や、スタッフの提供、そういったことも大きな貢献です。

今、ご報告した世界各地からの財源ですが、それは一体どこから来ているのかということですが、一番大きなものは、北アメリカの貢献で四二パー

2008年度地域別財源

RELATIONS for PEACE

寄贈額合計 = \$4,889,660 (4億8800万円/1ドル=100円)



セント、次は、ヨーロッパの貢献です。中東は今、始まったばかりです。しかし、今後、はるかに大きなものになっていく可能性があります。アジアの貢献が一六パーセントです。国連機関から五パーセント、つまりこの五パーセントは、まさに国連から直接援助を受けていると理解していただきたいと思っています。で、特にこの貢献がアジアから来ているということです。

ここで申し上げたいことは、北米から、またヨーロッパから来ているほとんどすべての資金は、財団、あるいは政府から来ています。ですから、財団や政府が私たちの活動計画に資金的基盤を与えていることになります。私たちの奉仕は、特定の奉仕、これは紛争和解であれ、あるいは子供たちのエイズからの救済であれ、直接的で、非常に労働集約的な活動をしなければならないことになります。

一つの活動をするためには、それを支えるための費用が必要です。私たちは、サンクス・ギビング

グのときに、「あまりお祈りが長くなると、みんな眠ってしまうよ」と言うんですが、つまり、レリジョンズ・フォー・ピースに対して資金援助することによって、レリジョンズ・フォー・ピースがさらに活動できるようにすることが大切なのです。さまざまな財団や政府の資金援助がなければ、パートナーも得られない。パートナーがあつて初めて、直接的な奉仕活動ができるわけです。

前に触れましたように、国際トラステイと呼ばれる優れたグループがあります。その中には宗教指導者もいれば、非宗教者も含まれています。繰り返しますが、トラステイという言葉は、通常、法的な意味を含んでいます。レリジョンズ・フォー・ピースのトラステイの場合には、これらの人たちは法的な責任を負いません。この人たちは、パートナーで、一緒になつてワールド・カウシールとして、また、ワールド・カウシールを支持し、支援してくださっている方々をトラステイと言つております。

これには、三つの支援領域があります。第一はパートナーシップの構築です。こうしたトラステイは、非常に高い技能を持ち、政府や財団との深いパートナーシップの構築に貢献をしてくださっています。さらに、第二に専門知識を提供してくださる方がいます。これによって大きな企業、レリジョンズ・フォー・ピースよりもはるかに大きな企業、コミュニケーション技術、こういった企業のすべての経験が生かされてきます。ですから、まずそういった優れた資源の動員力を持った人たちですから、資金活動を勧募する能力もあるわけです。

第三は資金援助です。一四の国から二人のトラステイがいます。アメリカでは集団として、今年、六五万ドルを資金援助してくださいました。これは、毎年、私たちに対して資金援助をしてくださっています。

四、未来に向けたレリジョンズ・フォー・

ピースの課題

次に、私たちの将来の課題について語りたいと思います。これは未来志向の課題です。ここでは、私たちが直面する問題すべてに関わります。私たちは、人類家族として、レリジョンズ・フォー・ピースとして、これからの一〇年、二〇年、三〇年、どのような活動を進めていくかを考えてみます。そうしますと、ご承知のように地球の温暖化、エネルギー、資源、水、食糧といった極めて重大な地球的課題があります。日本は、地球温暖化に対してリーダーシップを発揮してくださっています。京都の議定書も新しくしなければなりません。南アメリカでは、最大の氷河が毎年、毎年二〇〇メートルほど消失しています。全世界で同じような現象が起きていることは、私たちのよく認識しているところです。地球の温暖化があらゆる次

元で、私たちの生活に影響を与え、安全な生活の脅威になっています。

私たち神道の兄弟姉妹が、その宗教伝統において、まさに日本だから可能だという世界貢献への素晴らしい意識を持っておられ、それが全世界における環境問題に対して良い影響をもたらしものと期待します。

この表は人口増加の動向を示しています。地球の温暖化が起こって、地球環境がますます劣悪化を辿っています。それにもかかわらず、世界人口は二〇五〇年には今日の六五億人から九五億人に達すると予測されています。二〇三〇年の段階で、八〇億人という大きな人口増加です。温暖化が進む。そうすると、同時に水が少なくなっていく。

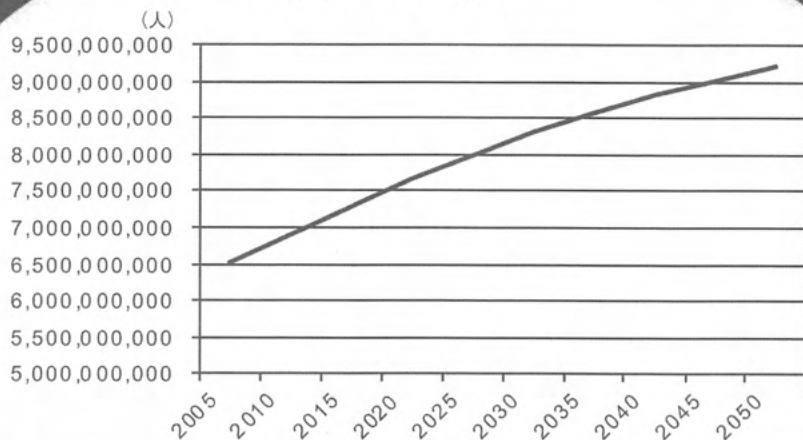
一方、人口は増加する。すると、当然、その間には相互作用が起こる。だから、私たちの想像を絶した悲惨な状況が起こってくる。こうしたことは、すでに科学者が私たちに指摘しているところです。

同時に、より新型の、より恐ろしい破壊的な核

重要課題:人口増加



65億人から90億人へ



兵器が生み出されている。現在、核兵器を保有している国、特に米国ですが、新しい兵器を益々開発・製造しているとしています。

私は、この将来の課題全体について語ることはできませんが、一緒に皆さんと考えていきたい、そのほんのいくつかだけに触れたいと思います。

私たち人類家族が直面している地球的課題の克服は基本的に二つの道しかない、そのいずれかを選択しなければならぬということです。それは、国が決めるのではない、民族が決めるのではない、宗教が決めるのではない。これは直接人間の心から生まれてくるものであると思います。私たちは、私たちの宗教の行為として、基本的にこの二つの道のいずれかを毎日、毎日選り続けていかなければなりません。それは、平和の道か、それとも暴力の道かであります。

宗教のハイジャックの道か。この道を歩む限り、私たちすべてが直面する大きな人類的課題に対処できなくなっていく。それとも、平和のための宗

教協力の道か。レリジョンズ・フォー・ピースを通じて、人類家族が互いに平和のために協働していくことができるか、その二つに一つであります。

私たちは、次のWCRP世界大会に向けて、地域諸宗教指導者評議會を五から六に、国内諸宗教指導者評議會（IRC）を七一から一〇〇に増やす。さらに、地域女性部会を四つから七つに、国内女性部会は二〇から四〇に増やし、地域青年部会は五から七つに増やし、国内の青年部会は一〇から三〇に増やす。そして、地域の事務所は三から六に増やしていくという目標を持って、地道な努力を続けていきたいと願っております。そして、今後、新規のトラステイの獲得と、トラステイの寄付の増加、個人寄付額の増加により個人寄贈の四割の増加を図ることを目標としております。

それぞれのトラステイについて申し上げますと、二人の日本人のトラステイがおられます。一人は皆さんの事務総長です。ラテンアメリカ、中東、北米などの地域におけるトラステイは、委任され

た仕事を持っています。これらのトラステイは、それぞれの国に戻り、そして自国の文化を重んじながら、その国のグループのトラステイの活動を進めております。このような創造的な力が、日本でもぜひ拡大され、強化されていただきたいと願っております。

さらに、将来の活動として、私たちは、レリジョンズ・フォー・ピースが手を差し伸べ得る範囲、領域を広げていかねばなりません。ニューヨークの事務局で、ワールド・カウンシルのメンバーのすべての人たちに連絡が取れるように、それぞれの宗教コミュニティの規模がどれだけあるのかを調べてみますと、私たちのワールド・カウンシルを通じるだけで二五〇〇万人以上の人たちと連絡できます。地域のレベルに行きますと、また、国のレベルまでまだ行っていませんが、その数はショッキングなほど大きなものとなります。レリジョンズ・フォー・ピースは、控え目に見て、潜在的にはおそらく二〇億人にリーチできると思ひ

ます。

ですから、私たちはさらに戦略を構築して、新聞、地域の宗教コミュニティを通じて、宗教指導者自身の言葉を通じて、宗教指導者の組織のメディアを通じて、レリジョンズ・フォー・ピースの使命を伝え、レリジョンズ・フォー・ピースについて、より深い認識を持つよう働きかけていかねばなりません。さらに一層の革新的な戦略を行使することによってレリジョンズ・フォー・ピースの世界的規模で持つ非常に大きなチーム力を發揮することが可能となるのです。

これは、グローバルなe・コミュニティ、つまり、インターネットのコミュニティをつくっていくことを意味します。これによって、レリジョンズ・フォー・ピースのすべてのメンバーは、それぞれのレベルにしようと、いつもつながっていただけることになるのです。

私の話は、そろそろ終わりに近づいてまいりました。私は、皆さんの靈性が過去においても、そ

して今後においても、レリジョンズ・フォー・ピースの脈動する心であることを深く確信しています。

一人の優れた作家の言葉を借りたいと思います。ノーベル賞を受賞された大江健三郎さんの言葉です。私はNHKで、これはニューヨークでも放送されたので、私はそこで見ましたが、本当に深く心を打つ言葉を聞きました。そこで語られた、大江健三郎さんのいくつかの言葉をお伝えしたいと思います。この大江健三郎さんの言葉は、私が心の疼きを覚えるほど感動的です。彼の持っている靈性は、私が到底語り尽くせるものではありません。彼はこういうことを言っておりました。

息子は、四つか五つになるまでは父親、母親にまったく何も語りかけてくれませんでした。だから、息子は家族という気持ちを持ってないんじゃないかと、父と母は思っていました。彼はとても隔絶した所にいたのです。いわば、草の中にある小

さな小石の一つのようだったのです。ところが、ある時、ラジオで鳥の鳴き声に、彼は興味を示しました。いろんな鳥の鳴き声があります。この女性のアナウンサーが、鳥の鳴き声がすると、その後で、何の鳥かということをと、とても平板な言葉で言いました。私はそれをテープに録って、彼に聞かせたところ、三年間聞き続けました。鳥の声と、この声は何の鳥だというアナウンサーの言葉を聞き続けました。

このテープが、どうしても必要になりました。というのは、この鳥の声を聞いている時は、彼は静かだったからです。鳥の声を聞いていない時は、うるさくてうるさくてたまらない。妻にも仕事があり、私にも仕事があるからです。こうして、私たちは生活し続けました。

息子が六歳になった夏のある日、山の別荘に行きました。妻は別荘の掃除をしていました。私は息子を連れて、小さな森に入っていました。そこには小さな湖もありました。鳥がさえずってい

ました。一對の鳥でした。突然、はっきりと平調な言葉で「クイナだね」という声が聞こえました。私は衝撃を受けました。森はまったく静まり返っていました。五分間、まったく静かでした。私は祈りました。どうか、次の鳥の声が聞こえますように。そして、息子の次の言葉が聞こえますように。

これは、夢か幻かと思いました。五分たつて、この一對の鳥のメス鳥の方でしょう、鳴きました。息子が「クイナだよ」と言いました。私は、別荘に帰って、妻にそのことを話しました。長い、長い時間、もう一回聞こえてほしいと思いましたが、とうとう、その夜は聞こえませんでした。一睡もしませんでした。

しかし、朝、早朝でした。小さなスズメが窓の前の小さな木に止まりました。小さな、チュツ、チュツという声がありました。私は「スズメだよ」と小さな声で言いました。そこからすべてのことが始まっていました。鳥がさえずると、私の息

子は答えました。「静かに」。そして、正しく答えます。二、三回名前を聞くと、それを覚えてくれました。そこで私たちは対話を始めることができました。そのようなになりました。

心が痛むような、美しい言葉で大江健三郎さんは語ってくれました。これは、彼の父親としての心、そしてその行動は、平和を構築しようとする場合に必要な、やると決めたらやり抜く、自分自身への誓約と忍耐と希望を表しているのではないのでしょうか。

私たち一人ひとり人間としても、そうではないでしょうか。ある意味では、まるで一人ひとりが鳥の言葉、さえずりを聞こうとしている、この息子のように。私たち一人ひとりがそうした存在ではないのでしょうか。ある意味で、私たちは、苦しみを通り抜けていくこの子供、一人の息子の父親のように、世界のさまざまな問題に心を痛めて祈っている父親のような存在であるかもしれません。

どんなに技術的に優れていても、それは、私たちに本当の平和をもたらしてくれません。本当の平和をもたらすのは、人の心です。大江健三郎さんのような心です。私たちが心を変えていけるなら、共に生きて、そして、前回の第八回京都市大会で私たちが誓い合ったように、すべての人が共に生きていける安全な社会をつくることが可能になると思います。

私は個人的な感想を最後に一つ申し上げたいと思います。初めて日本に来たのは、私が二三歳の時でした。そこで私は、何人もの日本人の禅の老師の指導をいただきました。一人の老師が私に言いました。「瞑想しなさい。そして、瞑想がより進んでいけば、あなたの心はより正直になっていき、あなた自身の宗教伝統ともう一度めぐり合うことができるようになりますよ」と言われました。私はローマンカトリックですが、この老師から素晴らしい、正確な予測を受けたと思います。仏教の伝統によって、私は私自身の宗教伝統の隠れた

扉を開けることができたのです。

最後に、遠藤周作さんについて一言触れておきたいと思います。彼は本当にまさしく日本人そのものです。と同時に、彼はキリスト教徒です。私は遠藤周作さんの小説を読んで、深い感動を覚えます。これは、ある意味で、私自身よく知ったことでありながら、同時に、全く新しく、神秘的なものを学ぶからです。遠藤周作さんの日本人の心というのは、キリスト教信仰を、あたかも光を屈折させて、見たこともないような色を見せてくれるプリズムのようでした。

私は、皆さま一人ひとりの中に、そしてどうかレリジョンズ・フォー・ピースの心の中に皆さまの日本人の心をお与え続けていただきたいと願っております。それは、私自身を導き続ける偉大な教えの一つが日本人の心であると、謙虚に、喜びをもって、皆さまからお認めいただけるとい喜びでもあります。ありがとうございます。

質疑応答

三宅光雄

WCRP日本委員会常務理事

私はWCRP日本委員会財務委員長をしております。「国際」で四億九〇〇〇万円というお金が集まっているようですが、その中でアジアが一六パーセントとおっしゃいました。ということは八千万円になるのですが、その中身を教えてくださいただあればありがたいと思います。というのも、日本委員会もその一部を担っているからです。

もう一つは、昨年暮れ、韓国委員会がニューヨークの国連に交流代表団を送ったという話がありました。もう少し詳しく教えてくださいただあればありがたいと思います。

ペンドレイ事務総長

アジアから来る財政援助は、多くのものが日本の資金援助です。これについては本当に感謝しています。二つの基本的な方法でまいます。一つは、WCRP日本委員会からです。もし、レリジョンズ・フォー・ピースの七一の国内委員会のすべてが日本委員会ほど優れた貢献をしてくだされば素晴らしいと思いますが、現状ではまだそうなっておりません。特に重要な援助がお二人の日本人のトラスティから来ています。そして、このお二人のトラスティは、いかにしてエネルギーをこの二人に結集し、歳入をもたらすことができるかに努力してくださっています。

第二番目の質問は、韓国の友人たちの最近の活動についてです。宗教コミュニティのパートナーシップです。日本人の皆さまのように、韓国もレリジョンズ・フォー・ピースの国内委員会を持

ち、韓国政府からの財政援助を受けることに成功しています。ただし、政府はいくつかの条件を出しています。その一つが、政府からの財政援助の資金は、韓国以外の場所で国際的な活動に使わねばならないということです。これによって、このレリジョンズ・フォー・ピースの家族の中で信頼と協力関係をつくっているわけです。

九人の韓国委員会のメンバーがニューヨークに來まして、まず最初にレリジョンズ・フォー・ピース内部におけるパートナーシップの原則について、非常に率直な対話を行いました。これは非常に有益でした。韓国の兄弟姉妹は現在、レリジョンズ・フォー・ピース・インターナショナルに対し韓国政府の補助金も含めて、資金の確保等、完全に支援する決意を表明してくれました。

このスキルフルなパートナーシップはヨーロッパにも存在しています。ヨーロッパ地域は、資金を確保し、「国際」に貢献してくれています。ノルウェーからの資金は、ノルウェーの内部ではなく

て、紛争解決などの目的のために使うことが許されています。このように、レリジョンズ・フォー・ピースの世界の組織の間で信頼が構築されています。

徳増公明 WCRP日本委員会評議員

私も二つ質問します。一つは、先ほど、イスラエル・パレスチナの信仰を持つ青年たちの緊急会議が行われたという話がありましたが、会議ではどのようなことが話されたのかをお聞きたいと思います。

それから二点目は、今、世界的に金融危機や紛争があり、非常に暗いニュースが多いのですが、その原因の一つはアメリカにあると思います。今度、新しいオバマ政権が誕生し、世界中から期待されています。特に、オバマ大統領は平和的な解決、つまり武力を使わず対話でやっていきたいと述べられています。それは非常に、私たちにとつ

てもうれしいことですし、もしこれが実現できれば、非常に大きなことで、解決につながるのではないかと思います。

とはいっても、アメリカにもいろいろと事情があるわけですから、そんなに簡単に変われるか、難しい問題があるのではないかと懸念もあります。その点について、ベンドレイ事務総長は個人的にどう思われているでしょうか。また、アメリカ人はどう思っているのかをお聞きたいと思っています。

ベンドレイ事務総長

まず、ちよつと背景的なコメントをさせていただきます。まず、イスラエルとパレスチナの青年たちの集い、二番目にアメリカの問題、オバマ大統領の話ですが、その後で杉野さんに追加のコメントをしていただきたいと思います。というのは、イスラエルとパレスチナの青年たちの集会は、杉

野さんの創造性ある指導力のもとで行われたからです。

お答えする前に、まず最初に簡単なコメントをさせていただきます。なぜ私が心の深いところで大江健三郎氏の言葉に動かされたかということです。彼の忍耐心、これは本当に深い愛に基づいていたと思います。宗教者としてのレリジョンズ・フォー・ピースの活動は、この父と母の、息子に向けた愛のような活動だということです。つまり、宗教指導者が直接的に意思疎通を続けていくことが大事であって、パレスチナの指導者たちとも、エルサレムとも、またイスラエルの指導者たちとも、さらにこの地域全体に対して、私たちは意思疎通を失ったことはありません。

この緊急会議にみんなに集まってもらう。それは、レリジョンズ・フォー・ピースに対して信頼の度合いが高く寄せられているからです。だから正直に語ることができる。つまり、通常だと、私たちが直接会うのは危険です。非常に激しい争い

があるわけですから、自分たちの市民から誤解される可能性は実に高い。そういった意味で非常に危険なんです。レリジョンズ・フォー・ピースが紛争地帯における対立するグループの宗教指導者たちを支援する、仲介するということは、その意味においてとても大事な仕事であるわけです。

この集会では、同心円のような形で、パレスチナ人とイスラエル人、この場合にはパレスチナの人たちがその中に、イスラエルの人たちと青年たちが集まって、その周りにいくつもの輪ができて、紛争地域であるガザの人たちに関わっているパレスチナとイスラエルの人たちの考えや議論、そして対話を見て、考え、支援していこうとしたわけです。

二番目のご質問は金融危機についてです。これは本当に、まさにスキャンダルというか、腐敗の極みですね。これは、店の中に警官が立っている、いわば陰の銀行制度があって、いわゆる銀行の担保をベースにした金融のチャンスの得られない、

そういった人たちがお金を借りられるようにしていく。ですから、基本的にこの金融危機が起こった背景にはそういったまやかしがあるわけです。本来はお金が借りられない人がお金を借りられる、そういうまやかしです。

しかし、一方、貧困が存在している。経済不況、経済危機が来ると、他の誰よりもこうした貧しい人たちが、家を失い、仕事を失うという、最も厳しい影響を受けるわけです。ですから、これは、最も高いレベルの倫理的な問題であり、アメリカが起こした問題です。

ですから、世界のすべての人が、これを責める必要があります。そして、そのための唯一の方法は、こういった金融機関に対しては国際的な形の規制が必要です。しかし、私たちは現在、そういったものを持っていない。だから、世界コミュニティの中で、これに対処していく有効な機関をつくる必要があるわけです。

私はいつも注意深い態度をとろうとしています。

つまり、賛成、反対だと簡単に言わないようにしています。私はアメリカ人ですが、アメリカを代表しているわけではありません。レリジョンズ・フォー・ピースの事務総長にすぎません。私の仕事は、皆さんと一緒に私たちの共通の使命を果たしていくための一つの仕事です。私は一人の人間として、あるいは皆さんの友人として話をさせていただきます。

大統領選の前のことです。リック・ウォレンという有名なカリフォルニアの牧師で、彼は福音派の説教者である人ですが、彼は大統領候補二人を招き、質問したのです。同じ部屋でいくつも、いくつも質問しました。オバマ氏、マケイン氏にわかりばんこに質問して、質問が終わると、別の部屋に退出するという形をとりました。

オバマ氏に対してこう言いました。「あなたは悪を信じますか?」。これは、こういった福音派の説教者が非常によく使う言葉です。オバマ氏は、「私は信じます」と言いました。そして、彼はこ

う言ったんです。「すべての人の心の中に悪が住んでいる、だから、私たちはそれに向かって行かねばならない。悪がどこか向こうにいるのではない。悪と自分たちを隔離することはできない。悪は私たちの中に住んでいる。一生住み続けていくだから、それに対して立ち向かい、勝っていかなければならない」と言ったんです。

マケイン氏も政治家ですから、「私は悪を信じます」と言いました。そして彼は、「悪を叩き潰さなくてはなりません。オサマ・ビン・ラーデインは、地獄まで追っかけて行って、叩きのめしてやる」と言ったんです。これはいわば異端です。そこには宗教的な誤解があるんですね。つまり、悪をどこかに追いやってしまえば善だけが残るという考えです。非常に危険な誤った解釈であって、宗教のハイジャックです、こういった考え方を、アメリカはとったのです。これは非常に偏狭な考え方で、分断をもたらすものでしかない、私は心からそう思っております。私たちは、政治的な

意味で勝ち組だけが非常に強い影響力をもたらすということが起きないようにしてはいけません。

ウィンストン・チャーチルはかつて言いました。「正しいことをやる、そのためにみんなですべてのことをやった、やったがうまくいかない。そうした時には、アメリカ人に頼るのがいい」というわけです。

私たちは政党ではありません。私たちはレリジヨイズ・フォー・ピースとの関係においてホワイトハウスとは常に、宗教者としてある距離を持たねばなりません。私たちとしても、よい政治家が生まれることはよいことです。もちろん、批判する権利はありますが。だから、レリジヨイズ・フォー・ピースの仕事において、私はオバマ氏を歓迎したいと思います。過去八年間、ワシントンでは人民の支持ゼロの大統領がホワイトハウスの住民でしたので。それでは杉野さんをお願いいたします。

パリで開催されたパレスチナとイスラエルの青年の会合についてお答えいたします。先ほどベン・ドレイ事務総長からもお話がありましたように、宗教指導者レベルでは、パレスチナのミッシェル・サバ、カトリックの総主教さん、この方には何万、何十万という信者がいらつしやいます。彼にとつては、イスラエルの代表と顔を合わせる、あるいは握手をするということは、裏切り者ということになる、ご自身の信者の方々からそういうふうに見られるわけです。それと同じような現象が青年のレベルでもあるわけです。現在の厳しい、困難な状況の中で、パレスチナの青年がイスラエルの青年と会うというのは、自分たちの仲間から裏切り者というレッテルを貼られる危険性があるのであります。そんな中で、今回の会合はこうした極めて危険な状況の中で開かれました。

また、パリには約六〇〇万のイスラム教徒がいます。ユダヤ教徒が約七〇万。イスラム教徒、ユダヤ教徒双方ともヨーロッパ最大です。そういう状況の中で毎日デモが起こり、ユダヤ教のシナゴーグが攻撃され、地方イスラム教の信仰を持つムスリムは暴力を受けるといったことが頻発しています。そういう中で、この会合がパリで開かれました。ですから、フランスのメディアも非常に注目して、私たちの会合も報道してくださいました。

参加者についてですが、イスラエル側から、ユダヤ教、エルサレムからの参加者が四名。他方、パレスチナ側、これもエルサレムからですが、イスラム教徒が二名、キリスト教徒が二名、バランスを考えて、パレスチナ側四名、イスラエル側四名、合計八名で会合を開催しました。

会合の内容は三つ大きな項目があります。まず第一に、お互いがそれぞれ考えていること、そして今の紛争に対してのいろんな苦しみ、それを吐露しようじゃないか、正直に、オープンに話をし

よう。それがまず第一のアジェンダでした。

第二に、この対話のグループで何か共通の課題、あるいは共通の関心事を共同声明として出せれば出したい。

三番目に、このイスラエル、パレスチナ、エルサレムでもこういう対話の機会は非常に限られています。統計によると、イスラエル側、パレスチナ側で、何らかの形で双方とも、対話の経験を持っている人は一パーセントに満たないということです。ですから、パレスチナ側からすればイスラエルのことを知らない、イスラエル人とも話をしたことがない、そういう現象があるわけです。

そうした中で、このグループは、実はWCRPのイスラエル委員会の主導でプロジェクトをずつと行ってきました。そして、エルサレムにいる大學生を中心に、週に一回ぐらい会合を持って対話が続けてきました。そして、ガザの戦争が始まってからも、非常に厳しい状況ではありましたが、エルサレムで会合を継続してきました。そうした

グループの代表と、WCRPのネットワークの中で何か別のプロジェクトにかかわっている方も呼び出したわけです。

そして、三番目の議題として、こうしたエルサレムを中心にささやかに行われている青年による対話を、どのようにに西岸地区、あるいはガザ地区などに広げることができるか、対話の場をどのようにに広げるかというプロジェクトについても話し合いが行われました。

もちろん、パレスチナ側からすれば、イスラエルからの参加者はこの会合を終えて帰国すると、今回の会議の様子、特に紛争の原因がイスラエルの占領にあることを自分たちの仲間に対して言ってもらわねばならない。他方、イスラエルの青年たちの方では三年から六年、八年と兵役をしてきている、イスラエルの国家の存在を国際社会に認めてもらいたい。だがハマスは認めてないが、イスラエルの国家の承認は重要だ、ということをお互いに、イスラエル側も体を震わせながら、パレ

スチナ側は涙を浮かべながら対話をしたわけですが、

そうした中で届いたのが、日本の青年の皆さんからのメッセージでした。約一六〇〇の平和へのメッセージが届けられて、それが青年部会の松本幹事長から直接皆さんに送られました。そして、一月二〇日、全世界でグローバル・ユース・ネットワークに属する青年たちが同時に祈りと行動を起こそうということで、全世界でこの日に合わせて行動がとられました。そして、アフリカの皆さんの声明文も寄せられ、また、ヨーロッパ委員会の青年ネットワークの皆さんのメッセージも寄せられました。

そうした形で、パレスチナ、イスラエルの青年たちにとってはいろいろ厳しい、困難な対話でしたが、こうした国際的なサポート、連帯の気持ちを通じて、最後まで彼らは対話する勇気を忘れずに会議を終わりましたが、共同声明を出すまでには至りませんでした。しかし、彼らはお互いの意見の違いは認めるけれども、ここで何を議論

し、何を誓い合ったかと記録に残そうじゃないかということ、コミュニケーションを発表して会議を終わりました。

彼らはパリを去ったあとも、実は、次の週にエルサレムでまた会合を持って、こうした活動を続けていこう、そしてパリではできなかった声明文をもう一度考えてみようということ、西岸地区、ガザ地区を含めて、またエルサレムのグループをいかに輪を広げていくかというプロジェクトの企画・立案もこれからしていこうということで、今、頑張っていきたいと思います。

眞田芳憲

WCRP日本委員会平和研究所所長

二つ質問をさせていただきます。一つは「共有される安全保障」(シェアード・セキュリティ)についてです。国連は従来、ヒューマン・セキュリティということを言ってきました。ペンドレイ先生が京都會議で提案されました、その「シェアード・セキュリティ」(シェアード・セキュリティ)についてです。国連は従来、ヒューマン・セキュリティということを言ってきました。ペンドレイ先

ド・セキュリティ」と、国連での「人間の安全保障」(ヒューマン・セキュリティ)との違いは何か。違いがあるとすれば、どういうところにあるのか。ベンドレイ先生が考える具体的なコンセプトを伺いたいと思います。

先生の京都会議での提案は、それがまた北海道・札幌での提言書にも反映されているわけですが、このコンセプトは国際委員会などにおいてどこまで共有化されているかということもあります。昨年、マニラでACRPがありました。私は、ACRPの場においては必ずしもまだ共有化されておらず、依然として国連のヒューマン・セキュリティの考えに立っているかなという印象を強く持ちました。そういう意味で、この質問をさせていただきます。

もう一点、具体的な話ですが、今、私の聞くところによりますと、アメリカの対イラク戦争で、アメリカ軍の軍事行動に約五〇の民間の軍事企業が関わっていて、アメリカ軍の軍事活動の肩代わ

りをしているということです。その肩代わりは民間企業との請負契約の形で行われている。イラク戦争は国家レベルではなくて、民間レベルでどう展開されているのか。こうした事実について、先ほど、ベンドレイ先生は一人のアメリカ人としてのお立場からというお話もありましたが、そのお立場でも結構ですので、宗教者としてはどう考えておられるか、お教えいただければありがたいと思います。

ベンドレイ事務総長

内容の非常に深い、しかもこれからの私たちの使命にかかわる、素晴らしいご質問をいただき、ありがとうございます。

まず最初に申し上げたいのは、後ろに一步、質問から下がって、そして私たちみんなで一緒に考えてみたいと思います。一つひとつ、私たちにはそれぞれが属している宗教があります。それぞれ

の宗教には、一体何が悪いのか、どこで間違っているのか、これはカルマのせいなのか、罪のせいなのか、あるいは汚れ、穢れによるものなのか、一体何が間違っているのか、何が悪いのか、という、それぞれの宗教の持つ言葉があります。そしてそこから一つの救いという考えが出てきます。どうすれば救いがあるのか、どうすれば善というものを経験に立ち帰ることができるのか。

ですから、宗教コミュニティは長い歴史を持ち、素晴らしい言葉を持って、人の抱える苦しみや悩みを、特に病理学的なそういった体験について語っております。そして一方においては、もともと、このような形が人間の理想であるということとも語っているわけです。

ですから、宗教の言葉と世俗の言葉と両方がそこでは語られています。レリジョンズ・フォー・ピースが一生懸命努力しているのは、宗教がイスラム教であれ、仏教であれ、神道であれ、何の宗教であれ、山彦のような響きを持って、平和の、

前向きな、良い積極的な響きをもって、大勢の人に受け入れられるような言葉を使わなければならない。私たちはお互いの存在の間に良い関係性をつくっていかうと考えているわけです。そういう意味の言葉の使い方をしなければならぬ。

だから、私たちは、宗教コミュニティとしては、何か新しい言葉を発見して、その言葉が耳に入りやすい、しかもこれは政治家が聞いても入りやすい、そして響きが返ってくる、つまり深い宗教の意味を持つ言葉、それについてそれぞれの解釈が違ってても、救いに結びついている、そういった表現を用いたい。(we) “Shared Security (共有される安全保障)” ということを言っているわけです。

深い意味で、私たちは互いに結びついています。これは単に、現実的な意味ではなくて、宗教的な意味で、皆さんの幸福は私の幸福、皆さんの苦しみは私の苦しみということ、これ以外のことはもうあり得ない。純粹な、宗教的な平和というもの

は、こうでなければ達成できないんです。つまり、地球の向こう側にいる人たちと共にあることができないければ、宗教的な結びつきが得られないならば、平和はあり得ないのです。

その意味で、「共有される安全保障」というのは、まだイスラーム、あるいは仏教、神道のコミュニティーで十分ではないかもしれませんが、少なくとも、おおまかな言い方をすれば、互いに相手を思いやって、互いに大切に合うということを表現する言葉ではないかと考えています。

ですから、宗教という観点からすれば、このような考え方をどのように探し、つくっていくかということになります。「国の安全保障」となると、「軍事の安全保障」となり、それから「経済的な安全保障」という話になってきます。人間の安全保障 (human security) と言ったときには、もつとはるかに広いですね。これは素晴らしいことだと思えます。通常の、在来型の安全保障というのは、人間の全的存在としての人間の安全保障とい

うことになりましたが、しかし、これは「相互完全性」として私たち宗教者が考えるような、「すべてのものが一つである、そして相互に分かちがたく結びついている」ということを表しているわけではありません。

ですから、レリジヨンス・フォー・ピースにおいては、私たちは人間が共通して持っているさまざまな側面をすべて共有しているんですね。国連の考え方は、私たちとしては完全にOKなんです。それ自体はまったくOKなんです。互いが貢献し合っている、そのことによって文明の連帯も可能になるものと思います。

トルコとスペインのレースの例がありますが、国連の事務総長は「レリジヨンス・フォー・ピースが「シェアード・セキュリティ」に関する大規模な会議を開催し、国連の討議を深く検討し、解析し、理解してくれた。だから、国連関連の非宗教サイドの学者からも、「シェアード・セキュリティ」の考え方を受け入れるという態度が表明さ

れている」と言ってくれました。

次の質問についてです。軍勢力というものが非常に重荷になりますね、人間にとって。特にアメリカの場合、アメリカの強大な軍勢力は、資源、エネルギー、人間の持っているものを、その軍勢力に非常に偏った形で使っています。しかも、民間企業が参加すること、ますます軍の民営化が起こっています。

自分たちの息子や娘が徴兵で戦争に行くということは、大勢の人は受け入れられないでしょう。アメリカ人の家族は、赤紙がポツと来て、突然、出頭せよと、そしてイラクに行つて戦争せよと。こんなことがベトナム戦争の時に起きました。アメリカ国民は、ベトナム戦争の後で、そういうことは、もう嫌だと言いました。アメリカの大衆は、基本的に「ベトナム戦争を終結せよ」と要求しました。今日、アメリカのテレビを見ると、兵士たちの死体を入れた棺の映像は映りません。写真もない。テレビも映さないんですよ。全部検閲で省かれて

しまっている。メディアを誤って使っているのです。メディアを、イラク・バグダッドを占領するために利用している。アメリカのメディアは本当に深刻な失敗を犯したと思います。

ですから、アメリカの国民全体を考えるなら、アメリカ国民の大きな支持を受けたことがオバマ新大統領の本当に強いところです。ロビイストとか力のある人たちに訴えたのではなく、本当に大衆、一般の人たちに話しかけて、アメリカの再生のためにこういった政策を実行していくと訴えかけていったこと、これが大きな力を生んでいったわけです。

私の人生において初めて、私は若い人たちが公共の奉仕ということに熱狂的な関心を示した現状を見ました。心を動かされるものでした。アメリカは大国です。これは私の国だから言うのではありません。しかし、マイナスの方向に行くなら私は心が痛みます。アメリカの外にいる人たちにとっても同様でしょう。

ご質問があまりにも深いので、お答えが十分にできません。私が申し上げられますのは、まとめとしてになりますが、世界を私たちのお隣りのように考えるという、恵まれた一群の人間でありたい。遠くの間所であつても、私たちのまきにお隣りの町であるかのように考えられる。ここも自分の家だ、あそこも自分の家だと考えられる。私たちは、人類家族として、グローバルな心を持つていくという意味で変換点にあると思います。時には、若い人たちは、宗教組織はもうたくさんだ、もういいと言うかもしれません。しかし、そうではなくて、深い意味で人間の霊性、人間の精神性に根ざした宗教的言葉、本当に互いに他者を思いやる言葉を私たちが持ち続け、語り続けるならば、私たちはきつと貢献を続けることができると思います。ありがとうございます。

〔平成二十一年一月三〇日、WCRP日本委員会は、立正佼成会大聖ホールにおいて、訪日中のWCRP国際委員会ウイリアム・ベンドレイ事務総長をお招きし、「WCRPについて」の学習会を行った。この学習会で同時通訳されたベンドレイ事務総長の講演は、直ちにテープ起こしがなされ、その原稿は編集委員会、とりわけ平和研究所の眞田芳憲所長の責任において整理された。そして整理された原稿の推敲、および講演で使用されたスライドの選択の過程で省略、削除等が行われたことを、ここに特に付記し、関係各位の寛大なご理解をいただきたいと思う。〕

「共有される安全保障」(Shared Security)の観念について



眞田芳憲

中央大学名誉教授

一はじめに

二〇〇六年八月二六日～二九日、第八回世界宗教者平和会議(WCRP)世界大会が、WCRP発祥の地、京都で開催されました。この大会には、世界のすべての主要な宗教伝統と諸宗教を代表とする、一〇〇ヶ国以上から八〇〇名を超える宗教指導者が参集し、「あらゆる暴力をのり超え、共にすべてのいのちを守るために」を主題として、今日世界的に繰り広げられている暴力——武力紛争、大量殺戮、テロ、貧困、飢餓、疾病、人身売

買、環境破壊その他各種各様の暴力——の現実を確認し、これらの暴力に立ち向かい、解決するための道を語り合い、具体的なヴィジョンを提示し、その具体的実践のための行動を誓い合いました。

本大会の主題「あらゆる暴力をのり超え、共にすべてのいのちを守るために」と邦訳した英語の原名称は、「Confronting Violence and Advancing Shared Security」です。この主題名称の「Shared Security」(共有される安全保障)は、二〇〇六年

の京都大会の大会宣言で初めて用いられた言葉です。過去の大会宣言では、後に少し詳細に検討したいと思いますが、「Common Security」（共通の安全保障）という用語が用いられておりました。

今日のご報告では、次の二点、すなわち第一に、WCRP世界大会の歴史の中で初めて「Shared Security」という言葉が用いられた、いや用いなければならなかった意味は何か。第二に、WCRP日本委員会が「Shared Security」の邦訳として、「共有される安全保障」という訳語を用いずに「共にすべてのいのちを守るために」という訳語を採用した理由は何か、この二点を中心にお話をさせていただきます。

二「Common Security」（共通の安全保障） から「Shared Security」（共有される 安全保障）へ

言語上厳格な意味で「Common Security」という

言葉は用いられていないけれども、それに類似した言葉と観念が用いられたのは、一九九四年一月三日～九日、バチカンとイタリアのリバ・デ・ガルダで開催されたイタリア大会（テーマ「世界の傷を癒す——平和をめざす宗教」）での「リバ・デ・ガルダ宣言」においてでした。宣言文としては、この宣言はかなり長文になっていますが、その中に次のような一節があります。

傷つき破れた世界の中にあつて、傷を癒し、平和と安全を確立するという仕事は、国連その他の国際団体に対して、手に余るような新たな挑戦的課題を突き付けずにはおかぬ。我々はこれら諸機関の働きを支援し、国連に対する世界宗教者平和会議の献身を改めて誓うものである。万人の生命の大切さを認める「人間的安全保障」は、人々の連帯という観念に根ざすものである。それはまた我々の相互依存性と、経済的安全保障、食糧の安全保障、健康の安全保障、環境の安全保障、個人

的安全保障、政治的安全保障等の広範な必要性を認めるものである。人間的安全保障の課題に答えることこそ、平和の樹立にとって不可欠である。

いかに現れている「人間的安全保障」(Human Security)は、一九九〇年以来、冷戦後に取り組むべき様々なテーマを扱ってきた国連の『人間開発報告』が、一九九四年に発表した、当時全く新しい概念でした。そして、この用語が「共通の安全保障」(Common Security)を含意しているものであることは、次の一節からも窺えると思います。

人類は、大きな一族である。我々は、人間的共同体験および共有する地球という住みから生ずる基本的な霊的諸価値を有している。にもかかわらず、我々は、個人として集団として、我々の宗教的伝統が与えてくれた、生きる力の源泉としての、万物を調和させる霊的諸価値との接触を絶ててしまった。我々は、孤立した断片と化し、我々

の隣人や他のグループに起こることに、余りにも無関心となつてしまった。

それゆえに、物質的な貧富、老若、学歴の有無を問わず、人間家族の全員が、自分たちの社会の価値あるものを掘り起こし、これを共有するという過程に参加することを奨励する。我々が望んでやまないのは、各々の社会が、自らがもつ諸価値に目覚めてもう一度そこから靈感を引き出すこと、また他の社会の伝統的諸価値を共有することによって、豊かにされること、そしてまた、我々の基本的な倫理原則の共通の幅を広げるように努めることなどである。

我々の価値基準というものは、我々の異なる霊的伝統や様々な文化的諸関係に固く根ざすものであるとはいえ、しかし我々は、他の人間のみならず、他の生命体とも相互依存の関係にある。こうした相互依存性は、他への思いやり、命に対する尊敬、慈悲といった共通の諸価値として表現される。

この一節に見られる「共通倫理」(Common Ethic)

は、ドイツの神学者で、「リバ・デ・ガルダ宣言」の起草に参画したハンス・キュング (Hans Küng) の思想が色濃く反映しているものと言えると思います。

こうした思想的展開の中で、明確に「Common Security」という言葉が用いられたのは、一九九九年一月二五日(二九日)、ヨルダンのアンマンで開催された第七回世界大会で採択された「アンマン宣言」においてでした。この大会のテーマが「共生のための地球的行動——新たな千年紀における宗教の役割」であったこともあって、参加者は、「共生を追求し、地球的平和文化の樹立に向かつての献身」を誓い合ったのですが、この宣言では「共通の人間性」「共通の安全保障」「共通の相互依存」「共通の未来」「共生」がその主要な柱となっています。

ここに明言されるにいたった「共通の安全保障」(Common Security) についてアンマン宣言は次

のように謳っています。

WCRPは、人類とあらゆる生命体を守る共通の安全を達成するには、安全保障というものの包括的理解と、包括的行動態勢が必要であると主張する。一方では、軍国主義および宇宙空間の開発をも含むあらゆるかたちの軍事化が排除されなければならない。その一環としてWCRPは、生物、化学、核を含む大量破壊兵器の廃絶と、さらに、暴力紛争の状況下にあるところで個人どうしが殺し合うために用いられる通常兵器の排除を呼びかけるものである。こうした努力と並行して、紛争解決の非暴力的諸方策の開発がなされなければならない。さらに、軍事施設や兵器に対する過度の支出から生じる、社会的優先順位の不当な歪曲に終止符が打たなければならない。平和は単に戦争のない状態に止まるものでないと同じように、安全保障は、軍備の廃絶に止まるものではない。

他方で、正義の秩序と配慮ある統治を保持する

三「京都宣言」における

“Shared Security”の観念

ための制度的諸手段が開発され、共通の安全保障に必要な社会的、経済的、環境的安全保障の相互関連性を盛り込まなくてはならない。これらの全てが相まって、主体的な共通の人間的安全保障が出来上がる。不安と恐怖は、従来、紛争や、軍備と戦争手段への依存などの原因をなすものとされてきた。恐怖からの自由と、欠乏からの自由は結び合っている。誰かの自由が、他者の不安を作り出すことによって達成されるとしても、それは決して長続きしない。正当な安全感は、信頼と、弱点をあえて共有することなしには生じない。

このように展開されてきた「共通の安全保障」(Common Security) という思想は、二〇〇六年の「京都宣言」において「共有される安全保障」(Shared Security) へと発展していくことになりました。大会テーマ“Confronting Violence and Advancing Shared Security”が如実にこの発展を示してくれています。

京都宣言では、“Shared Security”についての明確な概念規定は行われていません。従って、“Shared Security”とはそもそも何を意味するのか、その用語上の概念はこの宣言からは窺い知ることができません。確かに、この用語の概念規定による意味の明確化は期待できませんが、しかしその含意するところは宣言文から看取できると思います。

我々は現実的な理由でも協力を迫られている。どのような集団でも暴力とその結果を完全に免れることはできないからである。戦争、貧困、病気、環境破壊は、直接間接的に我々すべてに影響を及ぼす。いかなる個人や共同体であれ、他者が苦しみの中にある時自分たちは安全だと思い込むなら、自己欺瞞にはかならない。他者が基本的ニーズを

満たせず、弱者の立場におかれているなら、どのように高い防御壁を設けようとも我々はその影響を避けることはできない。他のいかなる国であれ脅威に晒されるなら、どの国も安全ではありえない。最も弱い立場にある人より我々が安全であることはない。

(1) ここで意味するものは、自己の安全と他者の安全とは相互依存の関係にあるということでありましょう。人であれ国家であれ、自己が安全であるためには、他者が安全を共有していなければならない。他者が暴力の中で苦しんでいる時、そこには自己の安全も脅威にさらされることになるということでしょう。イスラエル・パレスチナ問題、イラク問題、アフガニスタン問題、その他各地域で頻発しているテロ事件等を見ると、この思いをますます強くしています。

(2) 次に、いわゆる「安全保障」(Security)という概念の再構築です。この宣言の言葉を見てみ

ましょう。

安全保障の既存概念では、多様な形態の暴力に適切に対応できない。国家による安全保障は平和を必ずしも保障しない。現実には、暴力を促進し不安定な世界を作り出しかねない。武力紛争は、国家間、国内、非国家集団間に発生する。人間の安全保障の概念は、人権と人間のニーズの視点から安全保障を捉え、人類家族の連帯を認識させる。しかし、この定義による人間の安全保障の概念は、人間のニーズを誰の責任において、どのように保障するべきかの問題に適切に対処していない。

熟慮された「共にすべてのいのちを守るために」(筆者注Ⅱ「共有される安全保障」、以下同じ。)という概念は、安全保障のニーズと充足の方法、必要な機関、手段、それらの関係について明確に定義している。「共にすべてのいのちを守るために」の概念が、共通の安全保障のニーズを満たすため、すべての人々の連帯責任を強調するのは重要なこ

とである。

「安全保障」(Security) という用語は、国際法上、外部からの攻撃や侵略に対して武力その他の力を行使して国家の安全を維持することといった意味を持つものと理解されています。もちろん、近時、国連の様々な努力によりこの解釈は修正を迫られています、それにもかかわらず国際紛争の冷厳な現実はこの古典的解釈の呪縛から逃れることを許しておりません。

しかし私たちの京都宣言では、国家の安全を「人間の安全」へと発展させ、人々の「安全保障」は国家の枠を超克しない限り真の意味での人々の安全はあり得ないという認識に立っています。この点、先に述べた国連の『人間開発報告』の「人間的安全保障」(human security)を踏襲しているものと言えましょう。

(3) さらに、この宣言は、人間的安全保障の概念は「人権と人間のニーズの視点から安全保障を

捉え、人類家族の連帯を認識させる」と説き、「人々の連帯責任の強調」の重要性を訴えております。

「共にいのちを守るために」の実現は、社会のすべての部門に属する人間が人類共通の「脆さ」を深く認識し、連帯責任として対応する必要がある。「共にすべてのいのちを守る」安全保障を効果的に実現しようと望むなら、社会を構成するすべての部門が暴力に立ち向かう必要性を認識しつつ、複数の利害関係者が連携して運動を推進しなければならぬ。そのためには参加型の民主的統治態勢が必要となる。政府、国際機関、市民社会、宗教共同体は、それぞれ「共にすべてのいのちを守る」安全保障を推進する必要がある。効果的に「共にすべてのいのちを守る」ためには、地図上の境界や、国籍、民族、宗教の違いをのり超えなければならぬ。そのために、我々は人間としての責務と説明責任を果たし、最善の能力を発揮することを求められている。

さらにまた、次のように訴えています。

「共にいのちを守る」考えは、宗教共同体と指導者が、宗教を暴力目的に使用するのを防ぐ取り組みを支援することを意味し、政府レベルの協働体制と市民社会のすべての構成主体と宗教共同体が協働する体制を作る支援をも意味する。「共にすべてのいのちを守る」ことに専心するなら、WCRPのグローバル・ネットワークなどの諸宗教ネットワークが紛争を変容させ、平和を構築し、正義のために戦い、持続可能な開発を進めることが可能になる。

四 京都大会の大会テーマの決定をめぐる日本委員会の対応

それでは、第八回WCRP世界大会のテーマの中の“Shared Security”を「共有される安全保障

障」と訳さずに、「共にすべてのいのちを守るために」と訳した理由は何であったのでしょうか。“Shared Security”をいのような訳語を採用したところに、日本委員会の「共有される安全保障」についての考え方がすでに反映されていたのです。平成一六年七月、京都で開かれた国際執行委員会で第八回世界大会を京都で開催することが決定されますと、開催国である日本委員会は大会準備企画委員会を設置しました。そして、その企画委員会では、大会テーマ、大会規模、大会プログラム・日程、大会予算、受入委員会等について討議を重ねることになります。

大会テーマの決定にいたるまでには、国際事務局の提案をめぐって幾度か日本側からの対案の提示等の交渉が行われ、最終的には“Religions for Peace : Confronting Violence and Advancing Shared Security”が決定されることになりました。そして、日本語訳については国際執行委員会から「大会テーマの日本語訳には日本委員会側で日本に

ふさわしい訳を付けてよい」との了解を得たのであります。

日本語訳の決定については、当然に大会テーマについての検討を行ってきた企画委員会での意見が斟酌されることになります。国際事務局から提案された“Confronting Violence to strengthen Shared Security”について討議を行った第二回企画委員会（平成一七年二月二三日）の討議の結論は、議事録には次のように記載されています。

諸宗教者はテロによる暴力、また貧富の格差、環境破壊等の構造的暴力が横行するこの厳しい現実を見据え、このような人間を取り巻く環境としての外なる暴力からの安全に併せ、また人間の内なる暴力と安心の両面の課題がバランスよく留意されるべきである。

宗教者による取り組みが結集され、その連帯した行動の結果として暴力の現実を「乗り越え」るために、人間のいのち、人間の尊厳に根ざした新

しい価値観、文化の創造に取組むことを世界大会の趣旨のひとつとする。

さらに、国際事務局から新たに提案された“Religions for Peace: Confronting Violence and Advancing Shared Security”について審議した第三回企画委員会（平成一七年四月一九日）では、特に“violence”と“conflict”、そして“security”に論議が集中しました。そして、結果的に、国際事務局の新提案は、二月二三日の日本委員会の議論と対案を十分に考慮し、尊重したものであるとの認識を共有するにいたしました。

この会議では、各委員から日本および東洋の宗教的伝統と精神性に基礎を据えた非常に重要、かつ極めて啓発的な意見が展開されました。そのうちの幾つかを紹介しておきたいと思います。

“human”という概念は、近代文明の破壊を導いた人間中心主義を想起させるものであるから、「自然のこころ」を尊ぶ「日本のこころ」「東洋の

「こころ」という見地からはこれを避けるべきである。

“violence”には、自然破壊、貧困、テロなどさまざまな暴力があるわけであるから、平和を損害する暴力という一般的ニュアンスを持たせた方がよい。

“violence”に対応する“shared security”の表現も、「万人が共有する安全な社会」というニュアンスで把えると人間中心主義に堕るから、「あらゆるいのちが共有できる安全な社会を目指す」という表現を採るべきである。

“Confronting violence”の手段としては、“violence”に対し暴力で対抗するのではなく、宗教者は説得等の平和的手段で対処していかねばならない。宗教者は、厳しい暴力の現実の前には自らの力の限界を理解しなければない時があるかもしれないが、宗教者としてそれに「直面する」、そしてそれを「超越していく」「乗り越える」という姿勢を取らねばならない。

企画委員会で討議された数々のコメントや意見

を斟酌し、私も参加を求められた会議の場で、最終的に大会テーマの日本語訳として「あらゆる暴力をのり超え、共にすべてのいのちを守るために」と仮訳が決定され、日本委員会です承されたのであります。

五 G8北海道・洞爺湖サミットに対する

「共有される安全保障」の概念の提言

京都大会において、日本委員会内部では、“Shared Security”の概念的内容についての理解が深まり、統一の見解が次第に醸成されていきました。しかし、この用語についての概念を把握する上で、明確な原理原則という点での明文化がなされるまでにはいたりませんでした。この作業が実現するのは、二〇〇八年七月二―三日の「G8北海道・洞爺湖サミット」に向けて開催された「平和のために提言する世界宗教者会議」（以下、「世界宗教者会議」と略）の実行準備を担うWCRP日本委員

会・同G8諸宗教サミット準備実行委員会（以下、「準備委員会」と略）の場でした。

二〇〇八年七月二日～三日、世界宗教者平和会議（World Conference of Religions for Peace: WCRP）を中心とする宗教指導者は、札幌に集い、地球的諸課題の対応策を協議するG8主要国首脳会議に對して、宗教者からの提言を行うため、「平和のために提言する世界宗教者会議」を開催しました。これは、二〇〇六年モスクワ並びに二〇〇七年ケルンで開催された諸宗教指導者サミットを受けて開催されたものでありました。

準備委員会で決定された目的・テーマ・行動は、次の通りです。

目的

世界の宗教界の代表者である私たちは、諸宗教間の総意が大きくなっていることに感謝し、北海道・洞爺湖で開催されるG8サミットを機に、人類家族が直面している喫緊の課題につい

て話し合うために、この「平和のために提言する世界宗教者会議」北海道・洞爺湖G8サミットに向けて（仮称）を招集する。私たちは、G8各国、宗教指導者並びに全ての人類家族へ向けて提唱するために集まる。

私たちは、世界的な政策決定機構としてのG8サミットの重要性を十分認識している。宗教者として、政策や行動が人類家族すべてのためになることを確固とするために、G8各国政府やその他の政府、また他の関連機構と協力して取り組む。

私たちは、政治家として集まるのではない。しかし、本質的な共通の善を構築するために、宗教が、他と比べられない精神的伝統や倫理的遺産を有し、最古かつ最大の社会的ネットワークであることを確信する。

宗教指導者として、私たちは、安全保障の包

括的な概念、つまり相互依存性といのちの尊厳に焦点を当った「共有される安全保障 (Shared Security)」の必要性を認識する。環境、紛争、核不拡散および貧困のような諸課題は、包括的な視座で取り上げられなければならないと確信する。

テーマおよびサブテーマ

メインテーマ 共有される安全保障

(共にすべてのいのちを守るために)

サブテーマ

環境と気候変動 相互依存性の精神的・倫理的認識を促進する。

ミレニアム開発目標 人の開発のための精神的・倫理的責任を全うする。

核不拡散 核兵器やその他の兵器の廃絶のために取り組む。

紛争和解 テロリズムや宗教の誤用のもととなる原因に取り組む。

行動

1) 2008年2月、7月にG8サミット議長国である日本政府に対して、第8回世界大会で800名の宗教指導者によって採択された共有される安全保障の概念と宗教者の誓約を提唱する。

2) 「共有される安全保障」のテーマのもと、G8サミット議題の中の、環境と気候変動、ミレニアム開発目標、核不拡散、紛争和解に焦点を当てて、グローバルな諸宗教声明文を発表する。

3) 前述のテーマに関して、国際的諸宗教協力に基づく、グローバルアドボカシーキャンペーンと行動プログラムを立ち上げ、WCRPの国内、大陸レベルの諸宗教評議会、女性、青年ネットワークを通して、具体的プロジェクトを推進する。

準備委員会は、右の目的の明文化と行動指針の

策定のために、これまた幾度も会議を重ね、さらにまたベンドレイ事務総長との間で意見の調整を図りつつ、案文作成の討議の結果、提言書案を作成したのであります。ここでは、長文になります、最終案文で確定された「共有される安全保障」の部分だけ掲げておくことにいたします。

〔共有される安全保障〕

喫緊の取り組みが必要とされる各課題に言及するにあたって、この概念によって、倫理並びに宗教的な考え方の特徴を包括的に表すことが出来ると信ずる、「共有される安全保障」の概念を提示したい。我々は、新たな「政治的な安全保障」の概念を提案しているのではない。それは、宗教指導者の責務の範疇ではない。我々が提案する「共有される安全保障」の概念は、今日ある全ての課題に横たわる根本的な倫理的側面を強調するひとつの方策として、一〇〇カ国から参加した八〇〇名の宗教指導者によって

初めて提唱された。

（以下、省略）

「共有される安全保障」は、全人類の相互関連性に焦点をあて、各々の安全が、全ての人の安全と関連しており、究極的には全ての環境と関連していることを意味している。

「共有される安全保障」の概念は、以下の点も包含する。

A) 地球的視野 我々は一つの世界に生きている。今日の課題に取り組む上で、地球的視野を持つことは本質的に重要である。

B) 相互関連性 我々は全て関連し合っている。相互関連性とは、他者への脅威は、自己への脅威に繋がり、他者の安全は自己の安全へと連動していくことである。

C) いのちの尊厳 我々はすべて尊厳を尊重されることを望んでいる。すべてのいのちの尊厳が、平等に守られなければならない。

我々は、すべて、自然環境を尊重しなければならぬ。

D) 最弱者層への特別な配慮 我々は、深刻な貧困や肉体的な危険によって、特に弱者となつてゐる大勢の人たちを支援する共通の義務を有する。

E) 将来への責任 今下す決断が将来に影響する。我々は、将来の世代に対して共通の責任を有している。

F) 多様な行動主体 すべての個人や組織は、「共有される安全保障」の一部である。すべての個人や組織が、「共有される安全保障」を促進するために協力する必要がある。

このような過程を経て作成された提言書案は、起草委員会（日本側三人、国際委員会側三人）の審議、検討に付されました。ここで作成された提言書案は、全体会議に提案され、そこで出された修正意見を受けて提言書案に練り上げられ、それ

が最終日の全体会議の場において採択されるにいたりました。「共有される安全保障」の部分のみを掲げておきましょう。

共有される安全保障

「共有される安全保障」は、我々が信ずる道徳的、宗教的関心の全体的概念を表現する。

「共有される安全保障」は、すべての人々と自然環境との間の根本的相互関係に焦点を合わせることによつて、人間安全保障の概念の基礎の上に築かれる。それは、自己の幸福が他者の幸福と結びついているということ、究極的には我々すべてが共有する地球環境と深くかわつてゐることを認識する。

「共有される安全保障」は、すべてのいのちの相互依存性と尊厳性に対する包括的な尊重を内容としてゐる。それは、我々が深い相互依存

の中にあるという事実、さらにまた人類がすべて一つの世界に生きているという最も普遍的にして、最も根本的な事実に基づいている。さらにまた、「共有される安全保障」は、過去、現在そして未来が一つの連鎖で結ばれていることを認識させる。我々は、共どもに、過去の過ちを認め、現在の課題に取り組み、未来世代に対し我々が果たすべき責務があることを受け入れなければならない。

それゆえ、この概念は、個人一人ひとりの関係から、国家または国際機関に織り込まれた人々の関係まで包含するあらゆる人間関係の一切を関心対象とする。この概念は、国家主権の重要な次元を尊重しつつ、他方、国家と国家及び国民と国民との間に民主的かつ透明な協力関係が構築されることに支援を与えるものである。

従って、国際関係における一つの行為主体の

安全保障は、決して他者の損失の上に成り立つものであつてはならない。地球規模の政策決定の責任を担う国際的な行為主体は、市民社会の主要な部分を代表する宗教指導者を含め、すべての関係者の貢献のために広く門戸を開けておくべきである。

日本側準備委員会で作成された提言書案文と最終的に採択された提言書正文と比較してみますと、少なくとも「共有される安全保障」の部分については原理的精緻さや明晰さが欠けている印象は否めないと思います。

私は、当初より日本側起草委員の一人として提言書の案文作りに従事しておりました。その立場から、日本側準備委員会の見解と主張を開陳し、準備委員会案からの後退を阻止するための努力をしたのですが、結果的に提言書正文の形になったのであります。しかし、提言書正文には、準備委員会案が形の上では一応別としても、正文を熟読

すれば、質的には相当程度採り入れられていることが理解されるのではないかと思っております。

起草委員会で日本側準備委員会案が修正されるにいたったその主な理由として、次の二点が挙げられました。第一に、G8の政治指導者に対する提言書である以上、これらの政治指導者の会議の場で取り上げられるにふさわしい具体的・実際的内容を持つものでなければならぬ。G8の政治指導者に対する提言書は、いわゆる世界大会等での「大会宣言」とは異なる性質を持つものであるから、理論的・思弁的内容の文章は極力避けるべきであるということ、第二に、極めて制約された時間の中で数多くの地球的課題について討議するG8の政治指導者の事情を考えると、提言書はできるだけ簡潔で、かつ現実的な説得力を持つものでなければならぬということです。

こうした国際会議の常と言ってもいいでしょうが、起草委員会での議論の時間も非常に制約されていまして、その上提言書を日本政府に手渡す

日も時間もすでに確定されており、時間との競争の中で提言書の起草がなされたという事情もあったことも付け加えておかねばなりません。そうした意味では、国際的にいまだ理論構築されていない「共有される安全保障」という新しい概念についての日本側の提案を国際的に認知を求める場としては、条件整備等でいささか準備不足ではなかったと反省しています。

六 今後の課題

「Shared Security」は、WCRP第八回世界大会の京都宣言で謳われた新しい概念です。その理論的検討とそれに基づく理論構築は、今後私たちに残された課題でありましょう。しかし、「平和のために提言する世界宗教者会議」に向けて、日本側の準備委員会およびWCRP日本委員会が提案した「共有される安全保障」の理論的原理は、時代を先取りした、極めて先駆的意義を持つものと思っております。

ます。

その理由を二つだけ挙げておきましょう。

一つは、二〇〇八年一〇月一七～二〇日にかけて「アジアにおける平和の創造」をテーマとしてフィリピン、マニラで開催された第七回アジア宗教者平和会議でのことです。ここでの大会起草委員会では、一九九四年の国連開発計画の「人間開発報告」で発表された「人間的安全保障」(Human Security)は語られても、「共有される安全保障」(Shared Security)は論じられることはありませんでした。起草委員の一人として、私は京都大会で承認された「共有される安全保障」を説明し、この文言を宣言文の中に入れていただきました。しかし、この概念の現実にかかわる実質的な論及は十分に展開されるまでにはいたりませんでした。今回のアジア宗教者平和会議の場において、私は、この用語がまだ新しい概念のためか、国際的次元においていまだ十分に理解されていないことを実感いたしました。京都大会の京都宣言を、今

後、いかに世界に認知させていくかが私たちにとって大きな課題であることを、あらためて体験的に痛感いたしました。

いま一つは、二〇〇九年一月三〇日、たまたま来日中のWCRP国際事務総長ウィリアム・ベンドレイ氏をお招きし、「WCRPについて」の学習会が開催されました。ベンドレイ事務総長の講演後の質疑応答の場で、私は「共有される安全保障」の概念、そして「共有される安全保障」と国連の「人間的安全保障」の思想的関係についてお尋ねいたしました。

この時のベンドレイ事務総長との質疑応答の様子はWCRPのニュースレター「WCRP」(二〇〇九年三月、第三五五号)に収録されていますので、お読みの方もおられることでしょう(この時のベンドレイ事務総長の講演と質疑応答は、本誌本号に全文掲載)。私は、ベンドレイ事務総長のお答えを聴きながら、「G8北海道・洞爺湖サミット」に向けて開催された「世界宗教者会議」での日

本側の準備委員会で討議された「Shared Security」の理解との間に大きな落差を感じたのであります。

言うまでもなく、「Shared Security」は、言葉としては確かに新しいかもしれませんが、しかし、私たちの準備委員会で整理した「共有される安全保障」の五つの原理を、WCRP活動の先人たちの手になる過去の大会宣言と比較し、これを省察すること、*Shared Security* は決して新しいものではなく、過去の大会宣言の叡智の結果と言っても過言ではないのではないかとさえ、私は思っております。というのは、過去のWCRP世界大会およびアジア宗教者平和会議の大会宣言を精査するとき、私たちの五つの原理のいずれかが必ずと言ってよいほどそこに明文化されているのに気づくからであります。

いずれにいたしましても、「Shared Security」を「共有される安全保障」という訳語を採らず、「共にすべてのいのちを守る」と邦訳した日本の宗教者の叡智に、私は心から敬意を表している者の

一人であります。そして、「共有される安全保障」の概念の解明に向けた日本の宗教者の叡智を世界に向けて、いかに伝えていくか、そして世界の宗教者の共通の叡智へといかに高めていくか、これが今後、私たちに課せられた大きな使命ではなからうかと思っているとあります。

人類共通の倫理に対する宗教者の貢献



ホアン・マシア

聖トマス大学講師

はじめに

第7回ACRP大会宣言の中に「真理・正義・慈悲、および人間の超越的尊厳の原理に基づく諸宗教間の平和を求めて」という表現を用いられており、「平和の創造」のために積極的に貢献することは諸宗教の志であることが謳われています。これは、前から行われてきた会議の宣言の中にもあった志であり、それを確認したということですが、それを新たに確認するにあたって、宣言では次のように言っています。「労働の上でますます

リスクを伴う地域で平和を創造する」必要性を自覚し、この課題と取り組むことは、「諸宗教の中心的なメッセージである」。

私はこの文章を考察の出発点にしたいと思います。「平和を創造」することは、文化や宗教などの違いを超えて人類の共通の課題です。このことを考えるにあたって、二つの視点に立つて考えることができると思います。ひとつは、宗教を背景にせず、できるだけ人類共通の価値や倫理を求め

ていく立場です。もうひとつは、それぞれの宗教の立場に立つて考えるという視点です。この二つの視点をあわせることこそ大切ではないかと私は力説したいのです。

ここでまず、人類共通の倫理を求める立場からごく簡単にその基本となる主張をふまえたうえで、宗教者の側から特に重要と思われる貢献について述べたいと思います。

人類共通の倫理の座標軸

人類共通の倫理の座標軸として、次の要点でまとめてみましょう。

つまり、人間は（１）自然の中で、（２）人と共に、（３）有意義な生活を求めて生きることこそ倫理の基本です。

倫理とは「人倫の理」であり、「人間の生き方の理」ですが、それはひとことで言えば、「〜とまに生きる」というテーマで要約されると言えま

しょう。ちなみに、「自分と共に」、「他者とともに」「自然とともに」調和を保ちながら生きるということです。あるいは順序を逆にして次のように言えましょう。「自然に生かされて」いる人類は「たがいに生かし合い」、生きることこそ各個人の有意義な生き方の秘訣だということです。

とにかく、一番強調したいのは倫理のこの三つの目標です。（１）生命全体の流れの中に自然と共に調和して生きること、（２）他の人間と共に友愛関係（第二人称的關係においても、他人・第三人称的關係においても）で調和して生きること、（３）自分自身の中における心と体の調和を保つことです。

循環形式の考え方

ところで、前述した三つの要点を二つの異なった見方で捉えることができます。一つは、階段形式の考え方で、もう一つは、循環円卓形式の考え方です。円卓ですと、どこに座っても同じです。

ある環状線に例えても良いかもしれません。内回りと外回りがありますが、どこから乗っても目的地にたどり着くことができます。この階段式と循環／円卓式の考え方のどちらを使うかによって、私たちのものの見方が大分変わってきます。たとえば、階段形式の見方をした場合、上に一番目に自分を置いて、その下に他者との関係において最後に一番下に自然環境と関係をおくことがあるかもしれません。循環形式の見方なら、どちらが上や下か問題にならないのです。言い換えれば、人間が他の人間や自然と対立するのではなく、また人間が上にいて、動物や植物が下にいることにはならないでしょう。

では、前述の三点を循環形式の方法で捉え、「自然環境・諸生命の連関」の中に生かされて、「他者とともにたがいに生かし合う関係を持ち」、「生きがいを持って生きる」という三点を人類共通の倫理の基本的な軸にしたいと思います。

循環形式の考え方

以下の図を参考にしましょう。



(図1) 循環形式



(図2) 階段形式

共生と共同に対する宗教者の視点

ここまで述べた提言はどういう関心から生じたかと言えば、それは「善く生きること」と「共に生きること」とは何だろうかと問い続け、現代社会のなかで生きることと信仰者として生きることとはどのようにつながっているのだろうかという問いかけから生まれたものです。

ところが、信仰者のなかでは、信仰者であることと現代に生きることとの葛藤で悩む者もいれば、社会問題や平和構築に対して無関心でいられるので、悩まないですむ者もないわけでもないのです。後者のほうから妙な質問が投げかけられ、次のように尋ねられたことがあります。

「ご専門は生命倫理だと思っていました、最近平和の創造を扱ったりして社会倫理に変わられたのですか」。これは行政のそれぞれの機関の間に見られる「縦割りのしくみ」に似たような考えから出た質問のように思われます。

もう一例は、政治と経済などに宗教者が関わらないほうがよいと思いこんでいる方から受けた次の質問でした。「正義と平和に関わりすぎると信仰心が薄らいでしまう恐れはないでしょうか。

どうして宗教者たちは戦争反対運動や、在日外国人や有事立法などに関わって発言をしたりするのですか」と。これもまた「信仰と社会の関わり」に関する誤解から生じる質問ではないでしょうか。

私は、前述の質問が前提にしている誤解をなくしたいと思います。生命倫理のすべての問題は社会問題でもあり、人間の尊厳と人権の尊重がかかっているのです。そして信仰者の使命は、宗教的だからこそ人間的であるとも言わなければならないのです。

「命の問題」、「環境の問題」、「社会の問題」を統合的に信仰の立場から考え直し、「共生」と「共同善」の意味を宗教者の視点から見直し、各論の小道で迷ってしまわないように、その前提になっている基本的な考え方をとりあげる必要があると思

います。「木を見て、森が見えなくなる」ことを避け、各種の個別問題（たとえば、戦争、愛国心、有事立法、テロや犯罪予防対策、差別と人権侵害、犯罪と制裁など）の議論だけにこだわると、信仰者の間でも意見が二手に分かれてしまうことがあります、あちこちの教会でそのように意見が食い違ってしまうのは日常茶飯事です。このことは、私が所属しているカトリックにおいても、その他の宗教においても見られる現象です。大げさな言い方をすれば、「社会派タイプの信仰者」対「霊性派タイプの信仰者」のあいだの議論の行き詰まりであると言えます。

そこで平和構築のための「共生」と「共同」へのまなざしを宗教者が向けなければならぬのです。「共に生きること・自然と共に・他者と共に聖なるものと共に生きること」へのまなざしを据え、次のように問いかけることができます。

（イ）「一体、わたしたちはどういう社会を造りたいのでしょうか」「人と共に生きるといふこと

はいったいどういうことなのでしょうか」「共に生きること」、このことを実践するために私たちは一緒に考え、協力する志をもっているのでしょうか。

（ロ）「弱肉強食ではなく、一人残らずすべての人の尊厳が尊重されると同時に、すべての人が社会全体・人類全体の共同善に貢献するためにどうすればよいのでしょうか」。

その答えを求めて、民族や文化や宗教などの違いを越えてすべての社会成員と一緒に関わり、諸宗教の協力によって支えられたいものです。

こうした質問に対し、一般倫理（特定の宗教を背景にしない倫理）と宗教倫理の視点を合わせて考えることができますが、両者の立場から「共生」と「共同」を捉えたいのです。

「共生」はもともと生物学用語（*symbiosis*）でしたが、最近では「共に生きる」ことを指すようになりました。ただ、友達や所属団体の中で「共に生きる」だけでなく、「分け隔てなく、万人が共

に生きる」という意味を強調して用いられています。

「共同善」は、単なる「公益」(public interest)や「公共使用施設」(public goods)や「公共利益」(public benefit)や「国民総生産」(GNP)や「公共福祉」(general welfare)だけに終わるものではありません。「共同善」の概念は、「弱肉強食」を避けて、「個人の尊重および正義と平和のある社会全体への貢献を可能にする条件と人間関係」を含むものです。つまり、全体のために個人を犠牲にせず、各人が社会全体に貢献し、共同で社会生活を造り、そのために共同で話し合い、協力しあうための条件を整え、それを育てるための善い人間関係をつくるということです。

では、ここまで述べた「共生」と「共同」に関する一般倫理をふまえたうえで、宗教のほうからその考えを強める一例として、キリスト教における「生命の尊さ・人間の尊厳・平和の建設」の理念を紹介しましょう。

前述した枠組みの中でキリスト教の立場が位置

づけられ、聖書に基づいて「共生」や「共同善」の理念が強められると言えましょう。次の要点はキリスト教倫理の中核です。

(イ) 生命の尊さを肯定し、すべての命を見守る責任があります。これは環境倫理の基本です。
(ロ) 尊厳を認め、生まれ出る前から神に愛されているかけがえのない一人ひとりの人間の尊厳を認め、そのいのちを尊重する責任があります。これは生命倫理の基本です。

(ハ) 人間は皆、「神の子」であり、兄弟姉妹の共同生活をつくる使命をもっています。これは人類共通な社会倫理に基づく平和構築の基本です。

ここに一般倫理に対する宗教倫理の貢献があると思います。というのは、「自分とは違う他者」、「自分より弱い立場にいる他者」、「自分とは敵対関係にある他者」、このような他者と共に生きることは簡単ではないのです。イエスの生き方と教えからキリスト教倫理における無償の愛、排他的でない愛、ゆるしあいなどを学ぶことができます。

イエスが説いた「天の王国」は、まさに共生や共同善の建設を促すものであり、神が望む世の中の barrier free の世の中であり、自国の中でも、自国と他国の間でも「分け隔てなき」の世界を造っていく運動です。それは、バベルの塔に象徴されるような画一化の世界ではなく、「国境を越えた人類の共通な世界を造っていく」ということです。「天の王国」に関するイエスの教えは三つの点に要約されます。

(イ) 神自身の手によって「天の王国」が始まっていることに気づき、そこから希望を与えられます。

(ロ) 創造への協力者である人間は「天の王国」を共に造っていくように促され、そこから平和と正義を建設するための原動力を与えられます。

(ハ) 「天の王国」を妨げる「悪」からの解放を求め、そこから癒しと和解の実践、「懺悔」と「謝罪」の実践、そしてゆるしあいの実践を学びます。

このようにイエスが教えた「天の王国」をキーワードにしてキリスト教倫理の主な原則をとりあ

げることができます。それは先ほどあげた環境倫理、生命倫理、人類共通な社会倫理の要点とつながります。ひとことで言えば、自然と共に生きること、他者とともに生きること、すべての人、特に弱い立場にいる者と共に生きることです。

ところで、この話が綺麗事に終わってしまわないように、いつでもどこでも起こる軋轢や葛藤、対立なども見つめてみたいのです。それに対してキリスト教の伝統ではどのように対応してきたかというところ、対話と和解によって解決への道をつくることを勧めてきました。そして、非暴力の立場、対話と和解による平和の建設、慈悲を忘れない正義の促進をすすめてきました。

また、理想と現実の統合を目指してきました。聖書的な理想と現実的な社会分析および社会実践の狭間で、キリスト者たちは社会問題に関わるとき、聖書から何を導くかと言えば、それは出来合いの回答ではなく、回答を共に見出し、作っていくための「光」と「力」をくみ取るのです。

さらに、政治問題に関わることからのがれず、福音的な関わり方をするように促されています。たとえば、政教分離を守ると同時に、社会の良心として教会は人権擁護のために預言的な役割を果たす責任も負っているのです。

平和と正義について

以上、キリスト教の倫理観を述べてきましたが、神の子供であるすべての人間が平等であることを中心に置くイエスの教えは、聖書全体にわたって見出すことができます。ここでそのすべてを網羅する暇がありませんので、例として聖書に見られる平和構築の理念を表すいくつかの箇所を紹介するに留めます。

まず、人と人との間の平和だけではなく、すべての生き物との調和にあこがれるホセア預言者は次のように神に言わせています、「その日には、わたしは彼らのために、野の獣、空の鳥、土を這う

ものと契約を結ぶ。弓も剣も戦いもこの地から絶ち、彼らを安らかに憩わせる」(ホセア2・20)。

イザヤ預言者も同じく宇宙的な平和の状態を夢見しました。「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては何ももの害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように大地は主を知る知識で満たされる」(イザヤ11・6―9)。

神が望まれる世の中、神が支配する世界、神の王国というものは戦争を否定した人々のつながりとしてイザヤ預言者が見ました。「神は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」(イザヤ2・4)。

しかし、平和は戦争のない状態だけではないのです。「平和がないのに、『平和、平和』と彼らは言う」(エレミヤ6・14と8・11)。弱い立場にいる人々が助かるような正しい社会や正しい人間関係がなければ、平和とは言えないのです。理想的な王の姿を描く詩篇は、平和と正義を保証し、弱い立場にいる人々を守る者としてそのような指導者をたたえています。「王は正しく民の訴えを取り上げ、貧しい人々をさばくように：王が助けを求めて叫ぶ乏しい人を、助けるものもない貧しい人を救うように。弱い人、乏しい人を憐れみ、乏しい命を救い、不法に虐げる者から彼らの命を救うように」(詩篇72・2・12—13)。

聖書では「正義と平和」や「正義と慈悲」が切り離せないことも強調されており、正義が伴わない平和は似非の平和であり、慈悲を伴わない正義もまた似非の正義です。狭い正義感に燃えて報復したりするようなことは、聖書の平和観に合わないのです。詩篇でうたわれているように、「慈し

みとまことは出会い、正義と平和は口付けする」(詩篇85・11)。「義〔正義、誠実〕の実は、平和を実現する人たちによって、平和のうちに蒔かれる」(ヤコブの手紙3・18)。

和解とゆるしこそ宗教者の貢献

本稿で人類共通な倫理に対する宗教の貢献を考え、一般倫理の立場を強める宗教の立場を合わせようとしたが、「暴力と戦争」、「罪と罰」、「犯罪と制裁」などのような問題に直面するとき、宗教の側からの特異な貢献があるのではないかと思います。それは「暴力と悪の克服」のために必要とされる「和解」、「仲直り」、「ゆるしあい」などを支える宗教心といったところからでくるものです。それについて本稿の最後でふれ、全体の結びにしたいと思います。

まず、犯罪への対応について考えましょう。戦争まで行かなくても、暴力というのは毎日のよ

うに私たちの身近なところにあります。犯罪事件が起これと、人々はショックを受けます。小学校の残酷な殺人、通り魔事件、十二才の少年による悲惨な事件などが起これと、翌日から新聞に二つの典型的な反応がみられます。一つは、責任のなすりつけ合いです。学校のせいでしょうか、親のせいでしょうか。誰かのせいにすることができれば、心理的に安心感が得られるかのようにです。もう一つの反応は、あわてて予防対策を考え、エレベーターに防犯カメラだとか、「人間一人の命は地球の重さよりも思い」といったスローガンで命の大切さを子供たちに教え込もうとか言うのです。それらも必要かもしれませんが、何かもつと根本的なものが問われているのではないのでしょうか。

誰かが殺されたら、私自身の一部も殺され、私も被害者です。誰かが犯罪を起こしたら、その加害者どこかで似ているところをもっている私も加害者です。われわれは皆、被害者、われわれは皆、加害者ということ認めてはじめて、救いへ

の道が開かれるのではないのでしょうか。

私はテロ事件の日に次のように思いました。多くの人のいのちを奪った行為を断罪しなければなりません。そして、いのちを失った人々の冥福を祈り、その遺族に必要な力が与えられるように祈りながら、「私たちは皆、被害者である」という実感を持つと同時に、「私たちは皆、加害者でもある」という反省を心にとめておきたいと感じました。

「暴力か平和か」の選択に直面して、暴力を選んではしまう人間は、どのように救われるのでしょうか。

二〇〇一年の二月二十四日の『週刊文春』では、「十九歳監禁少女は〈袋詰め〉にされていた」ことを述べた記事のトップの見出しとして、「これでも犯人に人権があるのか」という背筋が寒くなるような言葉がつけられていました。これは、加害者なら人権がないという極端な考え方を招く小見出しです。あるいは、そこまでいなくても、「加害者ばかりでなく、被害者の人権も考えよ」とい

う理由で加害者への過剰な罰を正当化する考え方の人も出てくるでしょう。

しかし、加害者もまた被害者であることを、われわれは気がついていないでしょうか。そして、加害者の死を求める被害者もまた、加害者になるということにも気がついていないでしょうか。

聖書から学ぶように、神は人の死を望まず、悪人さえも生かそうとします（エゼキエル18・23―32）。殺人者として罰を受け、追放されるカインに対して「主は、彼に出会うものが、だれも彼を殺すことのないように、カインに一つのしるしをくださった」（創世記4・15）とされています。加害者は被害者に対してばかりでなく、自分自身に対しての加害者でもあります。それに気づき回心するように、時間と機会を与えたいのです。

イエスは十字架に付けられるとき、「父よ、彼らを許してください。彼らは自分が何をしているか、わかっていないからです」と言いました（ルカ23・34）。つまり、加害者のために祈ったのです。

被害者の遺族は加害者に対して愛情を感じたりすることはもちろん無理ですが、加害者が自分の犯した罪を認め、回心するように祈ることができないでしょうか。そうすることによって自分たちも癒されるようになるのではないのでしょうか。（「自分を迫害する者のために祈りなさい」マタイ5・44参照）。

犯罪やテロなどが起こるとき、私たちは単なる傍観者として無関係ではありえないのです。何らかの形で私たちも皆、加害者であり、自分の中に犯罪者と同じような憎しみの根をもっているかぎり、そこから解放され、癒される必要があるのです。「被害者の立場を考えよ」と言われるのも当然です。しかし、愛する者を殺された親族の思いは、犯人を憎んでもなお、癒されることなく、苦しみが増すのです。憎しみ続ける自分への疲れ、その現実から立ち直れず、事件を悔やむ自分、どうしても犯人をゆるすことのできない気持ちから解放されず、苦しみに追いかけられる自分が癒され

ないままに残るのではないでしょう。

被害者遺族が報復感情をもつのは当然であると言われます。しかし、仕返しして一時的な満足感を味わい、気がすんだつもりでも、はたしてそれで人間は本当に癒されるのでしょうか。犯人に回心の機会を与え、犯人が罪を認め、心から悔恨と謝罪をし、被害者が加害者をゆるしたとき、初めて双方とも根本的に癒されるのではないのでしょうか。

加害者に対してまさか愛情を感じることができないでしょうし、加害者にまったく謝罪の気持ちがない場合もあると指摘されています。しかし、ゆるすとは愛情を感じることではなく、犯罪者のために祈ることであり、本人が罪の自覚を持ち、回心するように祈り、そして被害者をはじめ私たちも皆、憎しみの根から解き放たれるように祈ることです。

福音書から学ぶイエスの教えは、怒りと復讐ではなく、和解と癒しです。典型的な箇所を一つ参

考にしましょう。

イエスは、ご自分が育ったふるさとの会堂で聖書を朗読したときに、イザヤの言葉を解説しました。そのときイエスは、イザヤの言葉から神の恵みを語る部分を引用し、神の怒りに関する言葉を省いています。人々は驚いて、つまり、そして怒ったのです。彼らの町は山の上にあつたので、街はずれの絶壁まで彼を連れて行き、そこから突き落とそうとしました。さいわいにイエスは、彼らの中を通り抜けて、去って行きました。

このエピソードに重要な教えが含まれています。イエスは、神の怒りではなく、恵みを伝えたのです。その教えこそ「よい知らせ」(good news)、福音なのです。それを聞いて人々は、希望と喜びを受け取ることができるのです。

山上の説教の結びに、「あなたたちの父が慈しみ深いように、あなたがたも慈しみ深い者となきなさい」という一節があります(ルカ6・36)。

わたしたちが天の父なる神から受け入れられてい

る以上、わたしたちも人を受け入れるのは当然のことでしょう。天の父のような視野の広さと、こころの広さを勧めるこの言葉は、山上の説教から出発する倫理を考えるための鍵です。山上の説教に基づいた倫理は、決して教訓の羅列ではなく、あくまでも「幸いである」という、真の幸せへの招きから始まるのです。これこそ、単なる義務中心の倫理を超えて、人間の真の幸せを追求する倫理なのです。そしてそれは、自分が無条件に神から受け入れられているという「ありがたさ」、それへの感謝から出発して、兄弟姉妹であるすべての人に対して同じようにしよう、と励ます倫理でもあります。

ルカ15章に物語られる二人の兄弟のたとえ話はよく知られています。「放蕩息子のとえ」と呼ばれる話です。人はこの話を聞くと、ごくあたりまえのことのように考えがちです。「兄はよい人間で、弟は悪い」、と考えるでしょう。あるいは、話の結末から反省させられて、「兄のほうが悪い」、

と思うかもしれません。そして自分自身を登場人物に重ね合わせて、「自分は弟に似ている」とか、「兄に似ている」とか、思ったりすることもあるでしょう。

しかし、自己卑下するときにも、自己を正当化しようとするときにも、わたしたちは錯覚に陥っていることには変わりがないのです。兄がよいとはかぎらないし、弟が悪いともかぎらないのです。親鸞の言う、「善人さえも往生する」でしょうか。つまり、弟も兄も、善玉にもなれば悪玉にもなりうるのです。裏返して見れば両面をも把っている、ということなのです。

むすび 暴力の座標軸

このように暴力からの解放と平和の構築の問題を人類共通の倫理と宗教の視点をあわせて扱うときは、決して個人的な次元だけにとどまる道徳論に終わってしまわないようにしたいと思います。

むしろ、その問題を次の四つの次元でとらえなければならぬことを強調したいのです。

(イ) 個人的な次元で、一人ひとりの心の中にある暴力と悪の問題が表されてくることに留意したいです。誰でも自分の経験からわかるように、自分で自分自身に対して暴力を行ってしまうことがあります。パウロのことは借りて言えば、「私はやりたいと思う善いことをせずに、やりたくないと思うことを行ってしまう」(ローマ7・19)というふうに表現することができます。

(ロ) インターパーソナルすなわち一対一の人間関係の次元においても、悪と暴力の問題にぶつかり、いざとなると悪人に変わる人間は、愛からエゴイズムに急に移ってしまう可能性を持っていることも我々は経験しているでしょう。

(ハ) 文化的な背景や、無意識のうちに私たちを支配しているものの見方や考え方に影響されて、思想の次元でも、私たちは暴力の問題に突き当たることがあるに違いありません。特に、いろいろ

なイデオロギーにおいて、この問題が注目されます。(二) 社会の仕組みとか、機構や制度のレベルにおいても、暴力を育てるものがあります。その暴力が、誰々のせいである、と割り切つて言えない場合が多く、政治、経済、教育の機構において暴力の問題が現れます。

以上の四つの次元で暴力の問題を捉えたうえで、現代の社会の中で、宗教が果たす二つの役割があると指摘することができます。一つは建設的な役割で、もう一つは批判的な役割です。宗教の建設的な役割とは、個人と社会に意味と希望を与え、統合的にして創造的な思考力を養い、常に変化していくための原動力をもたらすことです。さらに宗教の批判的な役割(回心へ招く預言的な役割とも呼ばれうるものです)とは、個人に対して、共同体に対して、暴力の根を告発し、考え方の片寄りやイデオロギーを批判し、片寄った価値基準の偶像を破壊し、あらゆる社会機構と制度の欺瞞を暴露することです。

この四つの次元における暴力の脅かしについて考えたうえで、和解とゆるしあいの精神を告げる宗教の課題を次のように把握することができます。

つまり、(1) 自分との和解をすること、(2) 人との和解を求めること、(3) 和解を可能にする考え方の変革を目指すこと、(4) 和解を可能にする社会の仕組みの建設に努めることです。

悪と暴力からの解放に向かって平和の道を選ぶために諸宗教が貢献できると思います。イエスの教えについて言えば、福音から悪に打ち勝つための光と力が得られるのです。

前述した四つの次元における暴力に対して、福音書にみられる四つの主なテーマを手がかりにして平和の座標軸を設定することができます。

福音書の中には、キリスト者の根本的な経験が現れています。それは、キリストによって人間に与えられた希望です。この希望の体験に基づいて、ある生き方が示されています。それは一言で言えば、希望をもつ共同体であり、人々に希望を伝え

ようとする共同体の生き方です。ここに福音書に基づいた生き方の根幹があります。

それは四つの原理に分けて表されます。

第一は、喜びの原理です。この「喜びの原理」は、「自由」とともに福音書の生き方を考えるうえでの大切な柱の一つです。

第二は、「一致の原理」です。キリスト者にとつては、共同体づくりと社会に対する大きな一致への運動の促進はたがい密接に結びついている大切な使命です。

第三は、「悪と善・暴力と平和を弁える原理」です。福音によって人は偶像やイデオロギーに対する盲目から解放され、周囲の社会を批判的に見ることができるようになります。

第四は、「社会変革の原理」です。福音書は単なる個人的な回心を呼びかけるのではなく、社会の回心をも呼びかけています。それは不正な社会機構の変革のための原動力となります。

この四つの原理について考えるために、私たち

がよく経験しているに違いない四つの事柄を思い浮かべてみましょう。

第一に、われわれは喜びもなく、絶望的な状況の中でしか生きることのできない多くの人々を知っているでしょう。

第二に、孤独にさいなまれて多くの人々にも出会ったことがあるでしょう。

第三に、自分でものを考えることができずに、いわば操り人形のように日々をすごしている多くの人々をも知っているでしょう。

第四に、何らかの形で不正、圧迫、抑圧に苦しめられている人々をも、頻繁に見ているでしょう。ここに暴力を育てる土壌があり、現代人の四つの傷があると言えましょう。

第一の傷は、無意味さ、生き甲斐のなさ、すなわち人生に対する虚無感と絶望感です。そのために、人は希望、喜び、平安、自己統一を失ってしまいます。

第二の傷は、共同体や伝統に根ざしていないと

いうことです。何らかの共同体に属していない場合、いわば根ざさない場合、疎外と孤独が生じます。

第三の傷は、疑い、迷いです。社会の流行や他人の考え方によつて操られ、考えたり判断したりする方法がわからないということです。多くの親は自分の子供の教育に関して自信を失うとき、この疑い、とまどい、迷いを感じます。

第四の傷は、いろいろな差別、抑圧、圧迫、人間の不正な取り扱いに見られます。

この四つの傷を癒すために、キリスト者が福音書に基づいた生き方を再発見しなければならぬでしょう。特に、和解とゆるし合い、一致と平和を求める生き方です。

つまり、先の四つの点に分けると、第一に、われわれは希望と「喜びの生き方」を再発見しなければなりません。それはキリスト者の希望と自由に基づく喜びの生き方なのです。「どうか、希望の源である神が、信仰から得られるあらゆる喜び

と平安で、あなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを、希望にあふれさせてくださるように」(ローマ15・13)。

第二に、私たちは「一致の生き方」を再発見しなければなりません。和解と共同体の推進のため、人間に根を与えるために、一致の生き方を再発見しなければならぬのです(コロサイ1・19―30・エペソ4・1―6参照)。

第三に、私たちは「暴力と平和を識別する生き方」を再発見しなければなりません。疎外と非人間的な操作から人間を救い出すために、暴力を拒否し、平和の建設を選ぶ識別を再発見しなければならぬのです(ヘブライ5・14・1コリント2・10―16・1テサロニケ5・21参照)。

第四に、私たちは「社会の仕組みの変革への道」を再発見しなければならぬのです(マタイ23・23参照)。

「神の国」(命の王国とも置き換えられるのですが…)というイエスが好んで使ったたとえば、こ

の四つの要点を見事に一言で表しています。イエスは自分自身が最も大切にしていた夢をこの表現に託したのです。福音書の中で、神の国はまさに前述の四つの側面をもっています。

第一に、神の国は希望と喜びの国です。「そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた、『天地の主なる父、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵のある者や賢い者に隠して、幼子に表してくださいました。父よ、これはまことに、あなたの志にかなったことでした』」(ルカ10・21)。

第二に、神の国は愛と一致と和解です(ヨハネ17・21)。

第三に、神の国は真理の国です(ルカ3・5―6)。人々の考え方を変え、偶像からの解放をもたらし、識別へと導くのです。

第四に、神の国は正義の国であり、人間を解放するものです(マタイ6・33)。

* * *

このように、私は人類共通の倫理に対して宗教の側からの貢献を考えてみたかったです。

このように、私は宗教のほうから人類共通の倫理へ貢献できるようにしたいと思っていますのです。

利他性が欠如した時代の危機

― 仏教と経済をめぐつて



山崎龍明

武蔵野大学教授

一 利他という語の意味

「利他性が欠如した時代の危機」というテーマに「仏教と経済をめぐつて」というサブタイトルをつけさせていただきました。これは仏教伝道文化賞の新聞記事のところにあった受賞者の奈良康明先生のコメント、「社会の中で実際に仏教がどう機能しているのか見えなくなる。人々の生活と結びついた仏教は、教理・教義のままではないからです」というご発言と関連しています。研究は研究として大事なのですが、私たちに今、課せられて

いる課題というのはこういう問題だと思っています。

サブプライムローンの問題が起こってから、私は世界の金融危機ということはずっと考えてきましたが、これは金融の危機であると同時に人間の危機であって、この危機は人間が創り出したものではないかと思うのです。さらに言えば、人間のエゴが創り出した危機ではないか、近現代に生きる人間の欲望がひき起こした必然的な事象ではないかという思いが、ずっと自分の頭の中にあつたのです。

私は日本工業倶楽部というところで時折講演をしますが、財界人の集まりなので、今回は仏教者として経済をどう見るかということについて聴いてもらおうと、先般、90分ほど話をさせていただきました。その話を土台に、こういうタイトルを掲げさせていただきました。

昨年の10月30日に、人口統計学者であり、歴史学者であるパリ在住のエマニュエル・トッドという人が朝日新聞に文章を書いていました。それは、こういう指摘でした。

「米国の腐りきった金融業界は世界中に何の価値もない証券を売りまくった。人類史上これに匹敵するひどい詐欺があっただろうか」

文言は厳しいんですが、私はまさにそうではないかという気がして仕方がありませんでした。

「今回の危機で表に出ているのは金融問題だが、背後には経済以外の問題が横たわっている。社会全体を考えずに自分のことばかりを大事にする自己愛、自己陶醉の意識だ」

こういう文章です。

私たちの先輩の仏教者が仏教経済学という提唱をずっとしておられました。30〜40年間、あまり顧みられなかったという歴史があります。このトッドさんの指摘と仏教経済学を提唱した人の根底には非常につながりがあるのではないかと、というところから論を進めていきたい思います。

私は宗派的にいうと浄土真宗なんですが、浄土真宗の者は利他性ということをあまり言わないんです。「言つてはいけない」というタブーみたいなものがあるんです。これはおかしいことです。大乘仏教は自利利他の教えです。もちろん親鸞も自利利他の教えだと言っているのですが、親鸞以降の我々の教団では、利他というのは原則的に浄土に生まれて仏になって初めて実践できるという考え方が教義としてあるんです。親鸞が説いた教えと後の制度化された教団の教義が必ずしも一致していない。私はそのことを40年間ずっと自分の研究課題にしてきました。現在の本願寺教団と親

鸞をストレートに見てみると、ずいぶん屈折しているようです。これは客観的な事実なんですが、教団はそれを認めるわけにいかないんですね。親鸞には「浄土真宗は大乗の中の至極なり」（書簡）という言葉があります。親鸞は利他ということをとっても重要視したんです。

利他というのは、ご承知のように上求菩提、下化衆生です。菩提を求めつつ衆生を導く。そんなこと凡夫にはできないじゃないかというのが一般の考え方かもしれません。でも、それで終わらせたいいけないと思います。真宗教団には、すべからくそういうところがあります。たとえば四諦八正道の教え等についても単純に、とてもできるはずがないじゃないか、というところから出発するのが浄土真宗と言ってもいいかもしれません。

では、なぜ親鸞は、この教えは利他の究極の教えだと言ったのかということが当然、疑問になります。しかし、その疑問は800年間問われなわけです。内部的な話で恐縮ですが、教団の中に

安心派という言葉があります。いわゆるカテキズム（宗意安心論）ですね。どうということかという、宗教は心の問題、内面の問題だという立場の人々です。私は閉ざされた枠の中で念仏の教えを聞いて、満足している人々のように思います。社会のこと、たとえば靖国問題とか戦争とか平和とか差別、環境という問題は仏教者が関わる問題じゃないと言うのです。私が引かかるのは、では親鸞はなぜ浄土真宗は大乗の至極と言ったのだろうかということなんです。その疑問は相変わらず解けないんです。

安心派という語に対して、もう一つ社会派というのがあります。私は社会派と言われているんですが、これもいいかげんなもので、何が社会派かわからない。たとえば、死刑制度があるからといって「人が人を殺すのはおかしいんじゃないか」と言うとか社会派になってしまいうわけです。もつと言えば、「あいつは信仰がないから、ああいうことを言うんだ」と言われます。それで、みんな潰さ

れちゃうんです。あいつは社会派だ、信心が欠如しているから社会の問題をやるんだという批判を、ずいぶん受けてきました。

しかし全体的方向として、ここ二十年くらい、浄土真宗本願寺教団もちょっと方向が変わってきました。余談で恐縮ですが、僕は「念仏者九条の会」という会の東京の呼びかけ人をやっています。このメンバーは全国に1000人ぐらいいますが、ところが発起人が「憲法九条を守る本願寺の会」を設立したいと申請したら、教団は許可してくれないというんですね。その理由は、教団の中にはいろんな人がいるからだということです。つまり、うちの教団は、あなたたちだけじゃない、いろんな考えの人がいるからいけないというわけです。参加してくださる方は高齢者が多いんです。90歳過ぎの女性もいます。皆さんが「先生、やっぱり今の時代はおかしいよ」と言います。「私たちの青春時代と同じだ」と言う方がたくさんいらっしゃる。若い方はあまり関心がないようですがね。

この頃の若い人は私よりも人間ができていますからね。大学で九条の話をしても、「先生、世の中そんなもんですよ」なんて、私が学生に慰められます。そういうことがあります。戦前戦後を生きてこられた年配の方のほうが、やっぱり今の雰囲気は少しおかしい。変な方向に行くのではないか、という危惧を感じておられる。そういう人は全部、社会派にくくられてしまっていますが、でも教団自身も若干そういう方向に動き出してきたということが、ここ二十年來あります。

二 歴史の場で仏法を学ぶ

釈尊のおおよそ七千余巻の經典というのは、いつの時代においても人類の智慧の宝庫だと思います。明治の文学者は、非常に經典に造詣が深かったといえます。現代の文学者は、ほとんど經典を読むことがないといわれます。やはり私たちは仏陀釈尊の説かれた經典に生き方を問うことが大事

だと考えます。それが「先人の智慧に学ぶ」ということだと思っています。

人間には貪瞋痴、「貪り」と「怒り」と「愚痴」という無知、無明があります。こういう人間観というものをきちんと確認しておく必要があると思います。経済は人間の営みですけれども、凡夫の営みですから、間違いがあるのが当たり前です。この人間の貪瞋痴というものを人間のしくみとして押さえておくことが大事だと思います。

「仏教のめざすもの」は、迷いを転じて悟りを開くということが第一義的な原理として確認されるべきことですけれども、迷いを転じて悟りを開く中で、その開いた悟りというものが自己を含めて社会にどう開かれていくのかということが課題としてあるのではないかと思います。

次に「仏教と社会生活」。一般的な言い方で恐縮ですけれども、やはり仏教者である私たちも社会を離れて生きることはいけません。歴史を離れて生きることはいけません。しかし、仏道には世を捨

てる仏道というものもありますね。遁世とか厭世とか。同時に、世間を超える出世間という生き方もある。出世間というのは必ずしも山に籠るということではなく、山に籠りながら世間に埋没しているような生き方をした僧侶は、山ほどいるわけです。

比叡山では、あの純粋な伝教大師最澄が山家学生式を著して、「二隅を照らす則ちこれ国宝なり」と言われた。ところが、国の宝を育てるはずの比叡山がだんだん墮落してしまうという現実がある。無住という鎌倉時代の僧侶が、昔は遁世というのは世を通れると書いたけれども、今は世を貪る（貪世）と書くべきだということを『沙石集』という書物に書いています。僧侶が世俗そのものを貪るようになっていたのが当時の比叡山だったんですね。これは比叡山の悪口ではありません。いつの時代であっても、人間である私たちは過ちをおかす存在なんだと私は捉えるのです。ですから、比叡山のトップ、天台座主は時代が下るにしたがって、

ほとんど有力貴族の出世者が占めています。有力貴族でないと座主になれないというおかしなことになっていくわけです。出世の道具ですね。貴族は臣下というか家来を連れて行くんです。それが僧兵になって、莊園を守るために神輿を担いで強訴する。

凡夫の集合体ですから、どこの教団でも常にそういう危機的なものを背負っているということですね。ですから、無住という僧侶は、遁世とは世を遁れると書いたけれど、今は字を変えて世を貪ると書くべきだと言うのです。「隠すは上人、せぬは仏なり」と無住は言いました。異性との交わりを隠す人が上人、そういうことを一切しない人が仏と言われるけれども、当節はほとんどいないという。無住という人は非常に皮肉に富んだ禪僧ですが、そういう時代状況があったようです。

世を捨てて道と、もう一つ、世に帰ってくる、世の中で生きる道がある。世間というのは世俗です。世から、世俗の誤りをきちっと見届ける、それが

実は出世間の道です。決して場所的な問題ではなかったということを確認しておく必要があると思います。

三 自己愛の経済学

次に「仏教における自利と利他」ということですが、これは先ほど申しました自利利他円満の道です。自らを利し、他を利する。ですから、私の救いがあなたの幸せにつながらないならば、私が救いを得ることはしない。これが自利利他の大事なところ。仏教の目指す世界は、すべからなくこういうところにあつたと思うんです。

先を急いで恐縮ですが、今の私たちの社会について、いろいろな言い方があります。乱世という言い方もありますし、浄土教関係では末法時代と言います。ご承知のように、仏陀が涅槃に入られてから1000年間は正法、これは正しい教えが存在する時代。1001年から2000年まで

は像法、仏法が形だけある時代。その後の末法になると仏法そのものが見えなくなってしまう。その次が法滅尽といって、法が滅びてしまうという仏教の時代観みたいなものがあります。

濁世とは末法を意味する言葉で、親鸞に「末法五濁の世となりて、弥陀の遺教かくれしむ」という言葉があります。五濁というのは劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁。「濁」は「濁り」ですから、劫濁というのは時代が濁ってくる、時代が非常に悪くなってくる。見濁というのは「見る」濁り、「見」というのは思想とか宗教ですから、己の宗教だけが唯一で他はみんな間違っている、そんな教えに関わっていたら地獄に落ちますよというような見方。これが見濁の時代。

それから煩惱濁というのは、私の解釈では、欲望の赴くままに人間が生きているという時代です。衆生濁というのは、人間の質が著しく低下する。平気で親が子を殺し、子が親を殺すような、人間の質が低下する時代を衆生濁と言います。

最後の命濁というのは命の濁りと書きます。これは私はよくわからなかったのですが、經典には命濁は寿命短少と書いてあります。要するに仏陀がお隠れになると、だんだん時代が悪くなると同時に寿命が短くなると書いてあるんです。今は寿命は延びているんです。だから、おかしいなという感覚があるんですけれども、寿命短少というのは、私の理解でいうと、世の中が豊かになって、便利で快適になればなるほど人間が人間として生きていけなくなる。命そのものの危険性ということでしょうか。

西丸震哉という評論家が20年くらい前に、これからの日本人の平均寿命は40代になるという本を書きました。何か頷けるんですね。健康的に言うとか、食品添加物とか大気汚染とか、世の中が快適になればなるほど次第に人間の寿命が短くなるといいます。そういうことを説いたのが五濁の思想ですが、考えてみたら、私たちはまさにその時代を生きている。そういう時代であるから、何が

本物で何が偽者かがわからなくなり、弥陀の遺教、つまり仏法が見えなくなってしまう。仏法そのものが隠れてしまう時代なんだということです。

この度の金融危機というのは一般的にはアメリカ発と言われるけれども、しかしアメリカ発にしても世界中で混乱が起こったというのは、世界中が同じような原理で生きてきたということに他ならないのではないかと思います。だから、金融危機とは人間の危機そのものではないかと思うわけです。さっきのトッドさんの指摘で言えば、自己愛ですね。自分の国さえ儲かれば、自分の家さえよければ、自分さえ幸せなら他のことは構わないという自己愛の意識が、このように社会を混乱させてしまったのではないかと思うわけです。

四 叡智なき経済行為の行方

市場経済は地球規模的に拡大していきます。20世紀初頭のグローバリズム。これは学者によって

いろんな概念規定があります。高度資本主義という中で貧富の格差とかが、しばしば問題になります。地球共同体が破壊される。同時に環境も破壊される。私は環境破壊というのは、人間そのものの破壊が環境を破壊することだろうという視点を持っています。成長経済か定常経済かというのは、今もってなされる一般的な議論であります。

その次に、経済の行為はいかなる倫理によって規制されるべきかということです。要するに、経済とは何か、経営とは何かということを含めまして、ご承知のように経営という言葉は本来仏教の言葉でして、弥陀の言葉で申しますと、人生をどう営んでいくかということなんです。私はよく法話などでそういう例え方をするんですけど、私という会社の社長が私自身であり、その私自身がこの人生をどう営んでいくかということが経営ということの原初的意味のようですが、後にそれがいわゆる経済という形に移行してしまいます。

原典を調べていませんが、道元が「いたづらに

息慮凝心の経営なり」と言っています。息慮凝心

というのは、あれこれ自分がエゴに基づいて思い図ることを止めて、仏のほうに心を向けて、きちつと心を寄せること、道元は経営という言葉を使つて説いています。親鸞のひ孫の覚如という人も「仏恩報盡の経営とすべし」と言っています。「この教えに出会えた喜び、その恩に報いる経営（いなみ）」とすべし」という言葉を見ると、経営という言葉も今とずいぶん違つてきます。

経営というのは、本来人生をどう営んでいくかということ、企業が利益を上げることという形になつてきたのはずっと後のことです。叡智に支えられない経済行為、自己愛に埋没した経済行為が今日のような危機をもたらししてきました。こういう危うさと、すべての生命が破壊される危機、すべてはエゴ、我執といいましょうか、自己愛といいいましょうか、そういうものの中から生み出されてきた危機が今日の危機です。

五 金銭に対する眼差

私は以前、ある雑誌に「お金に対する正しい眼差」という巻頭言を書きました。お金というのは、あくまで私たちが生きるための手段です。そのお金が人生のうえで目的化されてきてしまったことが、大変大きな問題になつてきているのではないかという気がするのです。大学の学生なども、地方から上京してきてアルバイトでちよつといいお金をもらつと、アルバイトに埋没しますね。それで、学校を辞める学生がずいぶんいるんです。これは本末転倒ですね。お金は学生生活を続けるための手段なのに、お金が目的になるんですね。お金の魔力です。お金は生きるための手段の一つです。手段と目的を取り違えると人生そのものが非常におかしくなつてくるということがあると思います。

仏教徒の動向として、これは一つの例ですけれども、スリランカのサルボダヤ運動という有名な

運動がありました。これは地域開発の運動ですけども、ただ地域を開発するというのではなく、そこに生活する人たちの精神の充足を第一とする開発といましようか、そういう運動が展開されています。

それから、もしお時間があつたらお読みいただきたいんですけど、仏教経済学という視点で自利利他の経済学ということ考えた場合に、大変著名なE・F・シューマツハーの『スモールイズビューティフル』という本があります。この方はドイツのボンで生まれ、1977年に66歳で亡くなっているんですけど、この方の本が1973年に出版されました。講談社学術文庫に入っています。

この人は経済顧問として請われてビルマに行き、仏陀の教えに触れてびっくりしたというんですね。そういうところから経済とはこうあるべきだという考えをまとめたのが『スモール・イズ・ビューティフル』という本です。最初のところを少し読

ませていただきます。

「私がいいたいのは、平和の礎を現代的な意味での繁栄を行きわたらせることで築くことはできない、ということである。なぜならば、その繁栄は、かりに達成されたとしても、そのためには貪欲や嫉妬心といった、知性や幸福や平静を損ない、はては平和を好む心を殺すような衝動をかきたてざるをえないからである」とあります。

シューマツハーは英知ということを言います。

「この英知を取り戻すために働くのであれば、平和のために働いているとはいえない」

こんな指摘があります。

「ひたすら富を追求すれば、世界に平和を築けると期待するのは、現実無視であり、非科学的・非合理的である。人類がまだ十分には成功を達成できなかった間は、経済学や科学・技術から英知を閉め出してもなんとかやってこられたが、大成功を収めた現在、精神や道徳上の真理の問題が全面に出てきたのである」

こういう書き出しなんですが、このシューマツハーはインドの独立運動の父ガンジーに傾倒していたそうです。

『大地は一人ひとりの必要を満たすだけのものは与えてくれるが、貪欲は満たしてくれない』というのが当たっているように、『おやじの時代のぜいたく品が今ではみんな必需品』といって悦にしているような欲深な態度とは相反するものである』

そして戦争とか経済の問題を貪欲とか嫉妬心ということを中心に展開しています。そこに平和というものを独自に掲げている。そのあとに、労働とは根本的に何であるのか。それから人間の機械化の問題。「第一は人間の技能と能力を高める機械化であり、第二は人間の仕事を機械という奴隷に引き渡し、人間をその奴隷への奉仕者にしてしまう機械化」。このようなかたちで、この本が成り立っています。もし、まだお読みでないという方がおられましたら、ご覧いただければありがたいと思います。

『スモール・イズ・ビューティフル』というのは仏教の特に八正道の正見に注目しています。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の正見のところに、この人はポイントをしぼって、その正見に「正しい生活」があると言います。したがって、彼は英知というんですが、英知に基づいた経済学があつてしかるべきである。サブタイトルに「人間中心の経済学」とありますが、人間が幸せになるための経済学でないと、日本の言葉で言うところと経世済民にはならないということですね。「中道にもとづく簡素と非暴力。わずかな手段で十分な満足を与える」。これは、彼がビルマに行つて仏教徒の生活を見たときに、こういう認識を持ったのでありましょう。簡素と非暴力、そして僅かな手段で十分な満足を得ながら生活している仏教徒の姿を目の当たりにして、非常に感銘を受ける。さりとて「仏教は物的な福祉を敵視しない」「解脱を妨げるのは金銭とか富ではなく、富に対する執着が実は解脱を妨げている」ということが

縷々述べられています。

バーバラ・ウッドという女性がいます。この方は「仏教国の経済学」という論文を書いています。シューマッハーの娘さんです。大変、お父さんを尊敬していた経済学者です。

バーバラ・ウッドが書いております「貧困、充足、飽満、破壊、不経済」。こういう論理立てで貧困が解決され、飽満になると破壊が起こる。実に不経済で、それが人間にとって大変不幸な生き方なのだ。お父さんの経済理論をこういう形で展開していったのが娘さんのバーバラ・ウッドという女性です。

P・A・パユットという人の仏教経済学は、貧富を離れる、いわゆる中道の経済学です。これが人間の幸福を実現するものである。この人の論で「おや」と思ったのは、中道とは適量であるということです。適量ということは節制ということである。この原理を失わない限り、人間はかなり幸福になれるのだけれども、しかし、人間のエゴは

それを一方的に無視してしまう。だから、ますます人間の混乱が起こってくるんだと言っています。

日本では、井上信一という方がおられます。この方は熊本県の出身なんです。小学5年生のときにお父さんを亡くして、6年生のときにお母さんを亡くすんですね。幼いときに相次いで両親を失ったんですけれども、そこから仏教に縁があり、のちに東京大学に入学します。高等学校でも仏教研究会に所属していたらしいんですが、やはり人間が幸せになるにはマルクスでなければというわけで学生時代にマルクス経済学を一生懸命に勉強します。つまり、経済構造を直さなければいい世の中は実現しないと考えたわけです。これが経世済民の原理だというわけです。

倉田百三に『生活と一枚の宗教』という著作があります。これは当時、若い人にずいぶん影響を与えました。そして倉田百三は『親鸞』とか『俊寛』という作品、あるいは『愛と認識との出発』という本を書いて多くの若い人に影響を与えました。

その倉田百三の著述に井上信一さんは出合うんですね。この人は、自分の生まれは曹洞宗だから道元が好きだという。変な言い方ですが、日本のインテリが一番好きな宗教者は親鸞と道元なんです。インテリが嫌いなのが日蓮さんだといわれます。親鸞と道元って実は難しいんですよ。何を言っているか、よくわからない。道元の『正法眼蔵』は難しいですからね。親鸞の『教行信証』なんて、それ以上に難解な書物です。インテリという人は、よくわからないのが好きですからね。

昔、吉本隆明さんにインタビューをしました。出版社が帯の文章を誰に書いてもらおうかということになったんですね。梅原猛さんはどうですか、ということでは梅原猛さんに書いてもらったんですね。そうしたら、梅原猛さんが素晴らしいことを書いてたんですね。何と書いたかという、吉本さんの書いていることはとにかく難しいと。難しくて、ほとんどわからない。だけど、わかったところが少しあって、わかったところが素晴らしいところ

を見ると、わからないところはもつと素晴らしいんじゃないかと書いてあるんですよ。梅原猛さんはさすがだなあと思いましたね。本当に吉本さんの文章って難しくて、わからないところがいっぱいあります。

その吉本さんに私は強い影響を受けました。しかし、麻原彰晃の理解をめぐって犬猿の仲になりました。吉本さんは、麻原彰晃は第一に救われるべき存在だという意見だったんですよ。親鸞は「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」と言っている。善人が救われるのだから、悪人が救われるのはなおさらだ。だから、麻原は真っ先に救われるべきだと、産経新聞で宗教学者の弓山達也という人と対談したんですね。そうしたら、産経がパニックになりましたね。読者から「こんな人をなぜ新聞に載せるのか。不買運動をする」と言われて、記者が私のところに来たんですよ。1995年でした。私は喋ったんです。だいたい自分の気に入らない人が紙面に登場したら、その新聞

を読まない、買わないなんていうのは下劣である、心の貧しさだと。自分と反対の意見を言う人がいたっていいじゃないですか。それを新聞社が仕事をできなくなるほど、パニックになるほどFAXを送るなんて、と。

ただ、私は吉本さんとちょっと考え方が違いますと言いました。善人が救われるんなら悪人が救われるのはなおさらだというのは、『歎異抄』のその言葉だけを切り取ればそういうことになるけど、その後に「他力をたのみたてまつる悪人が救いの正因」だと書いていてあるんですね。どういうことかという、自己の悪の痛みとか悲しみを自己に突きつめて、私のような救われざる人間はどうしたらいいのかという人間を阿弥陀仏は必ず救いますよと書いてあるんです。だから、吉本さんの言っていることは、ちよつと違うんじゃないですかと喋ったら、吉本さんがそれをご覧になって、何冊もの本の中に名指しで、こういう仏教学者がいるから仏教がダメになるんだと書かれました。

私は学会で正式に反論しました。

吉本さんの言いたいことで私がわかるのは、悪人が救いの第一の対象だったら、麻原が一番浄土に近い存在だということになるじゃないかということです。しかし相変わらず弟子が勝手にやったなんてことを言っている以上は、ちよつと親鸞の言っていることとは違うんじゃないかということが議論の分かれ目だったんですね。まあ、そんなことがありました。

井上信一さんは大学を出てから日銀に勤めました。日銀に勤めてから宮崎県の宮崎銀行の頭取をなさったんですが、この人が『地球を救う経済学』という本をお書きになった。なぜ仏教経済学を提唱するかというと、自分が定年になって年金生活になったときに非常に生活が不安だったというんですよ。この人は日銀に勤め宮崎銀行の頭取まで務めた人です。そういう人が年金生活が不安だったら、私らはどうしたらいいんでしょうね。それはともかく、やはり今の経済はおかしいというの

で仏教徒の立場から、こういう本をお書きになった。

井上信一さんは昔、倉田百三に出会ったときに「我々が生きている根拠は太陽に許され、空気に許され、食物に許されというように、あらゆるものに許されているからだ。このことにおいて、すべての人は平等であり、これが人間平等の根拠。それが他力というんだ。その時から今までの間ずっと、親鸞と実家が信仰していた曹洞宗の道元が僕の師です」と、いろんなところでおっしゃっています。

この方の経済学は大雑把に言うと、(一) 自利追求の経済学から利他追求の経済学です。これは先ほど申しましたように、「自分の会社だけが儲かればいい」という形から「そうではない。儲かることによってこちらが救われていくんだ」という経済学に方向を展開させていくということです。

井上信一さんは、「欲望の拡大より吾唯知足」と言っています。道元の影響でしょうか。欧米の経済学というのは、どちらかというと自利を根本に

するのに対して、仏教は自利利他円満が基本であるから、他の利益になることが実は同時に自分の利益にもなるという考え方。

(二) 欧米の経済学は、欲望は大きいほうがいい、欲望に対してノーチェックだけれども、欲が経済発展を上回れば何にもならないから、ここで吾唯知足ですね、吾唯足ることを知る、この心がけが非常に大切になってくる。(三) 西洋は聖書の考えで労働調和説というのを取るけれども、仏教というのは、労働と消費のバランス、釣り合いがとれて初めて経済が経済たりうる、人間が幸せになるんだと考える。

それから、最後は(四) 私有財産に対するものの考え方ですね。仏教では、財産は預かりものであって本来は自分のものではないと考える。こういう考え方が、経済に携わる者には大事ではないかという。

その中で井上信一さんは、伊庭貞剛、私も尊敬する人ですけれども。この人も禪をやったお方で、

非常に潔い身の処し方をされました。その伊庭さんについて、井上さんは、いろんなところで書いています。「若い人が未熟だ未熟だと言うけれども、年を重ねた人がいつまでも主流を担っているよりも、未熟な若い人がその道を歩むことのほうがもっと生産的である」ということで、自ら50代初めで退いた住友の総領事です。非常にスマートな生き方で。その中に自利利他というものが見られるというのが、井上信一さんという人の考え方としてあります。

それから、いささかのまとめですが、経済とは何かというと、人間の幸せのためにあるんだということは、最小限の確認をしなくてはいけないと考えます。経済を動かすのも同時に人間です、しかし、その人間が貪瞋痴の、貪りと怒りと愚痴の存在ですから、英知によって導かれない限り、経済学というのは破綻に向かっていくのではないかと思います。だから私は、人間、まず自己自身を整えるといいでしょうか、人間そのものの学びが

いかに大切であるか、これは経済だけではなく、すべてに先行することだと思っています。

利他の経済学というのは果たして築くことが可能であるのかということについて。稲盛和夫さんという人がいろんな本を書いていらっしやいます『週刊朝日』の2月13日号で、この人の特集をやっております。

その記事によりますと、この人は京セラの会長をやった人ですけれども、どんなに苦しいときでもリストラだけはしてこなかった。会社は吸収合併したけれども、リストラは一切しなかった。アメリカの会社を買収したとき、1株20ドルで買えと言われたので、「いいですよ」と言ったら、向こうはお金があると思って、「30ドルで買ってくれ」と、どんどん足元を見て金額を上げてきた。会長としては、「いいですよ。経営的にしんどいけれども」と言うんですが、結局30ドルで買ったというんですね。そうしたら、役員全員が反対したという話があります。

しかし、仕事が上向いていったんでしょね。

サウスカロライナにある会社だったらしいのですが、そこに招かれて行ったときに、第二次世界大戦以降、サウスカロライナというのは大変反日感情の強いところだったらしいのですが、この会社は非常に礼儀を重んじる会社であるということを、その役員が従業員に話をしていたことを稲盛さんは聞いたそうです。

この方は臨済宗で得度、出家しました。60歳になったら出家しようと思っていたらいいのですが、会社の関係で65歳のときに出家したようです。この人が言うんですね、満ち足りて驕る者は大きな損失を被り、常に謙虚に相手に良かれし、と考える者は素晴らしい幸運を勝ち取る、と。この人に注目したのは、週刊誌を見ていたときに、利他の経営哲学は海外でも通じたというんですね。ですから、経営にもこういう哲学が根本にないといけないというわけです。

そして、経済だけでなく政治にも哲学が必要で

す。あの避雷針を発明したベンジャミン・フランクリンの「政治家は次の世代のことを考える、政治屋は次の選挙のことを考える」という言葉は、私が忘れることのできない言葉です。憲政の神様といわれる尾崎弐堂も似たようなことを言っています。国会について「国よりも党、党よりも自分のことを考える人の群れかな」という歌を詠んでいます。人生哲学、政治哲学、経営哲学、というものが大変重要ですが、とにかく儲かればいい、儲かればすべて許されるという風潮が今日のような危機を招いたのでありましょう。

高木顕明という人がいます。この人は、明治の幸徳秋水の大逆事件、天皇暗殺を謀ったということで12人が死刑、12人が投獄された事件の一員で、浄土真宗大谷派、東本願寺の僧侶です。私は去年、講演を頼まれて和歌山県の新宮というところに行ったのですが、本願寺から命を受けて彼は新宮の浄泉寺に入寺しました。そこで大変過酷な思いをしてきたようです。彼はそこで活動をするわけで

すけれども、1908年に大逆罪ができます。天皇とその直系に危害を加え、また加えようとした者は死刑に処するというのが1908年の大逆罪です。大逆事件は完全なでっちあげだったということは歴史が明らかにしていますが、12人も処刑されてしまった。この高木顕明は懲役刑で秋田刑務所に服役したんですが、拷問にあつて3年後に首をくくって死んでしまったんですね。

その高木顕明が懲役刑になったときに大谷派東本願寺は彼を処分しました。とんでもない坊さんだと。私は若い頃、明治時代の日露戦争下の仏教者という論文を書いたんです。私は昔から幸徳秋水の生き方に傾倒していました。それはどういう論文かというと、幸徳秋水の生き方、いわゆる日露戦争絶対反戦論ですね。新聞の主筆でしたから日露戦争をやったら戦費が拡大して国民は疲弊するということを徹底的に書いた。それで発売禁止になるんですけれども、幸徳秋水が徹底的に戦争は間違っているということを言っているときに、

当時の仏教者がどういう活動をしたかというのと、この高木顕明のような人はほとんどいませんでした。日露戦争に対して既成の伝統教団では西本願寺教団が功績を挙げました。こんなことは仏教教団では例がないのですが、明治天皇から勅語をもらっているんです。戦争に協力してくれてありがとうございます、というわけです。「朕深くこれを嘉す」とあります。大師号つてありますでしょう。あれは天皇からもらいますよね。親鸞はもらえなかったんですよ。当時、明治28年の本願寺のトップがどうしてももらいたくて、役所をお願いに行ってもらっているんですね。しかも、こういう名前をくださいと、名前まで考えて。それが見真大師です。六畳の大きな額が西本願寺に飾ってあります。

私の論文は、宗教を否定し、非人間的、国賊といわれる幸徳秋水のほうがどれだけ仏教的な生き方をしたかということ述べたものです。

内山愚童という曹洞宗の僧侶がいます。この人は処刑されました。どっちが本当に仏教的だろう

か、非仏教的だろうかということを考えます。高木顕明は絶対非戦論に立つ。進歩向上と共同生活。進歩向上というのは絶対非戦です。日本人とかロシア人でなくして、すべての人間が一つの幸せの方向に向かって、向上し、進歩していく、そういう世界。共同生活というのは一部の者によつて搾取されて、この人の場合、地域で非常に悲しい生活を見てきました。生存競争、弱肉強食の否定を貫き、大逆事件で獄死します。

内山愚童という人は、読んでみますと、この人はものすごくラジカルで厳しいですね。無政府共產主義。大逆事件で死刑になった曹洞宗の方。大逆事件と言うより幸徳事件と言ったほうがいいですね。この人たちの根底に流れていたのは利他行なんです。日本が戦争に勝つてそんなに嬉しいのか（日露戦争）。人が人を殺すということは仏教者としてどうなのかという痛烈な批判。批判であるがゆえに断罪されるということなんです。

そこで一つだけ、いろいろな宗教者がいるので

すが、なかでも著名な浄土真宗の僧侶に暁烏敏（あけがらすはや）という人がいます。この人は足尾鉋毒事件のときにこういうことを言うんです。「田中正造が5年かかって鉋毒地の人民に権利思想を吹き込み、尽力したということを知った。要らぬおせっかいだと私は思った。私が鉋毒地の人民に言いたいと思つていたことは、彼らの権利思想を捨てよということだった。男らしく服従せよということであつた」。この暁烏という人は「男らしく」という言葉が好きなんです。何にも言わずに状況に身を任せていけと。それが男らしいかどうかはわかりませんが、この人は激情的家でした。いろいろな意味で近代の日本の仏教史を騒がせた人です。

それはともかく、目の前に理不尽なことが起こっても、それに抵抗しないで「はい、はい。よろしい、よろしい」と平気で受け取る。そういう精神が男らしい服従である、ということを言ったんです。この人は戦時中、第二次世界大戦のとき

も天照大神というのは阿弥陀仏なんだけれども、日本では天照大神として現れてきたんだと言った人です。足尾銅山の問題でも、「人民が苦しむ苦しまないの原因は足尾の銅山にあるのではなくて、自分自身の心の中にあるのである」とこれは典型的な仏教者の理解ですね。今の仏教者はこういう方がほとんどじゃないですか。人間の幸せは心の中にあるという言い方。その後に軍人というのは敵国を降伏させる前に、自分の中にある敵に勝たねばならない。無事に日本に帰りたいという心中の敵を降伏しなければいけないと書いています。そして「戦争に行くのに、無事に帰ってきたい、そういう自分の中の敵をまず殺さなければいけない」と。「而して、無事で帰ってくださいという声は悪魔の誘惑と思うほどになつてもらわなければ困る。この無事で帰りたいという心中の敵が降伏できたところで、早、我が軍隊大勝利の基礎ができていくのである。出征するのは火葬場に行くのである」という大覚悟を持って進む人でなければ、

決して勝利は得られない。諸君よ、どうか勇ましく働いてください。帰りには砲車に乗ってきてください。白骨になつて帰ってきてください」と仏教者を激励したのが暁烏さんです。

暁烏だけではなく当時の仏教者はみんなこういう認識だったんです。そういう意味では、仏教の近くにいる人が実は仏教から一番遠いところにいる。私の言い方で言わせてもらうと、仏教から最も遠いといわれる幸徳秋水みたいな人が仏教に一番近いところにいるという、そういう論文を昔書いたことがあります。

暁烏さんは例外ではなく、ほとんどの仏教者が、第二次世界大戦のときもそうですけど、こういう中で生きているわけです。そうすると、やっぱり私は、冒頭で申し上げた利他ということを考えたときに、私が仏になつて、相手を仏さまにしてあげるんだというような、ある意味で非常に閉ざされた利他という理解がそこにあるのではないかと思います。高木顕明も弱肉強食社会の否定ですし、

内山愚童もそうです。

最後に、宮沢賢治の農本主義。賢治は有名な、「世界が全体幸せにならないかぎり、私の幸せはない」と言いました。この人のお父さんは大変熱烈な真宗門徒で、暁烏敏他仏教者を京都から呼んで、自分の家で10日間、仏教講習会を開くんです。だから賢治は4歳くらいのときからお経を覚えていたということです。

宮沢賢治はその後、『法華経』信仰に入ります。それはなぜかというと、賢治は感受性の鋭い人ですから、自分の家が商人で金持ちだったんですね。だから、みんな金を借りに来るんです。自分は恵まれていいものを着ている。だけど、大多数の人は食うに食っていけないという中で、非常に傷ついていく。

盛岡に願教寺というお寺があります。そのお寺に來た島地大等という学僧が『法華経』の研究者だったんです。その『法華経』の講義を聴いて、賢治は非常に傾倒したんですね。それから『法華

経』至上主義になっていく。それから東京に出てくるわけですけども、高木顯明師にしても、内山愚童師にしても、賢治にしても、その根底に「世界が全体幸せにならないかぎり、私の幸せはない」という思念が強かったのでしょうか。

現在の金融危機を見ると、自己愛から生み出されるところの経済活動というのは早晩、破綻するというのは言うまでもないと思います。有用性の経済学から、要するに、役に立つというか、ただの金儲けというような経済学から、人間を本当に幸せに導くような経済学というのはどういうところで可能であるのか。先ほど申しましたシューマッハー、バーバラ・ウッド、パユットという人たち、あるいは井上さん、多くの方々の仏教を背景にした経済に対する考え方を回復するということが、私たちに必要なことではないかなと思います。

人間の幸せをめざす経済学（利他の経済学）へという方向に向かっての歩みが、時代の混迷を克

服していくのではないかと思う次第です。ありがとうございました。

参考文献

1 「中外日報」二〇〇九年一月二十九日号

「仏教伝道文化賞決定」

2 『ぴっばら』二〇〇八年十二月

全国青少年協議会刊

3 『教行信證』註釈版聖典 一九八八年六月

西本願寺刊

4 『地球を救う経済学』井上信一著

一九九四年一月 すずき出版刊

「レーガン大統領の行ったデレギュレーション（規制緩和）は、アメリカの金融機関の激しい競争を生み、倒産する銀行も相次いだ。やがて日本でもデレギュレーションが行われるに違いないと確信した大金融機関は、儲けられることならなんにでも手を出そうと、〈垣根撤廃〉を大声で要求した。そのためお堅いことが身上的銀行が、なり

ふりかまわず融資競争に走り、株に手を出し、ついにはノン・バンクなるものが続出するようになった。このために世界中が強引な企業乗っ取りや、証券取引所内部の資料を違法入手して株式の取引をするなど、生き残るためには手段を選ばない、カネ儲けのためなら違法行為等をも辞さないという発想の経営が行われるようになったのである」という指摘は重要である。

5 『スモールイズビューティフルー人間中心の経済学』E・F・シューマツハー、小島慶三・酒井攀訳、一九八六年四月初版 講談社学術文庫
6 『社会をつくる仏教 エンゲイジド・ブッディズム』阿満利磨著 二〇〇三年六月 人文書院刊
本書には、後半部分の大逆事件、高木顕明、内山愚童、暁烏敏等に関して多大の示唆をいただきました。感謝申し上げます。是非ご覧ください。
また、ご関心がありましたら拙論「日露戦争下の真宗教団」（『龍谷大学仏教文化研究所紀要』二十一号）をご覧ください。

「共にすべてのいのちを守る」ための5原則

共有される安全



山田 經二 上智大学名誉教授

A. いのちの尊厳

共有される安全は、すべての人々と自然環境との間の根本的相互関係に焦点を合わせることによって人間安全保障の概念の基礎の上に築かれる。それは自己の幸福が他者の幸福と結びついているということ、究極的には我々すべてが共有する地球環境と深く関わっていることを認識する。

我々がめざすものの最重要なものとして、人間・自然を含めたすべてのいのちの尊厳を守ることが安全保障の根幹となる。

利己的な利益の追求や排他的な国益の追求を第一義にした安全保障とは異なる。また、いのちの尊厳を守るということは、軍事的脅威のみならず貧困などの経済的な脅威や差別などの社会的脅威等を撲滅することである。

人はパンのみによって生きるのではない。それどころか、人はパンのみによって生きることによって死んでいる。それはあらゆる関係の断絶を意味する死である（ドロテー・ゼレ）。関係の断絶、

もはやどのような関係もないという恐ろしい死である。それは聖書が語っている死である。他の人々がその人にとって富や挑戦や幸福ではなく不安や脅威や競争を意味するような人間はパンのみによって死ぬのである。

確かに、それはあらゆるところで現に起こっている忌まわしい死である。すなわち我々はまだ呼吸をし、消費し続け、生活し、さらにあてもなくあれこれ語るが、にもかかわらず我々は生きていないのである。現代、生きる環境自体が非常に唯物的になっていく中で、人間そのものは「パンのみによる死」とゼレが言うように、傷つき、病み、喘いでいるのである。

それは医学的な死ではなくて、無意味で空虚な生を意味する死であり、関係の断絶した不安な意味の失われた、見捨てられた状態における死である（詩篇88／49）。

「私は死んでいる者たちのうちに住まなければならない」。詩篇の中での見捨てられた者はこの

ように嘆いている。彼は自分自身を、死んで穴の中におかれ、暗い所に住み、不幸で友人たちのいない者とみなしている。

「私は穴に下る者のうちに数えられ、力のない人のようにになりました。死んでいる者たちのうちに住まなければならず、墓に横たわる殺された者のようになりました。彼らはあなたにもはや憶えられず、あなたの助けから断たれた者たちです。あなたは私を深い穴、暗い所、海の深みにおかれました。あなたは私の友人たちを私から遠ざけ、私を彼らの忌みきらう者とされました。私は閉じこめられてのがれることができません。私の目は悲惨のために衰えました」

苦痛は我々を孤独にし、我々をまいらせ、我々がそれによって生きる交わりを破壊する。

詩篇作家が苦痛や病氣や敗北を経験したように、我々はパンのみによる死を体験する。これが聖書の語る死であり、それは生のただ中における恐るべき死、空転であり倦怠である。

この中で生はただ何となく生きのびることに化し、人間は単なる働きバチとなる。これが聖書の語る死である。

放蕩息子とは異郷の地にただひとりで生き（ルカ15）、他人の豚の世話をし、パンのみのために生き、パンのみによって生きる。それゆえに、父は彼のことを息子は死んでいたと言う。彼は関係を絶たれて生き、誰とも話すことができず、自分の状態が変わるという望みすら持たずに、ただ植物のように生きのびるだけ。それは生ではないと聖書は言っているし、我々も生とは呼べない。そこにあるのは生のただ中における死である。

生というのは、何かそれとは別のものであろう。この物語の中の父がそのように判断しているということは、イエスがそのように判断しているということであり、我々もそのように判断することを学ぶ。

「生きのびることは、生きることではない」（1968年、学生たちがパリの壁に書いた）。何と

か暮らしていくことは生きることではない。それは我々を脅かす死である。

「我々は生のただ中で死に取り囲われている」。すべてを支配する死である関係の断絶は苦くまた甘い個々の痛みをはじめから全く起こさせない。これが生のただ中で生産過程のただ中で我々を飲みこむ地獄である。

「死は罪の支払う報酬」（ロマ6/23）、すなわち誤った生き方の帰結であり、それは関係の断絶とお互いに相手に対して持つ不安という死であり、ただ生きのびるということにすぎない死は実のところ死であるという意味での死なのである。

我々はパンのみによって死ぬ。この死は自然の死ではなく、暴力による死であり、生きている者に暴力をふるう。それは指図されている死であり、我々の生を支配している構造的な暴力によって命じられ、我々を生きていることの持つさまざまな危険にさらすよりも、むしろ死んでいたいとか殺したいと思う我々自身の病的な欲望によって好ん

で受け入れられる死である。

こういう危険は異常に大きい。つまり人はパンのみのために生き、すべてが利潤のためであるような社会の中で、気が狂ってしまう危険を冒すのである。

ところで精神的に障害のある人々はますます多くなっている。彼らは一般的な死に抵抗している人々である。さらに加担しつづける我々健康人の代理として、彼らは暴力的な死に支配されている世界の中で、生への叫びを具現している。

大江健三郎氏は小説の随所で、いのちは生まれただけで尊いということを強調している。いのちが存在すること自体がかけがえのないことであり、誰にもいのちの尊厳を葬り去る権限はなく、またいのちの存在の事実は決して消し去ることもできない。

大江氏は障害をもつ長男と共に歩み、自らの体験からほとばしり出たいのちの尊さについての信念が小説に表現されている。

聖書の中に語られている最初の死は殺人であり他の人間を片づけることである。カインはアベルを片づける（創、4／2―16）。

古い物語では個人的な暴力であったが、我々の世界ではそれが構造的なものであり匿名で巨大になっている。そのような暴力が生を片づけ、生を整理し、生を組み入れ、生を破壊する。

放蕩息子子の物語とは異なり、現代では人々はお互いの豚の世話をするために自発的に関係の断たれた異郷の地におもむくのではなく、組織的な暴力に強制されてそうする。聖書が死と呼ぶ、関係の断絶は、最も重要な生の領域、つまり労働の領域において強制され、訓練される。人間が死んでいる状態が学習され、死んでいる状態へと教育されるのである。

人を殺すには多くのやり方がある。ある外国人を彼が自ら命を断つまで、官僚主義的な仕方ですぐ不安にしておけば、人々ができるだけ摩擦なく持続し、お互いの間になるべく少ししか関係が

できないような生産と管理を教育における諸関係をつくっておけばよい。

世界はパンのみによる、パンのみのためのスーパーマーケット、あるいは工場のようなものであり、それによつて我々は日々の恐ろしい死を死んでいる。

聖書が語っているのはこういう死であり、聖書はそれを罪の支払う報酬あるいは最後の敵（コリ①15／26）と呼んでいる。

このような死に対してイエスは抵抗運動を組織した。ラザロ（ヨハ、11／1—44）やヤイロの娘（マルコ5／2—24、35—43）のような死者の復活は、死を耐え忍ぶことに対する闘いを扱っている。それらは我々をして死に立ち向かうように呼びかけ、我々を信じるように勇気づけるのであり、しかもそれは生の側に組することを意味するのである。

マタイ6／25—34 山上の説教

「だから云つておく。自分の命のことで何を食

べようか、何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養つて下さる。あなたがたは鳥よりも価値あるものではないか。

あなたがたのうちだれが思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし云つておく栄華を極めたサロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾つてはいなかった。

今日は生きていて明日は炉に投げ込まれる野の花でさえ、神はこのように装つて下さる。ましてあなたがたにはなおさらのことではないか。信仰のうすい者たちよ。

だから何を食べようか、何を飲もうか、何を着

ようかと云って思い悩むな。それはみな異邦人が切に求めているもので、あなたがたの天の父はこれらのものもみなあなたがたに必要なことをご存知である。

何よりもまず神の国と神の義を求めなさい。そうすればこれらのものはみな加えて与えられる。

だから明日のことで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の労苦はその日だけで十分である」

富、権力、名誉、自己中心、いのちを押しつぶす要素が渦巻くこの世は死の文明である。そのただ中で我々はいのちの文化を創る働き手になるよう招かれている。

B. 全地球の一体性（グローバル・ワンネス）

共有される安全は、すべてのいのちの相互依存性と尊厳性に対する包括的な尊重を内容としている。それは我々が深い相互依存の中にあるという

事実。さらにまた人類がすべて一つの世界に生きているという最も普遍的にして最も根本的な事実に基づいている。

様々な民族の多様なアイデンティティーを尊重しつつ、人類は一つの世界に生きているという、人類生存の普遍的かつ根本的な現実を直視すべきものと考ええる。これは環境問題や核兵器の問題に対応するときの前提となる考え方である。

アイデンティティー、瞑想、観想、これらは魂が世界から、国から、あらゆる感覚的対象から、そしてその後自分自身から、魂それ自身の意志によって脱出する試みであり、我々自身へと至るために支配する我を小さくし、無我になろうとする試みである。

自分が現在そうでないものになろうとする人は自分が現在そうであるものを犠牲にしなければならない。

「人間は小さな自我に死に、万物と一体となる。大きな自己に生きかえり菩薩となり仏になること

ができる」(『正法眼蔵』道元)

次の諸点は大切である。

全体であること、つまりばらばらに切り裂かれず
に生きること 救われていること、つまり破壊さ
れていないこと

救うこと、つまり破壊しないこと

義に飢えること、つまり不満に満足しないこと本
当に生きること、つまり無意識、無感動に生きな
いこと

天国に入ること、つまり地獄に止まらないこと

ある老人は晩年何も語らず、ただ「すべてすべ
て」といつもくり返し、ついに「すべて」を言い
ながら死ぬ。それは全体性を確かめる文句である。
「すべて」が意味するのは何ものも我々を神の愛
から引き離すことはできず(ロマ8/33)、何
ものも我々を破壊することはできず、何ものも
我々の主の真実を我々から取り去ることはできな
いということである。「何が起ころうともすべて

は汝にとって祝福である」(ヘルダーソン)。

それはすべてを肯定し、何一つ省かず、誰一人
忘れも除外もしないのと同じ敬虔である。

死者たちとこの一つの愛すべき現実に関係させ
ようとする、すべての宗教の試みもまた理解する
ことができる。死んだ者のために祈るということ
は一時的なものと想定される苦者の場所であり煉
獄という考えの中にその神話的な完成された形態
をもっている。そして祈りは苦痛を少なくするた
めに神に働きかけ、死者の痛みを和らげること
になるのである。

死んだある一人の人に対する我々の愛は死でも
って終止符を打つことができるのだろうか。

諸宗教は死を超えた人間と人間との関係の持続
を強調する生の形成、つまり儀式と神学とを發展
させた。社会の連続性と個々人が大切にされるこ
とは生のこの統合にしたがって、あの「すべて」
という言葉がどんなに根底的に理解されるかにか
かっている。

全体性と同一性という言葉の基礎となるこの二つの経験は認識し、かつ所有することが決してできない、すべての実存的な知のようにたえずくり返し新しい叙述と明確な表明と言語とを必要とする。

我々は全体的な世界の意識、すべての人々に無条件に妥当する義の意識を必要とする。

我々は子供たちに全体を経験することを伝えることなしに教育することはできない。

「願わくは主がみ顔をもつてあなたを照らし、み顔をあなたの上にあげ給わんことを」(民数記6／25—26)というのが幸福の経験を云い表すためにキリスト教の礼拝の中に保存されている祝祷の文句である。

パウロは人間の究極的な欲望を述べている。

「我々は今は鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかし、そのときには顔と顔を合わせて見るであろう」(コリ①13)。

そのときに覆いをとった顔は「自我から自己

へ」という「旅」の最後の到着点であり、その旅において神の光は全く我々のためにある。これがすなわち「変容」である。地上の時からイエスは歩み出て永遠の時へと移って行きモーセとエリアが現われ変容の山上でイエスと語る(マタイ17／1—9)。

C. 自他一体性

共有される安全は他者と自己とを区別した二元論ではなく、他者と自己の関係は相互依存に基盤をおき連帯性を本質とするものである。

他者への脅威は自己への脅威につながり、他者の安全は自己の安全へと連動していく。

臨終に際して外的いのちは滅びるが内的いのちは輝く。他者との関係の度合いに応じて(ホスピス医、柏木)。

自我がそれに縛りつけられている価値を根底的に否定することなしに「自分自身のものをすべて

脱ぎ捨てること」「自己」を捨てること」はできない。

「この世界における愛はすべて自己愛の上に築かれていゝる。もし、あなたがそれを捨てたとすれば、あなたは全世界を捨てたであろう」(マイスター・エックハルト)。

神秘主義においては自己放棄の三段階が區別される。

1) 世界「肉」と呼ばれる「この」世界を捨てること

この放棄は同時に自我とその意志とその諸關係を脅かす。もし私がすべてを「捨て」てしまったなら、いったい私はな何であるのか。

2) 私が私自身を捨て去らねばならず、これが第二段階である。

私は思い悩むことなく私から去っていかねばならない。

私は私を事物に自分の感情に固執させる必要がない。

私は支えられているので、しがみつく必要がなく、私は担われているので、重荷を担う必要がなく、

私は自分自身から離れ去り私を放棄することができゝる。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに來なさい。休ませてあげよう。

私は柔和で謙遜な者だから、私の軛を負い、私に学びなさい。そうすればあなたがたは安らぎを得る。

私の軛は負いやすく私の荷は軽いからである」(マタイ11/28—30)

私が私を捨て去ることができるといふことは死ぬことができるといふことを伝える。このようにして私は「生から一つの死」に到達する。

このような意味での放棄は内面への旅の諸段階を含んでいる。

「愛する魂はまず世界から、肉から（外面から内面へ）すべての感情的対象から、そしてその後自分自身から、すなわち魂自身の意志から「生から一つの死へ」と出ていかねばならない。

そのとき初めて愛する魂は我々の主イエス・キリストのすべての愛のわざの告知に耳を傾ける用意ができるのである。これがエリヤがすべての被造物から追いたてられ完全な観想と神の中へと高められた心の山頂で（地上の時から永遠の時へ）ほら穴の入口に立つて神の通りすぎるのを聞くために「自己」のすべての情熱を傾けて聴いたささやきなのである。」（歴王記上19、ホレブ山上のエリヤ）

「空」でありすべての「自分自身のもの」を捨て去り、自我から自己へと至った魂の中にのみ神は誕生しうる。

「私は生きているが、しかしそれはもはや私ではなくキリストが私のうちに生きているのである」

（ガラタ2/20）

自己を自分で捨てた人間の中にはキリストの形が成っている。

3）「放棄の最高の形成は世界と自我だけではなくて、神をも、伝統的な啓示された神をも棄てるのである」「それゆえ、私は神が私を神から自由にし給うように神に願う」（エックハルト）。

放棄…離脱

忍耐、自己否定、従順、調和、寛容、克己、欲慢をおさえること。

神への信徒と言ひ換えることができる。

これは「自分自身のもの」自我と自己性の強調に対立している。

「自分自身のもの」で満たされている人間は、まず自己を棄てることを学ばねばならず、それを学ぶことは最も重要なことである。

それはここで試みられている根底的な「離脱」であり、現代の最も重要な文化的価値を否定し、「自己」つまりこれらの内在的諸価値の手先を棄

てるといふことが起こる。

D. 将来への責任

共有される安全は過去、現在、未来が一つの連鎖で結ばれていることを認識させる。我々は共に過去、過去の過ちを認め、現在の課題に取り組み、未来世代に対し我々が果たすべき責務があることを受け入れなければならない。

我々の過去から受け継いだこの「いのち」を未来世代の人々に手渡していく責任と使命があることを自覚すべきである。

「神は、その独り子をお与えになるほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠のいのちを得るためである」(ヨハネ3/16)

「私が来たのは彼らにいのちを与え、さらに豊かに与えるためである」(ヨハネ10/10)

E. 多様な行動主体

共有される安全は国家のみで実現されるのではなく、市民社会、宗教共同体、地方自治体、各セクター等、多様な社会における行動主体の協力と連帯によるアプローチによって初めて実現が可能となるものである。

総がかりの責任主体が必須となる。公共性それゆえ個人一人ひとりの関係から国家または国際機関に織り込まれる人々の関係まで包含するあらゆる人間関係の一切を関心対象とする。国家主権の重要な次元を尊重しつつ、国家と国家、国民と国民との間に民主的かつ透明な協力関係が構築されることに「共有される安全」は支援を与えるべきである。

いのちが危険にさらされやすい世の中で、今こそ諸宗教・無宗教の人々がいのちを守り育んでいく必要がある。

自分のいのちが相手のいのちを暖め

相手のいのちが自分のいのちを暖める時

お互いが幸せになる。

このことを身をもって示したのがキリストである。

Shared Security の含意と新たな神仏複合

(宗教的多元論) の論理



蘭田

稔

京都大学名誉教授

私は宗教の立場からラディカルに生命観を問うことが、平和問題、環境問題、あるいは非武装、差別といった問題に対して、諸宗教が共通に基本とするテーマであろうと思っております。したがって、Shared Security 問題を共通の課題とし、私がいままでにさまざまな機会にお話しさせていただいてきたことを使いながら、「Shared Security の含意と新たな神仏複合（宗教的多元論）の論理」という題をつけさせていただきました。これまで WCRP が掲げてきました Shared

Security という言葉の内容の中で、特に最初に挙がっていました「Respect for Life」との関連で考えたいと思います。

いったい日本の宗教の文化として、神仏共存や神仏習合といったものが少なくとも明治時代に神仏分離が行われるまでは大きな伝統であった。それが何を意味するのか、どうして神仏が共存できたのか、ということを考えながら、日本人の霊的生命観というものを神道なりに、あるいは仏教なりに、両者が別のシンボリズムでありながら相補

ってきたということを、もう一度新しい目で考えることができないだろうかと思います。

その上で、たとえば、つい昨年ですけれども、

京都を中心に近畿地方のお寺さんとお宮さんが一緒にになって、一般の方々に巡拝、巡礼をすすめるという会ができ、約150の社寺が加わって活動を開始しております。そういう中で改めて神仏がどういう協力のし合い方が可能なのだろうかと思うわけです。どっちも仲がいいから、お寺さんにも来てもらいたい、お宮さんにもお参りしてもらいたい、ということだけではないと思うんですね。また、そうであってはいけないと思うんです。もっと深いところで協力し合い、結び合うことが必要ではないかと、今まで考えてきたことをまとめたもので、少しわかりにくいかもしれませんが、今日の話題にさせていただきますと思います。

まず神社新報に書かせていただきました、「世界宗教者の提言に想う」という寄稿を読ませていただいて、私の感想やこうした動機をご理解いた

だきたいと思います。これは昨年7月の記事で、あまりアップトゥデートでないかもしれませんが、読ませていただきます。

いつときマスコミの話題をさらった日本政府主催の先進国首脳会議も、心配されたテロなどの妨害も無くどうやら無事に三日間の日程を終了し、札幌や東京を中心とする大規模な警備態勢も空振りに終わったのは何よりだった。

ガソリンなど化石燃料の価格高騰と食糧危機など、われわれ庶民を直撃する喫緊の経済問題やアフリカ支援と北朝鮮問題もさることながら、当面最大の焦点である「地球温暖化」対策については、中国、インド、ブラジルなど温室効果ガスの主要排出八カ国も拡大会議に参加して「2050年までの温室効果ガス排出量の半減」という世界全体の長期目標を、すべての国に求めるという同意にこぎつけたことは、ともかくも大きな成果だった。

○ かという私も、一介の日本国民ながら今や「地球市民」の一人として国内外の平和や環境の問題に重大な関心をもつ立場から、日本人が大切に伝えてきた自然への畏敬という神道理念にもとづき他宗教の関係者とも実践的に協力するなかで、その一つ世界宗教者平和会議(WCRP)の日本委員会を通じて今回、洞爺湖サミットに先立つ七月二、三の両日に札幌で同委員会が主催した「平和のために提言する世界宗教者会議—G8北海道・洞爺湖サミットにむけて」にも正式参加してきた(会議の詳細については本紙前号を参照されたい)。

○ 今回の会議は、一昨年八月に京都で開催された「第八回世界宗教者平和会議」における『京都宣言』で提唱された「共有される安全保障」という理念をテーマに掲げ、環境・開発・核廃絶・紛争などの諸問題について、世界二十三国から集まった各宗教宗派の代表者ら約三百人が意見を交わ

し、その成果を「提言書」にまとめてG8首脳に訴えようというものだった。因みに、こうした世界宗教者の会議は、一昨年のモスクワ、今年のケルンでのG8サミットの折にも開催されて今回が三度目だったが、今度は日本の宗教関係者が主催するということで、まずはWCRP日本委員会があらかじめ「提言書」の原案を起草し何度かニューヨークの国際委員会との検討を重ねての草案を、起草委員会を中心に二日間の全体会議で練り上げたものだった。討議の最後に満場の拍手で採択された提言書は、閉会式で全文が読み上げられた後、大野松茂内閣官房副長官に手渡され、また翌日には国内外の参加者代表が首相官邸を訪問して福田康夫首相にもその内容をお伝えしたとのこと。

○ はたしてその成果が、肝心の首脳討議に活かされたかどうか実は定かではない。

今回のG8サミットに向けては他のさまざまな非政府組織(NGO)など諸団体も各方面から提

言しており、マスコミ報道の限りでは具体的な提言の反映を端的に窺い知ることはできないが、個人的な関心からすれば、われわれ宗教者の提言内容でその冒頭に掲げた「環境破壊と気候変動」に関連しての「森林面積拡大への取り組み」という呼びかけが、特に十六カ国の温室効果ガス主要排出国首脳会合の宣言で「森林」という項目に活かされたのでは、と思う。

○

それにしても、こうした国際会議に今まで何度も参画するたびに抱く一種の感慨を、このたびも一層強く持ったことは、やはり東西の宗教文化ないし文明の違いという根深い壁があつて、特にインド以東のアジア諸文化が共有するはずの広汎な霊的生命観を世界共通の宗教理念に盛り込むことが至難の業だということである。

幸か不幸か、今回の会議に当たっては提言書の原案起草には直接関わることはなかったが、それでも日本委員会直属の平和研究所を通じ、所員の

一人として間接的には草案の段階で瞥見することが叶うなかで当初の提言内容を大いに評価していたところ、その後、国際委員会とのやりとりで次第に内容の宗教的インパクトが薄められ、宗教者ならではの提言という期待が薄れてしまったという実感をまぬがれない。

○

その一つをいえば、一昨年の「京都宣言」に盛り込まれていた「平和の大義に背いてきたのは宗教ではなく、宗教者である」という文言を含む痛切な自己批判の引用が一旦は削除され、最終的には序文の補注に辛うじて残されたこと。

その二つには、当初の草案では、やはり「京都宣言」の眼目であつた「共有される安全保障」という英語からの直訳的表現を「共にすべてのいのちを守るために」と邦訳した一昨年の主旨を積極的に活かし、日本側の起草委員会がこの理念の宗教的意味合いを五つの特質、すなわち「全生命への畏敬」「全地球的一体性」「相互依存性」「将来

への責任」「総がかりの責任分担」に分けて簡潔に提唱した部分が削除され、その代わりの平板でインパクトのない説明文に終わったこと。これには個人的にも会議前と会議中の二度にわたって提出した修正意見も空しく草案復活にはならなかった。

しかし、せめてもの慰めは、「環境破壊と気候変動」の提言に盛り込まれた日本語の「もったいない」という言葉を使って物の使い捨てを諫める解説で、英訳では一旦削られた「神仏の賜わり物」という表現を婉曲的ながら復活させたことぐらいだろうか。

○

今後の課題として想うことは、この「共有される安全保障」という、何とも日本語として熟さない理念を、どうしたら東西ばかりか南北にわたる地球的課題に世界の宗教者が共に取り組む熱い宗教的理念の育て上げることができるか、ということである。」

以上ですが、このShared Securityに起草委員会の方々が苦勞されて盛り込まれた内容が人々から理解され、なおかつ宗教性のこもった言葉が見つかれば非常にいいと思います。その内容としての5項目について、宗教者としての共通の理論武装の手がかりにすることが極めて重要ではないかと思います。そんな思いをまず申し上げた上で、本論に入らせていただきたいと思います。

日本の長い宗教文化としての特徴は、仏教と神道の共存、もちろん儒教も道教もそうですけども、そうとう文明的な宗教文化が日本に入ってきていますし、実際、日本の仏教の中にも神道の中にも色濃く流れていることも確かです。最近、私の友人でDITAにいる歴史学の教授で、ベルギー人ですけれども、ヘルマン・オームズという人が天武・持統朝を中心に日本古代の宗教文化の中で、今まで神道・仏教と言っているけれども、道教のシンボリズムが非常に強いという実証研究を出版しました。そういうことから考えても神道と仏教

の二つということではなく、他にもさまざまな多
元的宗教文化が少なくとも断片的に入ってきて、
仏教側にも神道側にも取り込まれている。

今でもそうですが、お寺さんとお宮さんの共存
というのがあるわけですし、現に両方の協力関係
というのが、最近の動きにもなってきています。

ただ、私は神道の立場から、どちらかというとフ
ールドワークで現象的な捉え方をしています。
ですので、特に神仏習合に関連する歴史的な勉強を
続けてきたわけではありませんし、必要なことだ
け勉強することです。奈良先生や山崎
先生などの仏教の専門の方々にいろいろ教えてい
ただきたいと思っていますので、よろしくお願
いいたします。

さて最初に「神仏習合と神仏分離」というテー
マにしておりますけれども、その辺のところから、
少し用意してある文章を読みながらお話しさせて
いただきたいと思います。

宗教についての近代西欧的な常識からすると、
日本には古来奇妙な宗教文化の伝統がある。それ
は、西暦六世紀に仏教が伝来して以来、神道とい
う土着宗教と仏教という外来宗教とが「神仏習合」
という一種のシンクレティズム (syncretism 異質
な信仰要素の複合) を構成しながら、しかも互い
にそれぞれのアイデンティティを尊重してきたと
いう、いわば共存の伝統である。その歴史的原因
のひとつは、神道が元来、稲作文化に芽生えた素
朴な自然宗教であったことと、そのふたつには、
伝来した仏教もまたすでに多数の如来諸菩薩と護
法神からなる複合的な大乘仏教であったというこ
とがある。神道が先在する自然神と祖先神からな
る素朴な土着崇拜であり、仏教が深遠な思想と行
法を備える洗練された成立宗教であるにしても、
いずれも排他的でない寛容な多神教であったこと
が、その後の日本宗教史を特徴づける両教共存の
伝統であったといえよう。たしかに、一九世紀に
いたるまでのほぼ千年におよぶシンクレティズム

的共存 (syncretistic coexistence) における相互の関係は、むしろ仏教が主として神道を包摂する関係であつたといえよう。

ところが、1867年の明治維新による日本近代化へのプロセスにおいてナショナリズムを強化する必要から、政府が政治イデオロギー的に仏教を排除した神道を国教化する政策をとり、そこには私はカッコとして「神祇」と書いておきました。「神道」という言葉は、時代によつて概念の内包、概念が違いますけれども、少なくとも明治のときには、後に国教化される対象となつたのは「神祇」としか言われていないんですね。「神道」という言葉はむしろ教派神道について使われたんです。いわゆる神社を中心とする神道、現在言われている「神社神道」は「神道」という言葉を使っていないんです。学問的にも、「神祇史」と言つたんですね。「神道」というと、それは教派神道のことを言つたんです。

「承知のように「神道」と言えば文部省の管轄で、今で言えば宗教法人という扱いでした。「神道」という「教派神道」は、当時は最終的には「神道十三派」といった、今で言えば天理教や金光教や黒住教や、あるいは神理教とか御嶽教とか、そういう講社の形態をとつたり、あるいは思想家が教祖になつたりして、教会のような活動をした。そういう集団が一括して「神道」と呼ばれていたわけです。

神社は「神祇」と言われて、この「神祇」という言葉は本来は「天津神、国津神」という天神地祇を省略したものなんですけれども、要するに皇室と地方の各神社を指すわけですね。そういうことで、内務省の管轄で「神祇局」、あるいは「神祇官」というのが最初にできたのもご存知だと思えます。これは一つには明治維新が律令時代の古代の法制とか官制に戻ろうというので、日本の場合は七世紀、ご存知のように律令時代に太政官と神祇官というのを立てた。唐の制度は太政官

しかないんですね。太政官の下に、それに当たる省はあるわけですけれども。日本の場合には神祇官を太政官と並列して配置したんですね。ところが、神祇官はもともと管掌の範囲が狭いので、職員その他も少ないし、規模も小さかった。省よりも小さいくらいだった。ただ太政官と並列したのは、天皇直属という意味で並列にしたわけです。そういう意味での当時の律令国家時代の体制をもう一度、明治維新で復活しようというので最初、太政官、神祇官というのを復活させ、一方が神祇省になったり、そのうちに内務省ができ、内務省の下に入った。実態は神社のことを扱うわけですから、それほど大きな官庁になる必要もないし、実力もなかったということもあるんですけども。それでだんだん小さくなって、最後には神祇院というような言い方で戦争が終わるまで続いてきたわけですけれども、あくまで「神祇」なんです。ですから戦前に出た神道関係の書物、例えば歴史書でも、「神祇史」というように主として神社

を中心とした神社神道の流れを扱ったということでございます。もちろん神道学とか、神道史という言い方でもいいわけですけれども、例えば戦前でも日本史とか、宗教学の方から神道をまとめた中では「神道史」という言葉も使っています。例えば宮地直一先生などは「神道史」という言葉を使っています。ですから広く全体を括る言葉として生きていないということではないんですけれども、特に国家祭祀という形で国家的に国教化したのは、「神道」というよりは「神祇」ということで、カッコに入れたわけでございます。

そういう意味で「国家神道」という言葉はご承知だと思いますが、戦前にはありません。「神社神道」という言葉もないんです。これはアメリカの神道学者のホルトムという人が、本の中で「National Shinto」という言葉を使ったものから、これをGHQが21年に出した神道指令の中で、「Shrine Shinto」というのと、「National Shinto」という言葉を使って、日本語で初めて「神社神道」

とか「国家神道」という言葉が日本に導入されたわけですね。それまでは少なくとも日本では使ったことがないんです。今はもう歴史用語として「国家神道」という言葉を使っております。内容は神社の国家祭祀化ですね。神社祭祀のNationalizationです。

戦後における再度の国家近代化すなわち民主化の中で神道は、改めて国家的統制から解放され、全国8万2千におよぶ神社を主体とする本来の「神社神道」に立ち戻って今日に至っています。本来の神社神道と言っているのかどうかわかりませんが、とにかく神社は国家祭祀のコントロールから解放されたという意味で、そういうふうに使っているわけです。その意味で現在の神社は、伝統的な仏教寺院とともに全国の地域社会にはば例外なく共存して、今でも地域住民の習俗的な宗教生活を分担し合っているといえます。したがって、現代においても日本人のほぼ6割は、地域の守護神として神社の神道祭祀に参加し、他方で家族の死者供

養は寺院で仏教に依存するという二重の宗教生活を、別に違和感なく、ここが大事なんですけど、「違和感なく営んできたのが実態であつたと思います。」

しかしながら一宗教者の立場からすると、明治近代化における政治的な神仏分離は一種の強制的な世俗化、つまりSecurizationという結果を日本社会にもたらしたといわねばならない。そのために伝統的な神道と仏教のシンクレティズムの共存という宗教文化を破壊したばかりでなく、そこで培われてきた日本人の深い宗教感覚、つまり万物の生命的靈性への畏敬という感性をかなり喪失せしめたと考えざるを得ない。たとえば、現代は神道の神社も仏教の寺院も平等な関係で共存するけれども、かつてのように両者が協調して習俗以上の宗教的魅力を発揮するに至っておらず、いずれも世俗化した現代社会の精神的混乱に対して必ずしも適切な宗教的対応をすることができかね

ていると言わねばなるまい。しかも明治以来の西欧的啓蒙主義の影響で、法律上の規定では「宗教」が一般に排他的な一個人一信仰とみなされるなど、宗教文化をもっぱら個人の私的信仰に還元しようとする近代主義の風潮によって、従来の宗教的な宗教文化つまり、社会的な宗教複合のゆるやかな営みに混乱をもたらしたことも事実である。

これは論議のあるところだと思いますが、明治以来の宗教の概念、パーソナル (personal) なブリーフ (belief) というのが宗教である、あるいはパーソナルフェイス (personal faith)、そうあるべきだという教団宗教的な觀念が、共同体的な宗教の営みに対しても当てはめさせられていますから、共同体的に営まれる宗教、私はそれを「宗教文化」と呼んでおりますが、それをそのまま一つ一つの宗教として認めるということができなくなっておりますし、そういう個人の信仰という意識でなくとも営まれる宗教のあり方、それも個人の

信仰だというふうに戻元されてしまうんですね。

それで、例えば伝統文化財の問題、これは有形、無形、両方ありますが、文化財の中に当然含まれている共同体的な宗教文化は政教分離の問題で排除して、残った部分だけ文化財に指定するという、非常に不自然な文化財指定が今だに行われているという点もあって、特にそういう伝統文化という言葉の方をする場合に、非常に難しくなっております。実は今度、伝統文化活性化国民協会という財団法人で全国の神樂を取り上げようという動きが出ているんですが、これも文化庁の外郭団体みたいなところがあって、神樂というのは本来神様の祭りですから、神様の部分を排除した文化財とはどういうことだということになってしまっています。これは余談ですけども、そういう問題も抱えながら、一つの流れであります宗教文化、別の言葉で言うと共同体的な宗教の営みというものを明治以来、分断し、あるいは個人的還元にとらしていると考えると思います。

もちろん今の時代は個人主義で、個人が主体であるという、近代の無条件の人間観、あるいは人間尊厳論がありますから、それはそれなりに大事なんですけれども、そのことで長い伝統のある宗教文化がうまく読み込まれないというか、伝えられないというのは、やはり一つの問題ではないかと思います。それも含めて今申し上げた神仏習合と神仏分離というところでは、そういう変遷の中で神仏習合のあり方が明治から破壊され、戦後さらに破壊され、しかしお宮のほうも国家祭祀というNationalizationに（強制的）な形で取り込まれたことで、結局、明治までの日本的な豊かな宗教性というものが、Seculizationにさらされて、本来の十分な宗教的インパクトを失ったという言い方をあえてさせていただきます。

明治までの宗教感覚を言い換えて私なりに「万物の生命的靈性」という言葉を使いました。それに関連して多少参考になるかと思ひまして、中外日報の私の断片的なエッセイを見ていただきたい

んですが、「病害虫にも慰霊の神事」というのがありますね。「万物の霊を尊重」と書いてあります。これは「時感断想」といって、その時々テーマを材料にしながら書いてほしいということで、「ミートホープ」という食肉業者の冒涇極まりない不祥事が」というふうに書き出してあります。こういう偽ブランドで金儲けをしようなことを平気とする食肉業者が出てくるということ自体、日本人が本来持っていた、家畜を大事にする、家畜の霊も大事にする敬虔な生命尊重の気持ちなど、どっかにすっ飛んでしまっている、という意味で書いたのが「万物の霊を尊重」という題の第三十五回のコラムです。その三段目に、

「わが国の宗教文化には、神も命、人も命、万物も命という靈的な生命世界に生かされて生きることの神聖感覚が息づいてきた。日本の古典神話には『天地』という大生命の器に神々が生まれ、国土も万象も生まれて、すべてが『産霊』という命の靈性を持ち合わせていることを語っている。伝

来して土着化した日本仏教も、生き物の有情ばかりか木石の無情まで『仏性』なる靈性ありと徹底してこそ豊かな慰靈供養の習俗を育ててきた」

その後ちよつと批判的ですが、こう書いています。

「造物主と人間にしか靈性を認めない海外の常識からは全く理解されないが、日本の稲作は単なる食料生産ではなく稲魂の豊穡を祈り感謝しての文化の営みである。今でも田植の神事や収穫感謝の祭が全国各地にあり、稲種を神靈とする正月行事ばかりか農耕具さえ命と心得て年取り行事をする習俗さえある」

これは秩父でもまだ残っているんですけど、正月に農耕具の年取りつていうのがあるんですね。一日、道具を祭るんですけれども。そういう習俗さえある。

「インドに由来する『放生会』も殺生の罪穢れをあがなう儀式として各地の社寺に伝えられ、漁撈なりわいを生業とする漁民たちも魚類供養を欠かしていない。土曜の丑の日に鰻屋の鰻供養もよく知られる

が、針供養や筆供養、人形供養さえ盛んである。おそらく日本の大学だけかもしれないが、医者を養成する医学部や実験動物を使う研究施設では献体した人や動物の霊を祭る祠や碑を備えている例が多い」

これは実際に目にする事です。その後ですが、「最近教えられた事例に、福島県の会津地方では稲作で駆除する病害虫の霊を慰める神事を行い、立派な供養施設さえあるという。人が生きるために殺さねばならぬ万物の命に敬虔な祈りを捧げる文化を、今こそ大切に考えたい」

ちよつとこれは少し大げさに書いているところがあるかもしれませんが、例えばこういう感覚が少なくとも明治までの人、あるいは農民や漁師、あるいはお医者さんを育てる医学部や、東京農大でも実験動物の供養塔があつて、そこにスナック菓子なんかが供えてあります。そういう感覚ですね。それを私は、かつて日本人が共通して持っていた靈性感覚の例を指摘した文です。

次に、これは私自身がいたい神仏というものがどういうあり方をしてきたんだろうかというものを学ぶ意味で、断片的ですけれども、比叡山の山麓にある日吉大社の調査といえますか、まだ本当の意味で調査研究とまでは口幅つたくて言えないんですけれども、ぼちぼちやっているということの一端を例として出したものです。

そうした歴史の実態の典型的な事例のひとつに、神仏習合と神仏分離という両方の歴史を体現しているのが日吉大社です。そうした典型的な事例のひとつに、日本の古都・京都にほど近い比叡山に九世紀以来栄えた天台宗本山の延暦寺と、その山麓に鎮座する日吉大社との伝統的なシンクレティズム的關係 (syncretistic relationship) があります。日吉大社は本当は比叡大社なんです、本来は比叡の神ですから。比叡山という言い方と区別するために、あえて日吉と呼んでいるわけです。東京の赤坂にあるのは日枝といって日と枝を使っていますね。この日と枝が古事記には「日枝山」と

いう意味で使われています。そういう意味では古い山の神そのものですね。

日吉大社は、先史時代から比叡山に鎮まる山の神で山麓から琵琶湖に及ぶ地域住民の守護神でしたが、九世紀に地元出身の伝教大師・最澄が唐の天台仏教を学んで比叡山に延暦寺を建立してから、日吉山王としてその守護神となり、その後明治維新の十九世紀末まで1000年の間、天台宗の守り神として一山の僧侶たちが神職たちとともに手厚く奉仕してきた「宮寺」でした。「宮寺」とは、お宮であって、同時にお寺でもある。つまり、お坊さんもそこに奉仕するという形が近世までたくさんあって、日吉大社もそうですけれども、京都の祇園社もそうです。今の八坂神社もそうですし、石清水八幡宮もそうです。要するにお宮でありながら、神仏習合の形をとっているわけですから、いわゆる社僧、お坊さんもそこに勤める、奉仕するということ、二重構造ですね。それを宮寺と通称しております。

「山王七社」と称された七柱の祭神には、それぞれ薬師如来、釈迦如来、阿弥陀如来などの本地仏が当てられるという神仏一体の崇拜対象となり、神道の祭祀とともに仏教の法会も同じ神前で執行されてきた。

よく昔から言われていることに、「山の三仏」、「麓の三聖」という言葉がありまして、山の三仏というと、東塔、西塔、横川の三道場に三仏が祭られている、薬師如来、釈迦如来、阿弥陀如来ですね。これが「山の三仏」。「麓の三聖」というのは、東本宮、西本宮、そして聖真子という宇佐から勧請した社ですけれども、この三社がそれぞれ対応して本地仏をもって、山麓に祭られている。その他にももちろん四社あって、含めて山王七社というんです。

日吉大社は伊勢神宮よりもはるかにたくさんの方々を祭っておりまして、伊勢神宮は所管社まで含めると125社あるんですけれども、日吉大社の場合は山王七社といって上七社、中七社、下

七社ともありますけれども、山王二十一社といってこれも上、中、下とあって、さらに山王百八社といって、上百八社、中百八社、下百八社というふうに、数える大変な数です。それが比叡山麓の坂本という町で、今は大津市に入ってしまったけれども、その上坂本、下坂本。上坂本というのは比叡山の山麓に近いほうですけれども、下坂本というのは琵琶湖の近くで北国街道が通っている、その浜に展開する集落が下坂本ですけれども、その一带に小さな祠も含めて霊蹟もたくさんあって、実は比叡山がやっている千日回峰行ではその霊蹟を巡拝しているわけですね。一晩で40キロ、300以上の霊蹟を歩く。山上の霊蹟はもちろん、山麓から浜にかけての日吉大社系の霊蹟も細かに回っております。

それから中世から近世に実は日吉大社側でも秘密社参というのが、多分、千日回峰行を模して、やはり一晩で120くらいの坂本の霊蹟を夜中歩くというのがあって、そのリストも残っております。

す。私も何年も前にたどって坂本の町を確認して歩いたんですけれども、かなり残っているのですびっくりしました。戦後も一回復活しかけたんですけれども結局長続きしませんでした。今お宮では、巡礼が流行っているから、もう一度復活したいんじゃないかと言っているんですけどね。それは修行する人たちが、琵琶湖で禊してから一晩で回る、それを10日以上続けるという秘密社参というのがあります。そんなふうに、いわば山上の天台仏教と麓の山王神道がほとんど一体となって生きてきたということです。

僧侶も神職もまた地元の住民たちも、この神々を諸仏ともして何の違和感もなく、土地の鎮守であり山王権現（本尊の化身）ともして一緒に手厚く崇拜してきた。ところが、明治国家の神仏分離政策の下でこうした「宮寺」の体制が徹底的に破壊され、社僧が追放されるばかりか仏教色のある一切の施設や装飾が大社の境内から破却されて、その後完全に延暦寺から独立した神道様式の神社

になったのが現在の日吉大社です。

日吉大社の境内は、ものすごく広いですけれども、かつては仏教色のある施設やお堂がたくさんあって、それも絵巻に残っているもので、絵巻に沿ってその配置をだいたい復元できるんですね。ただ、そこにはもう何もない。仏教関係の施設は全く排除されていますが、それでも場所はほぼ確認できます。特に面白いのは、主な社殿の前に彼岸所というところがあって、多分そこに社僧が普段待機しているというか、日吉大社では宮仕といって、宮に仕えると書いて記事に残っているんですが、それはお坊さんなんです。社僧だったんです。

実は社殿の構造も、日吉づくりというのは独特でして、下殿というのを持っています。社殿は少し高くなっていて、下に部屋があるんです。下殿といって、下の殿と書きます。現在でも残っています。実は宮仕という社僧が仕えるのは下殿だったんだろうと思います。上殿は社家が神道

的なお祭りをする。その祭壇のすぐ下に一種の祭壇がありまして、たぶん本地仏をそこに祭っていて、実際には彼岸所に生活しているか奉仕している社僧たちが法会、仏教祭式を行うために、上下二段の二階建ての社殿になっています。これは全国にないですね。東本宮、西本宮、日吉石、あと四社もそういう形式じゃなかったかな。そういうことで、七社全体が下殿祭祀ができるような比叡独特の社殿形式で、国宝に指定されている。これが神仏一体であったという、その形です。

ところが明治維新になって、神仏判然令が出て、一番最初に反応したのが実は日吉大社の社家で、樹下という社家の一党はですね、比叡山に仏教色を排除するという通知を出して、許可が下りないうちに、社殿の中のあらゆる仏教的なものを破却して、燃やしたりしちゃうんですね。一番激しいと言われているんですね、廃仏棄釈の形が。これはもちろん江戸中期から幕末にかけて次第に高まっていた廃仏思想が、国学を中心として、あるい

は儒学の人たちも仏教色を非常に非難した。神道家、それから儒教の人たちが次第に仏教を排除しようという機運がずっとあるわけで、会津なんかは江戸の中頃に廃仏棄釈をやってしまった。それから神主の神葬祭というものがあります。神主は仏教葬でなければいけなかったんですけれども、江戸幕府の規制で、神職といえども死者を供養する、葬儀をするのには仏葬でなければいかんという、それをだんだんに江戸中期から崩していくんですけれども、それで神職自葬というのが許可されるのが幕末直前で、だんだんそういうふうにして神葬祭というのが増えてくるわけなんです。いずれにしてもある意味で社家側が相当お寺さんの管理に反発しているんですよ。比叡山なんか特にそうで、山上の支配が日吉大社に及んでいますので、多分、社家はかなり鬱屈してたんだと思うんですけれども。それでお上からこういう判然令が出たんで「それっ」と実行しちゃったのが日吉大社だった、そういう意味で廃仏棄釈の一番激しか

ったところと言ってもいいだろうと思います。

さて第二次大戦後には、神社すべてが国家統制から解放されて、仏教寺院と平等の宗教活動ができるようになります。日吉大社も改めて延暦寺との伝統的なつながりを一部復興できたのは、注目すべき現象です。今では毎年四月十四日の例大祭には延暦寺の天台座主をはじめ主な役僧たちが神事に参列し、実際に五色の奉幣と言って、五色の御幣を天台座主自らが神前に供えるという神事を復活されました。役僧が10人くらい例大祭に参列して、五色の奉幣を行って、その後神殿前で般若心経を唱えるというのが復活しております。戦争中はそんなことできなかったわけですね。国家祭祀時代はできなかったわけですけども、少なくともその部分は復活して、天台座主が敬虔なお姿で奉幣をされるお姿を、私も二度、三度拝見しております。

それから毎年の五月二十六日には「山王礼拝講」というのが復活したんですね。西本宮の神楽殿、

舞殿と言いますけれども、普段は神楽を奏するところ、ここで実は天台座主以下、山上の役僧たちと、まだ入って間もないような修行僧たちが、多分法華八講を、ご神前で執行する。これが毎年五月二十六日に、ほぼ一日がかりで行われますけれども、これも見ているとかなり興味深い。これの由来というのが大変面白い。時代は中世のいつ頃だったか忘れましたけれども、あるとき社家が朝、日吉大社の西本宮、つまり今の本殿に朝早く奉仕で上がったら、比叡山全体が冬でもないのに山が枯れて真っ白になっている。それでびっくりして神様にお伺いを立てたら、日吉の神からお告げがあつて、実は私はここにいるのが嫌になった。だから大和に帰りたいと。これは実は天智天皇が大津に都を移したときに、三輪山の神を合祀しているんですね。それが西本宮になっていて、だから奈良へ帰りたいという。なぜかというと、山上の坊さんがあまりにも怠けているからだ。私がここにいるのは修行を見守るためなのに、肝心の山

上の僧侶たちが修行を怠っていて、もう嫌だから帰ると。そういうお告げがあつて、その社家がびっくりして山上道場に注進した。そうしたら今度は山上の坊さんたちがびっくりして、それこそ履物も履かずに裸足で山を駆け下りて、ご社殿の前へ行つて「どうぞ帰らないでくれ」「私たちは一生懸命修行します」と。そこで急ぎ神前で法華八講をやつたという、微笑ましいというか、そういう話が残っています。

それほど日吉大社の神と比叡山とが一体だったことを示している話で、それがまた今度は復活しているという意味で非常に面白い例です。神仏習合のときと、神仏分離と、戦後になつて、ある意味では政府のコントロールが外れた神社と、お寺さんとが新たな関係をもう一度考え直すというか、元に戻ることが可能かどうかということは別にして、そういう関係に今きているということの一つの例としてご紹介しました。

その次ですが、こうして日本では、主には神道

と仏教という複数の宗教が同一の共同体の中に共存し複合することができるといふ伝統的傾向が未だに消滅していない。その根本的理由の一つに、元来日本人の信仰が個人を主体とするよりも強く共同体を単位に営まれてきたといふ宗教文化の特徴がまず挙げられるのではないかと思います。

日本では、古代から一種の血縁関係の共同体、kinshipとか、clan & extended family と言つてもいいかもしれませんが、いろんな形で「氏」という単位があつた。この「氏」というのは血を同じくするという意味で「うみぢ」からきたといふ説もあるんですけども、もちろんシンボリックな擬制血縁ですから、それほど切り難いつながりだという意味で、血縁的に表現したシンボリズムですね。そういう意味で血縁関係の共同体と、特に中世から農民の間に発達した地縁の共同体、residentialなcommunityあるいはlocal communityとが歴史を通じて強固に存続し、両者が一種の共同体宗教を根強く営んできた。私の言葉ではcom-

munal religionという言葉を使います。

宗教は少なくともなんらかの形で共同体がなくては存続しません。ところが、この共同体と宗教という言葉を入れ替えてみると、宗教の形が変わるというか、社会学的な意味で宗教のあり方も変わるんですね。religion of communityとすると、これは本来ある共同体、生活共同体、それが血縁的でも地縁的でもかまいませんが、いわゆるcommunityですね。communityが当然のように宗教性を持っているという意味での共同体の宗教。これを別の言い方をするとcommunal religionと私は言っているわけですが、それと一方では宗教であってこそ共同体を作るという、つまり教団ですね。religious communityというふうにも言いますけれども、同信者集団、教団として宗教が営まれるという形態。私は宗教には大きく分けてこの二つのタイプがあると思います。一つは共同体あつての宗教、共同体がそのまま宗教的な単位である。これは主には原始宗教から古代宗教に最も

特徴的な宗教で、社会から教会が独立していない、社会がそのまま教会の単位になっている。教会という言葉を使うなら、それが宗教の単位だということです。私はこの共同体がそのまま宗教の単位だというcommunal religionというのは、別の言い方をすると宗教文化という言い方が可能だろうということ、しきりに宗教文化という言い方を使っているわけです。

それに対して、religious community、つまり宗教が教団によつて形成されるというのは、別の言い方をすると、civilized religionでもいいと思います。文明の中で生まれた、宗教が宗教らしく独立した段階での宗教のあり方、つまり古代文明から生まれた、神話や儀礼といった伝統的な宗教文化を批判し、否定して、宗教的天才なり達人的な教祖が新たに教えを立てて、それを信ずる方たちが弟子、あるいは教団をつくる。これは古代の文明時代から始まっているんです。その文明というのは、civilization、要するに都市なんですね。

都市文明であって、農耕文化ではないんです。これは哲学もそうです。哲学は神話を批判して、哲人たちが出てきた。これも古代都市社会の中で初めて出てきた個人的な哲学、思想で、これは古代ギリシャでもそうですし、中国の黄河長江文明もそうで、諸子百家もそうです。ですから宗教も都市的な文明の上に成立すれば典型的な教団宗教で、これが世界宗教とか普遍宗教と言われる。つまり、地域の文化や風土や言語にとらわれず、普遍的な人間の救済に関わるわけで、当然universalismなんです。

農耕文化のほうはparticularismなんです。それに対して教団宗教は本来universalismですから、地域や狭い言語の世界を脱出して布教する。要するに地域の人間だから救われるとか救われなとかの問題ではなくて、どんどん外へ広がっていく。また、宣教や布教が一つの宗教の営みですが、宗教文化であるcommunal religionは布教の動機がないんです。その中に生まれ育てばそれでいい

わけですから。だから同じ「宗教」といっても二つは大きく違う。そういう意味での共同体宗教という言葉を私は使うんですけれども、そういう共同体が実は宗教の主体、担い手であって、個人が宗教の担い手じゃないんです。

神道は土着の自然宗教に由来し、その神々はそうした共同体の守護神——氏神 (clan gods) または鎮守 (community gods)、あるいは氏神鎮守 (local-clan gods) として神社に祀られてきたのです。これに対して、仏教は本来創唱宗教であり、文明宗教であり、世界宗教であり、教団宗教であるということです。したがって個人的入信を要する教団宗教であつたわけですが、六世紀に日本に伝来した当時から、やはり土着の神々と同様に諸仏諸菩薩が天皇家や豪族たちclanの守護神として受容された歴史があります。以来、日本仏教は、「出家」という個人的入信を受け入れる一方で、「国家鎮護」としてnational guardian sectsであつたり、clan templesやcommunity

templesという共同体に属する仏教として全国的に普及しながら、中世からはもっぱら日本人の来世信仰の面で死者の葬送や供養といったファミリー単位の祖先崇拜 (ancestor worship) を主に分担して今日にいたっている。いいかえれば、多くの日本人は共同体 (clanやlocal community) のメンバー (member) として神社の祭神に生前の幸福を祈り感謝しながら、同時に家族の一員 (family member) として仏教寺院で仏による死後の救済を期待するという二重の宗教生活を営むようになった。本来は個人的な信仰と修行の道場であるはずの仏教寺院も日本社会に土着化するなかで、神道の神社とともに共同体宗教を分担するようになったのであった。かくして日本における神道と仏教とは、それぞれ単一の排他的信仰として個人なり共同体なりを独占してきたのではなく、同一の共同体の内部でその宗教文化を相補的に分担してきた。したがって日本の社会には、排他的な宗教集団として神道村とか仏教村という宗教共

同体 (religious community) も存在しなければ、神道氏族とか仏教氏族といった宗教別の共同体 (clanやfamily) も存在しなかった。だからこそ、神仏習合という一種のシンクレティズムも共同体宗教として充分に成立可能であったのである。

もうひとつのシンクレティズム成立の理由を挙げるとすれば、古来の日本文化に内在するカミ観念とそれにとりまわす賓客歓待という祭りの構造に言及すべきであろう。

古来の神々は豊かな自然や万物に靈性を感じ得る日本人古来のアニミズム的世界観 (animistic worldview) に由来するもので、神秘的印象の強い太陽や月の満ち欠けを始め、水源の深山幽谷や植生豊かな森、生活をうるおす河川や近海などの自然現象にひそむ靈的存在を神々として発見し、また英雄や先祖の霊をも神として崇拜することから、様々な神話にもとづく祭祀の聖地としてコミュニティ (community) 近くに自然神や祖先神が鎮まる神社を建立してきた。そうした祭神たち

は、人々が犯す罪や穢れを忌避する聖なる存在ではあるけれども、また人々の敬虔な奉仕と熱心な祭りなくしては祭神の権威や効験も高まらないという意味で、神々はかならずしも絶対存在ではなく、むしろ神と人とは相関的関係にあるといえよう。たとえば、鎌倉時代の1232年に幕府が制定した「貞永式目」という武家法では、その第一条に「神ハ人ノ敬ニ依リテ威ヲ増シ、人ハ神ノ徳ニ依リテ運ヲ添ウ」と唱えて、当時の武家たちが支配する領地の神社を先ず大切に祀ることを命じている。こうした神と人との近しい関係は、今でも日本人のあいだに支配的である。

しかも、そうした共同体宗教が行う祭りには、常に若々しい威力に満ちた神霊をコミュニティの内部に迎え入れるという、いわば賓客歓待（柳田国男）という基本的なモチーフないし構造がある。普段は村（village）の近くの山麓の深い森に隔離された神社に鎮まっている祭神が、祭りのときは神輿などに乗って生き生きと出現し、これを賑や

かに賓客（まれびと）として歓待する。コミュニティの外から内にできるだけ威力ある神霊を迎えたいという「まれびと」への期待こそが、さらに都の偉大な神々ばかりか、それをさらに超越する仏や菩薩をも同じコミュニティの内部に迎え入れる態勢でもあったということが、やがて神仏共生の共同体宗教が成立する根本原因のひとつでもあったのである。

そこに常在するという感覚ももちろんあるんですけど、その鎮座する形でも見えない存在なんです。普段隠れている存在なんです。お祭りの時だけ出てこられる、出てきたってお神輿の中に入っているわけですから、ご神体は全然見えません。よくスペインなどヨーロッパでは祭礼のときになると、教会の聖母マリアの像がそのまま鎮座して、街を回る。神様なりそういうものが目にできる形で巡幸しますけど、日本の場合には神様が街に現れたり、人前に現れたりしますけれども、

しかし見える形では出てこないんです。神輿という中に入っているだけなんです。

そういうことで、常に神を外から内に迎える集落の形式は、一つの開放性を持つているんで、村の繁栄のために、あるいは村がまた蘇るために威力のある神様や仏様を迎えるという、そういう意味での開かれた構造というのを実は持っているんです。決して閉鎖的ではないんです。だから威力のある神様、威力のある仏様は、遠慮なくというと変ですけども、集落の中に迎えるという形があつて、いわゆる諸教の仏教や神道の遠くの神仏もいろんな形で境内に入ってきている、あるいは村の中に入ってきている。いずれにしてもそういうふうにして、村やコミュニティが主体なんです。決して一つの宗教に独占されていないんです。そういう構造は、神仏共存を受け入れるコミュニティの原理ではないかというのが一つの考え方です。

その次ですが、これは本当に私は口幅ったくて

言えないようなお話なんです、もう一つ大事なのは大乘仏教の性格の非常に包摂する、しかも *reality-inclusivism*、*inclusivism* という言葉はないんですね。 *Inclusiveness* という言葉はあるけれども。ちょっと無理に使ったわけですけども、そういう性格は非常に大きいだろう。特に神仏習合を可能にした仏教側の論理的な発展というのは、特に法華経を中心として展開した部分が大きいだろうと思います。

それから、真言系の両部神道の考え方というのも考えなければいけないですけども、何よりもやはり法華経から展開した、いわゆる本覚門の論理というのが神仏習合を可能にし、場合によっては、もちろんこれは仏本神迹なんですけどね。

つまり仏が本地で、神様が垂迹だと、それを可能にしたんですけれども、それがだんだん高じてくると、同列になつて、逆に神本仏迹という逆本地垂迹説まで登場してくる。これはもちろん室町以降です。かなり遅い。十五世紀以降くらいでしか

ない。

とにかくそういう二つのものが、本迹の關係で、理論的にも展開してくる。それが法華經系で言えば、天台神道という言葉も最近言われますけれども、同時に神道側で言えば山王神道ないし場合によつては江戸時代にくると山王一実神道というふうな言い方で言います。山王一実神道になると、これはたとえば徳川家康が東照宮の権現になるというような天海僧正たちの教説です。天海僧正はご承知のように信長が比叡山を焼き討ちした元龜二年、1571年の徹底的な破壊から、もう一度再興するのにものすごい力を發揮した人です。同時に家康の懷刀になって、金地院崇伝と共に宗教的な助言を家康にしたコンサルタントでしたし、西の天照大神に対応して家康公を東の東照権現というふうにしたのは天海僧正です。比叡山に対して東叡山を建てたのもそうですね。そういう江戸幕府の宗教政策に大きな影響を与えたのが天海僧正です。

その流れの中で私は比叡山という天台仏教が、日本の宗教史上、日本の宗教文化に非常に大きな豊かな文化を開かせた拠点の筆頭だと思んです。そういう意味での論理として、どういふものがあったかといいますと、実は法華經は天平時代から入っているわけで、聖徳太子の三經義疏の中にも法華經が入っているくらいですから、法華經の流れというのは日本の古代の中でも綿々としてあるわけですけど、ただ神仏習合という問題に対応する読み方というか、その一つの参考になるのは、最澄が法華經を中心にわざわざ天台山で学んで帰ってきたときの一つのヒントとして、もう末世だと。要するに仏教流の時代下降観です。ね、末世法滅のときと、安樂行品の中に、釈尊がお亡くなりになった後のことについて文殊菩薩がいろいろと問うて、それに対する回答として法華經の安樂行品の中にそういう論理が出てくるわけですけども、そういう意味で日本はこれから末世、末法の時代を迎える。末法の時代を迎えれば、衆生は

縁無き衆生で、自力で仏になれない。そういう不幸な時代に衆生を救わねばならない。そこで救うための方便として、仏が神になって現れるんだという論理が法華経にも悲華経にも出てくるんじゃないか。

以前、奈良先生に悲華経についてちよつとお教えいただいたてありがたかったです、悲華経をまだ私は読んではいませんが、中世文書に「山王絵詞」というのがあって、その中にすでに悲華経を引用して、末法の時代には釈迦自身が神となって現れるという教説を載せている。だから日本の国に現れた神は、当然釈迦が現れた形である。単なる権現ではなくて、その時代だからこそ神として現れたんだという。それを山王権現に見立ててるんですね。それが山王絵詞なんかにも出てくるんです。「悲華経に言っているけれども、こんなだ」と。だから山王権現はそのまま仏なんだと。仏が神のようになって当然のように出てきているんであって、単なる一般論的に仏が本地で、神が

垂迹だというよりもっと一歩突っ込んだ形が、鎌倉時代にはすでに出てきていることですね。

そのために大事なものは、天台教学における三諦即一論とか一心三観論ですが、まさに諸法実相の証得の仕方の中の論理で、要するに現実そのままが仏の世界である、現実そのままが神の世界であるという、本来であれば現世否定であったのが現世肯定という形で仏教の世界が包摂されてくる。そうすると現に神様でいても、それはそのままでいいんだと。それは神としてたとえ仏者の立場でも神様として祀ったつていいんだし、それに願いを込めてもいっこうに差し支えない。これは末世滅法のときだからこそこれなんだという、一つの時代観が大きな影響を与えていると思います。

実は日本宗教、特に仏教と神道に非常に詳しい、アラン・グラパールという人がいるんですけれども、その人がかつて日吉関係の文献を非常によくあたって、特に「日吉本記」という漢文調の文章の表現の仕方、これはある意味では漢詩のような、

日吉の縁起を漢文で書いてあるものなのですが、これは縦から読んでも横から読んでも文章になっているんですね。もつとすごいのは、その周辺を円を描くようにして読んでも読める。そういう面白い文章を見て、これが一つの神仏習合の形ではないか、つまり記号で表すキュービズム、文字で表すキュービズムではないかというんですね。つまりピカソみたいに、平面に立体的な絵をどう描くかというのがキュービズム、近代絵画の一つの発展です。つまり物のリアリティというのは、立体的に複眼的に見なければ得られないのではないか。だから平面のものを平面の絵にしたのではなく、平面を立体化して本物のリアリティに近づけようというのがキュービズムですね。で、グランプールはそういう意味では文字で表すキュービズムがここにあるのではないかと論文で書いたのです。これは大事だなと思ってちょっとご紹介させていただきます。

最後の試論というところに移ります。要するに

神仏複合というのは、単眼ではなく複眼で見るリアリティ獲得の方法という考え方があって、いかと思うんですね。我々はものを見るときに、一つの目で見えるのではなく、必ず二つの目で、複眼で見る。複眼で見るからリアリティを獲得できるという論法がもしあるとすれば、まさにキュービズムであって、一方は神として見る場合もある、一方は仏として見る場合もある。この二つが、あって深読みすれば、実は日本人の捉え方の論理ではないかと思います。

それで、西行法師は十二世紀の歌人ですが、晩年、伊勢に住んで、「柳葉に心を掛けむ木綿紙垂て 思へば神も仏なりけり」あるいは「何ごとの在しますかは知らねども かたじけなさに涙こぼるる」と歌っています。

西行は僧侶と言えるだろうと思いますが、北面の武士から出家して、歌人としても大変な業績を残しているわけですが、同時に旅の詩人でもあるわけです。そういう人が「思へば神も仏なりけ

り」と堂々と歌にしている。まだまだ他にも例はいくつもあるんですけれども、例えばそういうことですね。

最後に結びですが、そういう意味であらためて神社とお寺、あるいは今までの仏教と神道の共存というか、習合と言いながら、それぞれアイデンティティを持つてシンクレティスティックに共存している。それをニューシンピオーシスという言い方をすることもあるんですけれども、共棲ですね。共生（ともいき）と仏教でよく言いますけれども。そういうアニミズム的な、万物に霊がある、それを祀るというアニミズム的な神道の観念と、徹底した意味での悉有仏性論という、これはやっぱり二つの目でリアリティをつかむ、その場合のリアリティというのが霊的な「いのち」、いのちの霊性という意味で、実像を結ぶ一つの可能性としてあらためて捉えることができるのではないかということです。

同時にもう一つ、これは生命科学の問題ですが、

客観的なfactとして生命科学がいまどんどん進んでいますから、ecologicalなfactというのが、客観的なfact、事実として我々は受け取らなければいけない。しかし同時に我々の実存的な生き方の中で「いのち」という言葉に私を変えていますのは、そういう実存的な生き方は、むしろsubjectiveなリアリティの問題で、宗教というのはリアリティの問題であって、factではないと思うんですね。

この二つを踏まえないければ、本当の意味での我々の提言にならないだろうと思います。だからリアリティばかり強調して、長足の進歩をしている生命科学の「生命」のあり方、これはecological factです。遺伝子的にも、つながりのある生物という意味でのecologicalな生命科学の事実として突きつけられるものに、目をつぶるわけにはいかない。むしろそこに、意味のある生命の捉え方がある。これは事実として捉える、だけど我々が生きているというレベルでの実存的なリアリティはまた別だ。この両方を踏まえたtruth。factと

realityを踏まえて、目指すものはtruthだ。そういうfactとrealityを複眼的に踏まえて、両方のバランスをきちつとりながら、しかも見えない神秘への畏敬を忘れない。それをめぐる宗教的な実践はあるはずで、それが我々宗教者が目指すtruthだと思っています。factとrealityとtruth、つまり事実と現実を踏まえた真実の求道という宗教ならではの論理、これを弁証法的に位置づけることは可能ではないかと思う次第です。

平和大学講座出席者&執筆者紹介

住 明正 (すみ・あきまさ)

1948年岐阜県出身。1973年東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程修了。東京管区気象台、気象庁予報部電子計算室、ハワイ大学気象学教室助手などを経て、1985年東京大学理学部助教授に就任。1991年東京大学気候システム研究センター教授、1994年同センター長就任。2004年4月大学の法人化に伴い、東大全校の新しい動きとしてのAGS (Alliance for Global Sustainability) の推進を図るAGS推進室長を務める。2006年8月、東京大学

地球持続戦略研究イニシアティブ統括ディレクター就任。『熱帯大気・海洋系の相互作用の研究』で藤原賞受賞。著書に『地球温暖化の真実』(岩波書店)、『さらに進む地球温暖化』(ウェッジ選書)、共著書に『岩波講座地球惑星科学』などがある。

眞田芳憲 (さなだ・よしあき)

1937年新潟県出身。1964年中央大学大学院法学研究科博士課程修了。1974年教授。1983年中央大学法学部長。1990年日本比較法研究所長。元法文

化学会理事長。地域文化化学会理事長。現在、中央大学名誉教授。中華人民共和国政法大学比較研究所(北京)客員教授。立正佼成会評議員。庭野平和財団理事。WCRP日本委員会評議員、平和研究所所長。主な著書に『イスラーム法の精神』『平和の課題と宗教』『日本人のためのイスラーム入門』ほか多数。

佐藤純一 (さとう じゅんいち)

1939年福岡県出身。1962年東京大学工学部冶金学科卒業。1969年同大学工学博士。19

67年昭和電工株式会社入社。1969年フランス政府給費留学（パリ国立鉱山大学）。1990年日仏クラブ事務局運営顧問。1992年東京大学大学院工学系研究科寄附講座教授。1998年財団法人次世代金属・複合材料研究開発協会知的材料・構造システム研究開発センター長。現在、東京大学人工物工学研究センター客員研究員、拓殖大学日本文化研究所客員教授、国際メタテクニカテクノロジー研究所長、WCRP日本委員会平和研究所所員。主な編著書に岩波講座「現代工学の基礎シリーズ『社会・技術相関』（共著）ほか多数。

菌田稔（そのだ・みのる）

1936年東京都出身。1960年東京大学文学部宗教学科卒業。

1965年同大学院宗教学博士課程修了。1981年國學院大學文学部・同大学院教授。1989年秩父神社宮司拝命。1991年京都大学教養学部教授。1993年同大学総合人間学部・同大学院人間環境学研究科教授。1994年埼玉県神社庁庁報編集室長。1998年埼玉県神社庁長。2005年神職身分・浄階特級。京都大学教授退官に伴い、名誉教授の称号。2001年神社本庁理事。現在、秩父神社宮司。社叢学会副理事長。神道国際学会会長、神道宗教学会、日本宗教学会、埼玉県宗教連盟の役員を務める。WCRP日本委員会平和研究所所員。主な著書に『祭りの現象学』『神道—日本の民族宗教』『神道の世界』『文化としての神道』ほか多数。

奈良康明（なら・やすあき）

1929年千葉県出身。1953年東京大学文学部印度哲学梵文学科卒業。1956年同大学院、印度哲学科修士課程修了。1956（60年）カルカッタ大学大学院比較言語学科博士課程留学。1960年駒澤大学仏教学部講師。以降、助教授を経て教授。同大学の学長、総長を歴任。2000年定年退職。現在、東方研究会常務理事、駒澤大学名誉教授。文学博士。WCRP日本委員会平和研究所所員。主な著書に『釈尊との対話』『原始仏典の世界』『仏教と人間』『観音経講義』『般若心経講義』ほか多数。

山田經三（やまだ・けいぞう）

1936年神戸市出身。上智大学大学院、哲学・神学・経済学修士、経済学博士課程修了。カトリック・

イエズス会司祭。上智大学経済学部名誉教授。1960年より草の根レベルでアジア隣国民衆・教会との連帯。1984年よりラテンアメリカ民衆との連帯、「解放の神学」の紹介。現在、WCRP日本委員会平和研究所所員。主な著書に『経営倫理と組織・リーダーシップ』21世紀へのビジネスマン』『解放の神学と日本』『アジアの隣人と共に生きる日本の教会』ほか多数。

ホアン・マシア (Juan Masia)

1941年スペイン出身、1966年来日。1973年東京でカトリック司祭に叙階。1975年スペイン・マドリッドのコミリアス大学で哲学博士号取得。1985年上智大学神学部教授。1988年、1998年コミリアス大学哲

学部教授。同大学神学部で生命倫理担当。現在、イエズス会司祭。客員教授としてコミリアス大学で人間学と生命倫理の集中講義。聖トマス大学講師。WCRP日本委員会平和研究所特任所員。主な日本語著書に『いのちの重み』『脅かされるいのち』『道徳の断章』『生命哲学』『暴力と宗教 闘争か和解か、人間の選択』ほか多数。

山崎龍明 (やまざき りゅうみょう)

1943年東京都出身。龍谷大学仏教学科卒業。同大学院修士課程修了。龍谷大学、駒澤大学講師。現在、武蔵野大学大学院教授、同法人理事、武蔵野大学仏教文化研究所所長。浄土真宗本願寺派法善寺住職。WCRP日本委員会評議員、平和研究所副所長。主な著書に『濁世を親鸞と生きる』『仏教

の再生』『親鸞の再生』『親鸞論攷』『恵信尼消息を読む』『歎異抄を語る』『親鸞聖人と讃入門』ほか多数。

世界宗教者平和会議日本委員会 平和研究所規約

【趣旨】

第一条

この規約は、財団法人世界宗教者平和会議日本委員会（以下「WC RP日本委員会」という。）寄付行為施行細則第八条及び第一六条に基づき、WC RP日本委員会平和研究所（以下「研究所」という。）の組織、運営及び活動について、必要な事項を定めるものである。

【目的】

第二条

研究所は、WC RP日本委員会の目的及び事業の達成に資するため、宗教と平和に関する諸問題の調査、研究及び提言を行うことを目的とする。

【事業】

第三条

研究所は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 宗教と平和に関する諸問題の調査及び研究
- (2) 宗教協力に関する調査及び研究
- (3) WC RP日本委員会の活動への参加及び協力
- (4) WC RP国際委員会及びアジア宗教者平和会議への協力
- (5) 機関誌の編集及び刊行
- (6) その他、研究所の目的を達成するために必要な事業

【所長及び副所長】

第四条

研究所に、所長一名及び副所長一名を置く。

- 二 所長は、研究所を代表し、研究所の業務を掌理する。

三

副所長は、所長を補佐し、所長に事故があるときは、その職務を代行する。

【所長及び副所長の選任】

第五条

所長及び副所長は、所員のうちから、研究所所員会議（以下「所員会議」という。）で選出した者について、日本委員会評議員会の議を経て、理事会の承認に基づき、理事長が委嘱する。

【所長及び副所長の任期】

第六条

所長及び副所長の任期は、二年とする。ただし、再任は妨げない。

【所員及び所員の定数】

第七条

研究所に、研究所員（以下「所員」という。）を置く。

二 所員の定数は、五名以上十名以下とする。

【所員の選任及び解任】

第八条 所員は、WCRP日本委員会の

目的及び事業に賛同し、研究所の事業に協力する意思を有する者について、第五条の規定を準用して選任する。

二 所員の解任は、第五条の規定を準用する。

【研究員の選任及び解任】

第九条 研究所に、研究員を若干名を置く。

二 研究員の選任及び解任は、所員会議の議を経て、所長が行う。

【特任所員及び客員所員】

第十条 研究所に、第七条に定める所員の他、特任所員及び客員所員を置くことができる。

二 特任所員は、所員であった者が、事情により、常時、所員会議に参

加できない者について、所員会議の議を経て、所長が委嘱する。

三

客員所員は、研究所の調査及び研究の必要に応じて、所員会議の議を経て、所長が委嘱する。

【所員会議】

第十一条 研究所に、所員会議を置く。

二 所員会議は、所長が召集し、議長となる。

三

所長は、研究所の事業を行うため必要と認められるときは、所員会議の議を経て、特任所員、客員所員及び研究員を所員会議に召集することができる。

【所員会議の審議事項】

第十二条 所員会議は、研究所に関する

次の事項に関し、審議し、決定する。

(1) 運営の基本方針に関すること
(2) 事業計画案の作成及び施行に関すること

(3) 所長及び副所長の選出に関する

こと

(4) 所員、特任所員、客員所員及び研究員の選出に関すること。

(5) 予算案の作成に関すること
(6) その他、研究所の運営に関する重要なこと

【機関誌編集委員会】

第十三条 研究所に、機関誌編集委員会（以下「編集委員会」という。）を置く。

二

委員は、所員会議において選出した者について、所長が委嘱する。

三

委員の任期は、二年とする。ただし、再任は妨げない。

【その他の委員会】

第十四条 研究所に、前条に定める委員会の他、必要に応じて、その他の委員会を置くことができる。

付 則 この規約は、平成十七年八月一

日から施行する。

「地球が危ない」——こうした警告が明確な形で発せられるようになったのは、1970年代に入ってからであった。1972年、ローマクラブが発表した「人類の危機」レポート『成長の限界』がそれである。

その後、国連の主導の下で、人口、食糧、水、森林、天然資源、砂漠化、気候変動の環境等の地球的課題に取り組む数多くの国際会議が開かれ、地球滅亡の危機を回避するための警告が発せられてきた。

そうした「地球的規模の窮状」に取り組むうえで新しい局面を切り開いたのが、1980年、アメリカ合衆国政府が発表した『西暦2000年の地球』であった。この報告書は、20世紀末までに予想される世界の人口、資源及び環境の変化を分析し、次のように述べている。

「もし現在の趨勢が持続するなら、西暦2000年の世界は現在にくらべ、いっそう人口稠密で、いっそう汚染され、生態学的にいっそう不安定で、かつ崩壊しやすい世界となるであろう。……革命的な技術進歩がないとすれば、地球上の人びとの生活は、現在よりいっそう不安定なものとなろう——世界の国々が現在の趨勢を変更するための断固とした行動をとらないかぎり」

この報告書の未来予測は、今日、確実に現実のものとなっている。しかし、それにしても人類はなんと愚昧なのであろうか。2008年の世界軍事費の総額は1兆4640億ドル（約144兆円）、核兵器については、米ロ仏英中にインドとパキスタン、イスラエルを加えた8カ国が計2万3300発以上の核弾頭を保有し、うち使用可能な核弾頭は8400発あると言われている。

地球環境の危機の最中で軍事力の拡大で覇を争っている現実には、愚蒙を超えて狂気の沙汰としか言いようがない。世界の宗教者は、叡智を結集し、私たちを取り巻き、そして襲いかかってくるあらゆる暴力をのり超え、共にいのちを守るため、2008年7月、北海道洞爺湖でのG8サミットに向け「平和のために提言する世界宗教者会議」を開催した。本号では、その会議のもつ歴史的意義、そしてさらに、現在、人類が直面している地球的課題を直視し、宗教者がこれらの課題にどのように取り組んでいるのか、宗教者の責任と使命、そしてその課題と役割について、所員諸氏の日頃の研究成果を報告することにした。そしてまた、世界の平和に取り組むWCPR活動についてのウィリアム・ペンドレイ国際事務総長からのご寄稿は、私たちに大きな勇気と自信、そして活力を与えてくれるものであり、深甚の謝意を表したい。

頒価800円(税込)

平和のための宗教——対話と協力 第3号

発行日 平成21年7月3日
編集 世界宗教者平和会議日本委員会平和研究所
編集協力 株式会社 佼成出版社
発行 財団法人 世界宗教者平和会議日本委員会
〒166-0012 東京都杉並区和田2-6-1(普門館内)
電話03(3383)2337 FAX03(3383)7993
E-Mail : info@wcrp.or.jp
http://www.wcrp.or.jp
印刷 株式会社 佼成出版社

WORLD CONFERENCE OF RELIGIONS FOR PEACE(WCRP)

CONTENTS

Part One

2008 Peace University Symposium

Theme

The World Religious Leaders Summit for Peace:
Toward the G-8 Summit by Lake Toya, Hokkaido

Opening Address

by Eiin Yasuda, executive director of the Japanese Committee of the World Conference of Religions for Peace;
chief abbot of Yakushiji

Second Address

by Keishi Miyamoto, secretary-general of the Japanese Committee of the World Conference of Religions for Peace

Keynote Address

"Global Environmental Problems and the Role of Religion (and the People of Faith)"

by Akimasa Sumi, professor at the Center for Climate System Research, the University of Tokyo, director of the Transdisciplinary Initiative for Global Sustainability

Peace Studies

Symposium

Coordinator

Yoshiaki Sanada, professor emeritus of Chuo University

Panelists

Junichi Sato, director of the International Center for Research and Development of Metatechnica Technology

Minoru Sonoda, professor emeritus of Kyoto University

Yasuaki Nara, professor emeritus of Komazawa University

Keizo Yamada, professor emeritus of Sophia University

Closing Address

by Takeshi Nishida, executive director of the Japanese Committee of the World Conference of Religions for Peace; director of Ittoen

Part Two

"Religions for Peace: Reflections on Our Path"

by William F. Vendley, secretary-general of the World Conference of Religions for Peace

"Considerations on the Concept of 'Shared Security' "

by Yoshiaki Sanada

"The Contribution of the People of Faith toward the Common Ethic of Humanity"

by Juan Masia

"Crisis in the Age Lacking a Sense of Altruism: Reflections on Buddhism and Economy"

by Ryumyo Yamazaki

"Five Principles of the Shared Security That Will Protect All Lives"

by Keizo Yamada

"Ideas Involved in the Vision of 'Shared Security' and a Logic of the New Syncretism (Religious Pluralism)"

by Minoru Sonoda

Profiles of Authors

Bylaws of the Peace Research Institute, the Japanese Committee of the World Conference of Religions for Peace

Postscript

